女人藝術

八月號



第一卷 第二號

武者小路實篤先生序
岸田劉生先生戲畫
生田花世女史跋文

▼▼江口章子女史新著

（發賣）

詩文集 女人山居

交蘭社

▽東京小石川區江戸川町一八
▽振替東京四〇二七九
▽電話小石川三一五一

▽四六版木版手摺表裝
▽箱入上製頗る美本
▽定價金一圓四十錢
▽送料金十六錢

「想ひやるかたなき人の世の旅も、詩にめぐまれ、歌に嘆きを寄せるところによつて、苦るしみは苦るしみ、寂しさは寂しさだけの救ひもなぐさめも大きいもので有ることを、私は今、四十路の人の靜かな秋の湖畔に向つて、朝霧の中をゆく一羽の白鷺と、ともに深くも想ひ味はされるのである。」と、著者が精進の麗筆に成るこの美しき詩文集こそ、眞に文化の女性に應はしき空前の良著で有る。





——讀賣新聞社會部寄贈——



過去を語るといふことは、未來に望みを失つた年寄か、いゝ意味でも惡い意味でも、いくらか毛色の變つた生涯を辿つた者かでなければ、あまり興味のないことではないでせうか。

まだ年寄といふほどでもなく、おまけに入學願書に添へて出す履歴書同然の文句以外に書くことのないほど、何の變哲もない平板無味な、單調そのものといひたい私のこれまでの生活では、とりたてゝ語るべき何ものもないのです。よいこともせず、惡いことをした覺えもなし、趣味もなければ娯樂もなし、出世もしなければ落魄もせず、省みれば――などゝいつてもそんな面倒なことは好かない性分ですが――たゞボンヤリと生きてきたといふだけ。このまゝで死んだら天國へまはしたものか、地獄が相應か、神樣も佛さまも詮議におこまりのことでせう。

山川菊榮



木の形や花の色を見てゐると、何となくその形や色はおのづからなる其木その花の、かくあり度いと願ふ性をあらはしてゐるやうに思はれてくる。

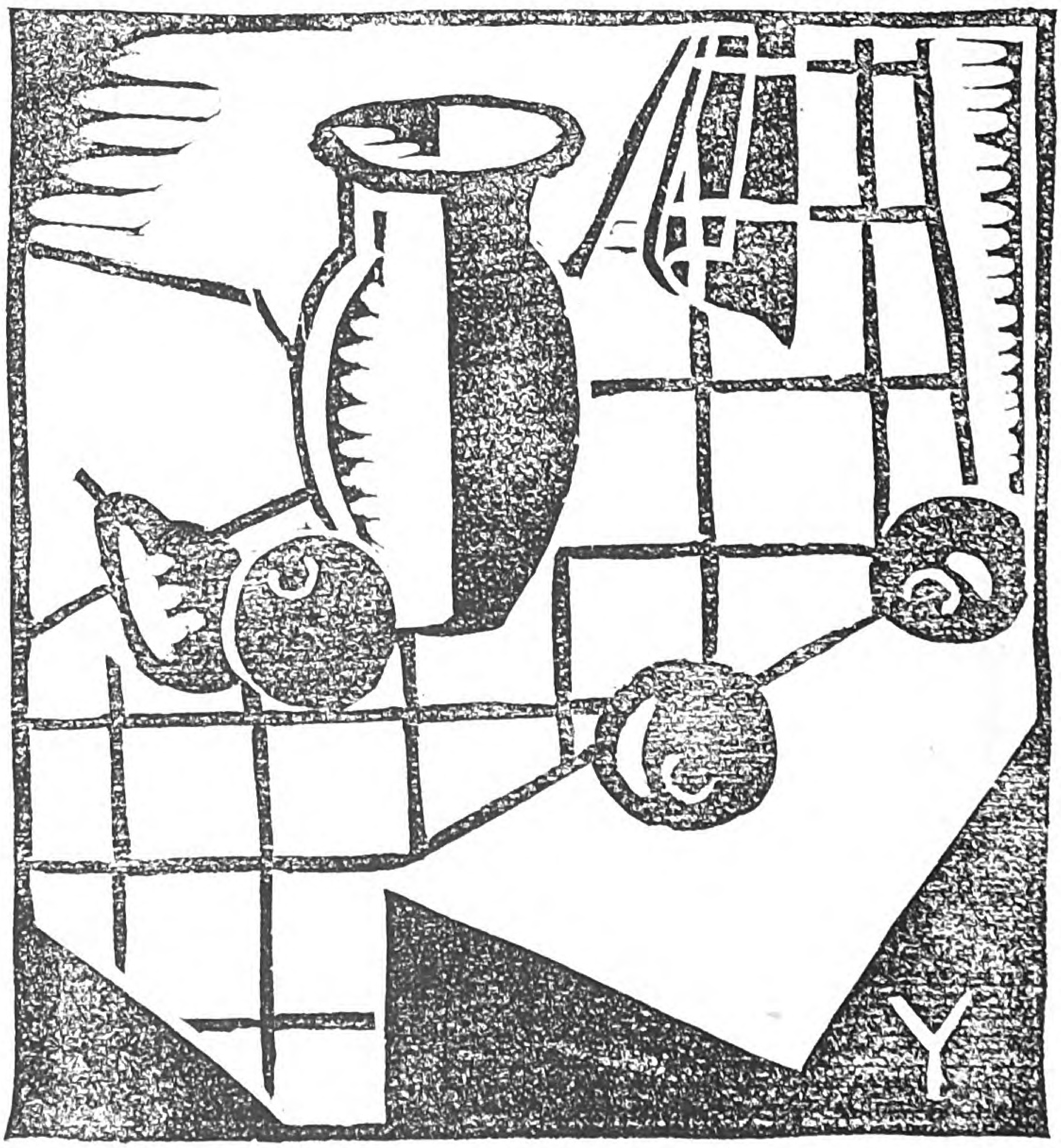
たとへば秋草などに見るも、桔梗のあのすつきりと山はなに姿をたゞして蕾も花も上品な紫色にひきしまり咲くそれも、撫子の、節にすがつてしほらしく立ち上つたやうな細莖にうつすりと紅い花が咲くそれも、見れば見る程その好みその性のかくあらはれ來るらしい思ひがある……。

人の姿も人の好みも、私は時に木や草に向つてゐるやうな心で、其形、その好みを眺め、その人が木や草ならばどんな色の花を咲かせるだらうなどゝ限りなく空想してゆく私のくせである。

（今井邦子）

女人藝術

八月號



知識婦人についての考察

らいてう

明治末期から大正初期に亘つて、資本主義制度の確立とその發展と共に、我が思想界を支配したブルジョア個人主義に刺戟され、中産階級の少數知識婦人によつて、婦人の人格的自由、思想の獨立、男女同權、機會均等などの要求が聲高に叫び出されてから、かれこれもう二十年、その間何のかのとは言ふものの、時代の力は封建的、官僚教育家連を置き去りにして、女子の高等教育は、女子私學の勃興につれて急速に進歩し、普及し、婦人の知的水準はともかく高められ、所謂知識婦人の數はふえる一方でありました。

さうして是等の知識婦人の大部分は、婦人の人格的自由や獨立は、經濟的獨立をその基礎的條件として始めて確保されるといふ幻影に導かれ、自から好んで職業生活へ、社會生活へと進出し、教員、記者、官公吏、事務員、社會事業家、社會教育家、社會運動家、女醫、著述家、女優、藝術家等々の知的勞働婦人の一群が社會的新存在として出現しました。尤も是等の知的勞働婦人を日と共にかうも多數に出現せしめたのには所謂獨立思想と共に、否その奥に、もつと根柢的な社會原因として資本主義經濟組織の發展過程に於ける中産階級の經濟事情の變化といふ社會的現實のあつたことは言ふまでもないことでありま

すが、しかし是等の知的獨立婦人は、いづれも封建的家族制度を向ふに廻し、個人主義のために闘つた大小のノラであつて、その心は新生活に對する輝かしい夢と、誇とでみたされてゐました。

しかし扉の外に、街頭に自由をもつ人間としての第一歩を踏み出した是等のノラ達はその職業生活に於て、社會生活に於て、――彼女たちの多くは無論俸給生活者でありました――何を見、何を學び、何を得たでありませう。彼女等の久しい夢であつた婦人の人格的自由、思想の獨立が果してそこにあつたでせうか。否々。

成程自分自身の働きによつて、自ら衣食するといふことに多少の個人的滿足はあつたに相違ありません。又かういふ個人的な意味での、言ひ換へれば父又は夫といふ一人の男性に寄食してゐないといふだけの意味での經濟的獨立ならそこに得られたに相違ありません。しかし彼女らはかうして人間としての自分自身を社會的に確立しつゝあるのだと思つてゐたとき、もう既に今迄とは別な他の支配の下につながれてゐたのでありました。すなはち彼女等は言ふまでもなく社會的には被支配階級に屬する一個の雇傭者であつたのです。たとへそれが頭腦勞働であれ何であれ、およそ無産にして、勞働によつて衣食する限り、（彼女等は教育を受けることが出來ただけの經濟的餘裕ある中産階級に生れ、さうして成長したのではあつても、所謂經濟的獨立後の彼女自身は無産者である上に、彼女等を生んだ中産階級それ自身も經濟的には漸次無産階級となりつゝあるのでした）結局はやはり支配され、服從させられるより外なく、若し支配的地位にあるものに對し、腹藏なき意見を述べたり、批評がましいことを言つたり、時に反抗でもしやうものなら、それこそ忽ち危險思想！危險人物！といふことで、いつその地位を失はねばならぬかも知れず、又それほどでなくとも、常に自分を僞り、妥協していくのでなければ社會的成功は望み難く、その上こゝでも又性的差別待遇によつて、女子であるが爲めばかりに同じく働いて、同じく酬いられず、且つ昇進にも制限があるといふやうな、とかく不安な、さうして不利な自分の地位を彼女等は發見しない譯にはいきませんでした。しかも彼女等は若く、單純にして、純粹であり、良心的な、しかし、社會的無知な理想家であり、その上新生活に對する最初の幻影が大きかつたのでありますから、それだけ現社會に直面して、その不正、不合理、矛盾、虚僞、墮落を感じることも大きく、又それだ

けその心にうけた失望、幻滅、悲憤も大きかつたわけで、それは時として彼女等を、あれほど勇敢だつた彼女等を極度の憂欝に陥れたほどでありました。

それなら彼女等に感情の自由があつたでせうか。

戀愛の自由、母たることとの自由は、彼女等が、婦人の人格的自由や思想の獨立などと共に、その經濟的獨立の基礎の上に夢みてゐたことでありました。しかし既に人格的自由も思想の自由も獨立も許されず、その上絶えず經濟的危惧の伴ふところの所謂經濟的獨立生活に於て、彼女等が考へてゐたやうな本當の戀愛の自由や母性の滿足が得られよう筈のないのは明白なことで、こゝでも彼女等は個人主義乃至自由主義が謂ふところの自由とは、獨立とは一つの幻影であり、にせものであることをにがくしくも經驗しなければなりませんでした。

彼女等の或ものは、戀愛を肯定し、實行し、しかも在來の封建的結婚生活をさけ、戀人として、友人としての男女の共稼的同棲生活を選びました。しかしそれとても現社會に於ては、ともすれば一般家庭生活への惰性的逆もどりの危險多く、殊に經濟的餘裕を缺く限り、女の方に家庭的雜務がより多く落ちてくることは免れ難く、結局事實の上では女は家庭奴隷と社會奴隷といふ二重の重荷を負ふことを餘議なくされ、過勞に苦しむことになり、その上何人かの子供の母にでもならうものなら、それこそ社會生活と家庭生活との間の要求の矛盾や衝突や、母子生活が今日社會的に全く何の安定も保證も與へられてないための絶えざる經濟的不安は一層の深刻味を帶びて彼女を日夜惱まさずには置かないでせう。又或者はその職業生活に全力を傾倒したさに、又はさうすることを餘議なくされたゝめ、戀愛又は結婚の機會を失ひ、或は自から避けて、獨身生活を辿り、一切の女性的情感は抑壓され、枯渇し、こゝに婦人の中性化、男性化がありました。しかし又他方にはこれと全く相反する婦人の娼婦化がありました。滿されない戀愛感情を、戀愛を遊戯化し、假想乃至擬戀愛によつてまぎらさうとする娼婦的傾向から、更に進んでは一層末期的な、虚無的な思想氣分から、高等娼婦の生活によつて性的享樂と物質的享樂とをあはせ得やうとする

未來なき自暴自棄的頽廢婦人さへ知識ある婦人の中に見出されるのでした。今日モダンガアルと一口に呼ばれてゐる一群の婦人の中にもその一部には確にこの種の傾向の婦人があるやうに思はれます。

しかも今日知識婦人はおしなべて、同じ階級の男子同樣、多かれ少かれ經濟的不安に襲はれつゝあります。人形であれ、又家庭奴隷であれ、とにかく男性に寄食してゐられた頃の婦人は直接的な經濟危惧なしに生きられました。しかし自らの勞働によつて衣食する以上そこに多少の經濟的危惧を伴ふのは止むを得ないことではありますが、しかし現在知識婦人が經驗しつゝある經濟不安はかゝる微温的な、常態的なものでなく、今日崩壞期にある我が社會の特殊現象の一つで、無論中産知識階級全般に亘るこの深刻な經濟難、生活不安なのであります。

かうして經濟的必要にかりたてられ、職業市場に殺倒する知識婦人の數は今日增加する一方なので、婦人の職業分野は大に擴張されつゝあるにも拘らず、今や婦人職業界にも就職難を來し、知識男子に見ると同樣の就職難による生活難を更に加へつゝある現狀であります。私の狹い交友間でさへ女子大學其他の專門學校卒業の婦人で、今日職を求めて得られずにゐる者が何人かあります。殊に是等の婦人は一般勞働婦人と異りその知識や教養が却て禍し、その職業に伴ふ社會的地位とか體面とかに拘泥するきらひがあるだけ、彼女等が現に體驗しつゝある就職難、生活難は勞働婦人のそれよりも或意味で一層痛切であり、深刻であると考へられなくもありません。

さて、知識婦人は既述のやうな生活の各部面に於けるさま〲の惱みを體驗しつつも、曾て個人主義的立場に出發し、そこに生活の基調を置くものからその多くは、やはり婦人參政權をはじめ一切の男女平等の權利の獲得、婦人のみの特殊的權利の要求、其他さま〲な社會政策的施設による局部的社會改造によつて、是等の惱みは取除かれるものだと信じ且つその運動を繼續して來たことは現に存在するいくつかの婦人團體が證明する通りであります。

しかし、今や是等の知識婦人たちも、その運動――形式的權利の獲得運動の過程中にあつて、單なる形式上の完全なる平等の實現も本質的平等を伴はず、從つて眞の解放をもたらすものでもなく、言はゞ解放戰のために備へる一つの武器としての價しかないことを、同じ軌道を自分たちより一歩先に走りつゝある所謂先進國の同性の生活によつて學び知ると共に、一方彼女自身の生活に於て直面するさま〴〵の社會的現實に搖り動かされ、彼女等の心の中にも遂に階級的意識をよびさまし、次第に明瞭の度を增しつゝあることは、あまりに當然なこととは言へ、確に注目すべき一大變化でなければなりません。

彼女等は既に個人主義では解決出來ない多くの婦人問題、社會問題に逢着しました。さうして是等の問題の根柢に橫たはる社會制度――生活の基礎的問題である經濟組織に疑惑の眼を向けねばならなくなりました。曾ての彼女等が、男性に向けた反感や反抗的氣分は今や今日の資本主義制度に、資本家階級に轉ぜられ、更に無產階級の擡頭とその解放運動に共鳴と感激を喚び起し、他方その指導原理たる社會主義思想に啓蒙され、かくして知識婦人の思想生活は、社會主義によつて早晚一應の整理を見るに相違ない傾向を見せてゐます。

既に知識婦人は無產階級者としての自身の立場を自覺しました。又自覺はやがて彼女等を促し、更に婦人として、又無產者としての同一立場にある無產勞働婦人大衆に、共同の戰線を張るべく呼びかけずにはゐられなくすることでせう。否、すでに呼びかけられてゐるではありませんか。（しかし私がさう言ふ意味は、現在少數の「知的お先走り婦人」が無產階級の陣營内に無產婦人運動の指導者として、幇助者として個人的に存在するのとは違つてゐます。說明するまでもありませんが。）

しかしこゝに知識婦人がもつも一つの弱點があります。

それは知識階級はそれが中間階級であるといふことによつて、ともすれば無產者階級から、當然資本家階級の擁護者、若しくは幇助者であるかの如く取扱はれるおそれのあることであります。尤も知識階級婦人の中には婦人として比較的高い社會的地位をかちえ、相當多くの收入を得て、現社會内に複雜な生活の根を深くはつてゐるやうな所謂成功婦人は、自然資本家階級

の支持者であり、現社會秩序の維持者であることは免れ難いことで、是等の婦人たちが自己の個人的利害を離れ、婦人としての無產階級的立場に來るといふやうなことは、特に彼女の良心と聰明とにまつより外ないことでありませうけれど、かういふ婦人は現在の日本に於てはあまりに少數で、とり立てて問題とするに足らず、又もしその他の知的勞働婦人の中にも同樣の立場をなほとるものがあるとすれば、それはいまだ明確な無產階級的自覺をうるまでの機緣に接しえなかつたがためであり、或は今日可成りに力强い手を伸ばしつゝある反動勢力によつて、一時その目ざめを妨げられてゐるためかであつて、彼女等も亦いづれは來るべきところに來るものであり、又來らねばならぬものだと私は信じてゐます。

以上は專ら知的勞働婦人について述べて來ましたが、しかし知識あり教養ある婦人で、しかも、今日なほ自からの勞働によらず資本家階級男子の搾取生活に寄生する或る種の文化的家庭婦人たちも早晚かのヘレン（アプトン、シンクレヤの「二階の男」の女性）の恨みを惱まねばならなくなることでありませう。

二十年前、個人的意識に目ざめて、人格的自由ある人間として生きるべく、封建的家庭生活を捨て、社會生活の第一步を踏み出した日本の知識婦人等は、今日更に社會意識に目ざめ、婦人として、無產者としての眞の解放を得べく、無產階級的意識をその生活基調とする更生の第一步を又も新に踏み出さうとしてゐるのです。

實に知識婦人が無產婦人大衆と共に同一戰線に立ち、全無產階級解放の運動に合することは、やがて彼女自身を婦人として又無產者としての二重の桎梏から解放する所以である、と共に、未來社會に於ける彼女の新しき社會的地位を獲得する唯一の道でなければなりません。

（昭和三年七月十日）

婦人參政權獲得方法に關する私見

赤松明子

去る四月二十日から開かれた第五十五特別議會に對し、婦選獲得の大衆的運動を起さんが爲めに、私達は婦選獲得共同委員會なるものを設けた。この委員會の構成分子は、婦人參政同盟、日本婦人參政權協會、婦選獲得同盟、社會婦人同盟、勞働婦人聯盟、全國婦人同盟、關東婦人同盟、全關西婦人聯合會の八團體であつた。この共同委員會で屢々問題になり、また所謂既成婦人團體と無産婦人團體との間に一つの大きな開きをみせたのは云ふまでもなく婦選獲得の方法に關してであつた。既成婦人團體の意向は、勿論無産政黨によつての婦選の獲得は望ましいことではあるが、併し必らずしも無産政黨と限つたわけではなく、民政黨政友會孰れの政黨に依つてでも、早く婦選を貰ひたいといふのであつた。之れに對し無産婦人團體の方は、飽くまで無産政黨による無産階級的婦人參政權の獲得を主張したのであつた。

從來その政策に婦人參政權の獲得を掲げてゐるのは無産政黨を措いて外にない。また婦人に對する經濟的法律的差別の撤廢を叫んでゐるのも獨り無産政黨のみである。然るに最近政友會は、その幹事會に於て婦人に參政權を與へることを決議したといふことが六月十八日の新聞紙上に發表された。すると民政黨は、政略的對抗の必要を感じたものか、直ちに婦人に市町村公

民權を與へることを發表した。場當り的な人氣取りは有產政黨の習ひとはいひながら、最も巧妙な手品師の役割を演じた有產二政黨の婦人參政權案について、私共は無批判に之れを受入れてよいものだらうか。有產諸政黨が俄かに婦人參政權を叫び出したのは、實際に婦人の要求が正しいものであるといふ觀念に基いてなされたのであらうか。私は斷然否と答へる。從來の行動に徵すれば、有產政黨は、如何なる事でも自黨の爲めに有利なことでなければ、それが如何に國家の爲め重要な事であらうと些かも顧ないのが常であつた。かう考へて來ると、最も反動的といはれる政友會が突如として此の提案をなしたのは、婦人選擧人を自家に有利に利用し得る見極めがついた爲めと、もう一つは現內閣最近のドン底的不人氣を幾分でも取り返さんが爲めであることは疑ひない。試みに新聞紙上に表れた參政權の內容について些細に點檢すれば、それはよくわかる。政友會の婦人參政權案は、婦人に選擧權のみを與へ、被選擧權は暫らく留保し、又年齡の制限については三十才以上を限度としてゐる。又民政黨も年齡三十才以上の程度を條件とする婦人公民權の附與を主張してゐる。之れに反し無產黨は「滿二十才以上の帝國臣民は男女性別なく選擧權及び被選擧權を有す」と主張してゐる。

この三つの婦人參政權案を比較してみるとその根本的相異がはつきり解る。眞に婦人の人格を尊重し、婦人の地位生活を保護し、婦人自身のために婦人參政權を要求してゐるものは無產黨である。玆に完全なる婦人の解放を望む私共は、敢然と無產黨支持を聲明すべきである。そして無產政黨による無產階級的婦人參政權の獲得に邁進しなければならぬことは今更いふまでもないことである。この意味に於て、私は、所謂既成婦人團體の進步的婦人すらもが、單に功を急ぐのあまり、婦人參政權の內容を少しも吟味することなしに、有產政黨にお百度詣りをしてまで、それを獲得せんとする態度に對して甚だ嫌らなく感ずるのである。

しかし實際問題としてから考へる人があるかも知れない。勿論無產政黨による婦人參政權の獲得が望ましいことはわかりきつたことではあるが、無產黨が獨自の婦人參政權法案を通過せしめ得るまでには何年かゝるかわからない。今から三十年五十年先きの事であるかも知れないと。私はこの點に就いてはから考へる。勿論無產政黨代議士が議會に過半數を占めるまで待つ

とすれば先の長い話であるが、婦人參政權を獲得するのには必らずしも過半數の無產黨代議士を必要としない。無產政黨は現時の如き政治狀勢の下に於ては、少數黨と雖も、可成り重要な役割を演ずることが出來る。そして又無產政黨の勢力は今後目覺ましい發達を遂げることを期待することが出來る。今は無產政黨は法律的にみて男子政黨であるが、實質的には男女共通の利害を代表する無產大衆の政黨といつて差支ない。治安警察法の改正によつて法律的にも無產政黨が、兩性共同の無產政黨となる日も近き將來の事であると思はれる。現在に於ても無產政黨が婦人の政治要求を最も確實に代表し得るものであることを信ずるが、我々婦人大衆の輿論の喚起によつて、今後一層無產政黨をして婦人の意志を忠實に代表する政黨たらしむることも決して困難なことではない。かう考へる時、私達は婦人參政權に對する婦人大衆の自覺と奮起とを促すと共に、その勢力をあげて無產政黨の勢力に合流することに努力をむけなければならぬ。婦人大衆の輿論の流れが日一日と水量を增して、どんな强固な堤を以てしても堰き止めることが出來なくなつた時には、堤は獨りでに壞はれる。その時には有產政黨にお百度を踏まなくても、彼等は時勢の力に押されて餘儀なく進步的な婦人參政權に贊成せざるを得ないであらう。故に私達に必要なものは最も强固な婦人大衆の輿論の力である。即ち婦人參政權は、上から與へらるべきものではなく、無產政黨に合流する婦人大衆の力によつて獲得すべきものである。

こゝに於て、私達無產階級的婦人參政權の主張者の現在採るべき方法は、唯だ一つである。即ち上からお情けに與へられる制限付の婦人參政權獲得の爲めにではなく、婦人大衆の力によつて正當な權利を奪還する爲めに、且つまた一度び之を獲得したならば、婦人大衆をしてそれを最も公明にまた最も有効に行使せしめんがために、一方婦人大衆の輿論の喚起に努めると共に、他方婦人大衆の教育に全力を盡すことが、眞の無產階級的婦人參政權獲得の唯一の正しい道であると信ずる。

革命と戀愛

ゼシカ・スミス
神近市子

これ迄は、私共は成文の法律即ち表面の形式を扱つて來た。私共は戰爭と饑餓との病的な何年かにわたつて生じた混亂と、革命によつて行はれた變革と、新しい樣式が社會の事情によつて定められたのを見て來た。では、男女間の實際の結合は、新しい輿論は、又靑年男女の態度はどうであらう？ どんな新しい道德律が發達しようとしてゐるか？ 共產主義者はどんな道德を行つてゐるか？

共產主義者は、永遠の道德的眞理といふものはなく、たゞ社會の個々の階級がそれ自身の規範を造り出すといふ假定から出發する。この點が彼等の道德と他の人々の道德との間の主要な相違である。といふのは、この土臺の上に展開された行爲の法則をよく研究して見ると、彼等の原則的行爲律と長い間人類を支配して來たそれらの行爲律との間には、實に奇怪な相似があるからである。彼等のこれらの行爲律の適用は、又別の問題である。彼等は自分達の階級以外の人々に對する時には、全然異なる立場を適用するに少しも躊躇はしない。彼等は口に『汝の父と汝の母とを敬へ』と云ひ、しかも一生の間毎日この戒めを破ることはしない。彼等は、『お前の兩親がよい革命家であるなら、これを敬へ――が、さうでなかつたら、彼等を敎育せよ』と云ふ。

個人の生活を支配する法則は、社會の見地から考へて見られる。共產主義者の哲學は、個人の行爲に何等の先天的な制限を置かない。それは全體としての社會、今日存在するやうな社會でなく、まさに建設されようとしてゐる社會の見地から批判される。それと背反するものは、どんな事でも惡である。それに何等か寄與するところを持つものは、どんな事でも正しいのである。レーニンは共產主義者の道德を『勞働者を凡ゆる形の搾取に對して結合せしめ、人類の社會をより高い水準に引上げるに役立つところの凡ての事』と限定した。

個人に有害なことは、全體の人間に對する個人の義務の遂行を妨げるから、どんなことでも又必ずその個人が屬する集團を損ふことといふことを經驗が證明して、又個人に車の輪を戻すかどうかは、未來が決定する問題である。がしかし、新しい社會はもつと完全に發達した

個人の助力によつてのみ建設されるといふ事實は 既にある程度まで認められてゐる。

革命が展開してゐた間は、革命それ自身が行爲の法則を創造した。その間は未來の社會の爲めには この行爲がよいか又はあの行爲の方がよいか考へてゐる暇がなかつた。各自の場合が、迅速な決斷と積極的な行動が必要であつた。より嚴格な、より年長の共産主義者達はその時分に起つた凡ての性や戀愛の事については、頑固な態度を持ちつゞけた。何れにしても、戀愛の比較的に美しい局面にはかゝずらつてゐる暇がなかつた。人間的な要求は、人が急ぐ晝飯の食卓で一杯のコーヒーをとるやうに、急いで慌しく充たされた。

が今や安定時が來たので、彼等は目前の革命的の利便以外の何物かの基礎に立つて行爲を批判し始めることができるやうになつた。同じ原則は適用される。しかしそれが適用されるのは、單に一日とか一時間とかの出來事に對してよりは、社會の可變的な發達との關係に於いて適用されるのである。これは一定の法典の制定、特殊の行爲の法則を可能にする。未來の革命的理想を見失ふことなしに、健全な現實的な立場に於いてこれをなし遂げようとする試みは、幾多の障害に出會はした。第一には、前に述べた通りの不注意な態度の反撥があつた。第二には、飢餓と疾病の過勞と、自分達より年長の青年の間に於いて經驗された過激な變動が、凡ゆる種類の變態と無節制とに導いた結果として、多くの年少者に影響を與へてゐる肉體的心理的の混亂があつた。第三には、この土地の上に豐富に花を開いたある種の理想論の過度の發達があつた。そして最後には、一部はこれら凡てに對する反動として極端な禁慾論があつた。それは人生から凡ての愉樂的な方面を、その禁令の中には遊戲、唱歌、ダンスをすることをも含めてこれを排除し、娯樂と云へばごく些細なもので政治上の鑄型に入れられねばならないと主張するもので、それ又同じやうに常規を逸した主張の中に、それ自身を表現してゐた。

長い間、地下運動と豫備鬪爭によつて鍛はれ試みられて來た比較的年長者の或る者が、革命後の再整理をしようとして稍々狂暴に近かつたとしたら、若い人々が心に均衡を失つたのは少しも不思議ではない。內亂は、彼等がまたその學課を諳誦してゐるうちに彼等の上で勃發した。革命と內亂の苦しみの日は、殘留してゐる僅かの物資が公平に凡ての者に分たれた軍事共産主義時代の一般的殉難の日に代つた。これら幼時に彼等が例へばどんな苦しみを經驗したにしても、それ以後の生活はこれに比較すべき刺戟を與へることは出來なかつた。集會や政治的社會的の活動が、彼等の日を充たし始めた。政治上の書籍が彼等の荒んだ若い頭につめ込まれた。そして凡ゆる方面で彼等は新しいそして變つた種々の思想で砲撃された。そこに新しい且つ邪魔な誘惑をもつて新經濟政策が來た。青年が混亂せしめられ、彼等の年長者が彼等が起した各種の混亂の爲めに勞するのは、少しも怪しむに足りないことである。

ブハーリンは、第五回のコムソモル大會の演說で、これらの事實の一部を述べた。始めに彼は、革命前又は革命の爆發そのものゝ中で必要であつたが爲めに、物を器械的に信仰した一團の人々があつたといふことをのべた。革命前に革命的であつたある種の事柄は、これらの人々の法典の中では習慣として殘つた。もし喫烟が前に或る場所で禁じられてゐたとすると、ある青年達は凡ての禁烟禁酒の宣傳を侮蔑

するには、階級意識をもつ勞働者と共產黨員とは凡てシガレットを四本口にくはへて集會に出席することが必要だと考へた。彼等は又、もしブルジョアが行儀作法が正しかつたとしたら、プロレタリヤは尙ほ一層無作法でなくてはならない、間違つても屋內で帽子を被り床に唾を吐き散らすことを忘れてはならないと論じた。淸潔といふことがブルジョア習慣の一つである以上、革命家はシヤツには襤褸を下げ衣服は垢じみてゐなくては眞の革命家とは云はれなかつた。そして何事でもブルジョア風に反對なことをよくすればするほど、その人の革命的精神は大きいとされた。この事は、日常行爲の上に適用されたばかりでなく、又戀愛の上にも適用された。鬪爭の最中に戀の媚態を示す時間を持たなかつた眞の革命的な戀人達は、その後も念入りな求婚をして時間を費すことは出來なかつた。簡單明瞭に要點に話を運んだ。そして粗雜な言葉と『無骨』とを嫌つた若い娘達は、まだブルジョア風の偏見を捨て切らないものとして批難された。

　コロンタイは、——積極的な形ではないが『三代の戀』と題するその短篇の中で、この態度を辯護してゐる。この小說の最初の物語は、マリー・ステパノヴナのロマンチックな戀物語である。彼女は、自分が愛した男の爲めにツアーの軍隊にあつて陸軍大佐を勤めた夫を捨てゝ世間に醜聞を流したが、得たものは幻滅のみであつた。そしてその後の生涯を地方に於ける巡回圖書館の經營に捧げた。彼女の娘オルガ・セルゲエヴナは、苦惱に滿ちた戀物語をもつて、コロンタイの許に助言を求めて來る。僚友である一人の革命家と結婚をした彼女は、流刑地をのがれて出て、ペテルブルグに住むMといふ技師の家族の家庭敎師となつて隱れることゝなる。政治的見解の上では大きな相違を持つ二人の間には、彼女が夫を忘れぬにも拘らず苦しい情熱的な愛執が生れて來た。母親の信條は、オルガが戀人の爲めに夫を捨てることを要求する。しかし二人の男の間にあつて心を割かれ乍らも、オルガは最後に夫のところに歸つて行つた。彼女の夫は、その間に彼女が技師の娘を產んだにも拘らず、喜んで再び彼女を迎へたのであつた。何年かゞ經つて、革命が終り、彼女とその娘のゲニヤとは彼女が戀愛に落ちてゐる若い同志のアンドレイと共にモスコオで一つの室に生活してゐる。彼女の仕事は彼女を家庭の外に呼び勝ちである。それで彼女はアンドレイとゲニヤとが親しむことを喜んでゐる。ある晩、家に歸つて來た彼女は、二人が抱擁してゐるのを發見する。彼女が絕望してコロンタイに指導を求めて來るのは、この點についてゞある。彼女を苦しめるのは、抱擁そのものではない。彼等が彼女に何事をも告げなかつたこと、彼等が彼女の感情を問題にしなかつたこと——彼等の間には眞の戀愛さへもないといふことである。ゲニヤは姙娠してゐる。しかし彼女は責任を分つものが、アンドレイであるのかもつと別の仲間であるのか知らないのである。そしてゲニヤは何と辯解するか？　黑く縁どつた眼をもつて、丈け高く上品でハキ〳〵としたゲニヤは、既に『責任ある黨の働き手』であるが、コロンタイの求めに應じて彼女のところにやつて來る。

『あなたは、私が彼等と戀愛に落ちるまで待たないで男達と生活するのを驚いて入らつしやるんですか？……私は澤山小說をよみました。そして戀愛をするといふことが、どんなに澤山の時と精力とを要するかといふことを知つてゐます……ところでこの何年かといふもの、何時私共に閑暇がありました？　何時でも忙しくて——何時でも他の雜

多のことが私共の心を一杯にしてゐる。例へば誰かゞ好きだと思つても、その人は戰地に呼ばれるとか、他の都會にやられるとかする——でなければ自分の身が忙しくてそれを忘れてしまふ——どちらにも僅かでも幸福となるなら、一寸の間を互ひに暖ため合ふことにどんな害があるでせう？』

『何故私がそれを母に告げなかつたかと云ふんですか？私は母を傷けたくなかつたんです。もし私共がお互ひに戀し合つてゐたのなら、それは母にも告げたでせう。が、私は母から何にも奪ひはしません。私に理解できないのは、彼女は何故彼が趣味の點で年齢の點で彼女よりも私に近かつたこと、彼が私と凡てのものを分つたことを氣にかけず、——彼が私をキスしたといふことばかりを……それも彼女自身の身では彼にキスをする閑暇さへないのですのに……氣にしてゐることです。母はそれが變態的で不道德的であり、私の年齢で眞の戀愛を知らないといふ考から苦しんでゐるのです。けれど私は自分のやりかたの方が——嫉妬もなく苦痛も知らず、ずつと好いしずつと簡單だと思ふのです。私は彼女のやうな戀はしたくありません。でなかつたら、私は何時働けばいゝのです？』

彼女が立去ると、コロンタイは自分自身に訊ねてゐる。『正しいのは誰か——新しい感情と、新しい理解力と、新しい見解とを持つた新しい階級？』そして『同志達、お急ぎなさい——私達は集會に後れますよ——それに、まだ仕事が澤山、澤山あるんですよ』といふゲニヤの聲が廊下から反響して來る時に——私共はコロンタイがゲニヤの味方であることを知るのである。

けれど、凡ての若い人がゲニヤではない。この哲學が、多くの人々に早合點をされ曲解されたのは、止むを得なかつた。その人々にとつては、それは墮落の口實でしかなかつた。そしてコロンタイ自身が、それを何ら永久的な解決であるとして呈出したのではなかつた。彼女はたゞこの態度は『魂が直接に革命の利益とならないといふことを知つてゐる橫線の上に、鬪爭的集團の道德力を空費することが不合理である』が如き非常に危急の場合には必要だといふことを指摘した迄である。その時期が過ぎたなら、その時こそは又『戀の苦惱と歡喜とを經驗する爲めに翼あるエロに云ひ寄り』凡ゆる情緒を——少くとも社會的の價値を有する情緒を鼓舞すべき時である。

スワルドロフ大學のザルキン教授は、コロンタイと正反對の極にゐる。そして大部分の時をコロンタイの教義を打消す爲めに費してゐる。ソビエット聯邦の現在の產業主義化の政策は、すぐに消費すべき物資の生產よりも生產の手段たる器械の生產に集中を要求してゐる。ザルキン教授も、性を產業主義化しやうとする。彼の信ずるところによれば、性は彼等の未來の鬪爭を繼續すべき強い健康な階級の生產手段としてのみプロレタリヤに利益を齎らすのである。ザルキン教授の說によれば、『例へば階級の敵の如き道德的に好ましくない址づくべき對象に向つての性的誘惑は、鰐魚又は猩々に向つての人間の性的誘惑の如くに墮落である』彼は性をある種の歡喜と享樂の源として認めてはゐるが、又勞働者階級は『この享樂をその仲間の凡ての享樂の總和の中に於いて研究し、その有要性と有害性との度合を決定し、その使用を革命的利便を目標として定む』べきであると感ずる。彼の十二誡は次の如くである。

一、プロレタリヤの間には、性生活の早熟は不可である。
二、結婚前の完全な節制、結婚は社會學的に生理學的に完全な成熟の條件の下に於いてのみ行へ。
三、長い共同生活を營まうとする男女、凡ゆる點で共同の創造的努力に適する男女のみ結婚せよ。
四、愛する者に對する深い心よりの同情と愛着の完成としてのみ性行爲を行へ。
五、性行爲は餘り屢々なるは不可である。
六、戀は一夫一婦たるべし。變化を求むるよりは永續を求めよ。ゲニヤの哲學は病的である。階級的思想ではない。
七、性行爲を行ふ度に、小兒出生の可能性あることを記憶すべし。産兒の制限と墮胎は共に有害である。
八、戀愛關係には、戯れ、媚び、嬌態、その他の特殊な性的誘惑の分子を含んではならない。
九、性的選擇は、革命的利便を目標としなければならない。肉體的魅力は未開人時代の遺物である。階級價値と、子孫によつて人類を淨化しようとする革命的共産主義者の純優生學的な問題は、常人の選擇に當つての考慮に外ならない。
一〇、嫉妬をしてはいけない……自分に劣つた人に見替へられた時は、自己の優越を證明せよ、自分に優つた人には讓れ。
一一、性的倒錯を行つてはならない。
一二、性は全然階級に從屬し、決してそれと抵觸せず凡てに於いてそれを助けるものでなくてはならない。

ザルキン教授は、この種の完全な『性の合理化』を俄かに強ひようとする時は、悲劇的な結果を招致することに至るかも知れないといふことを認めると同時に、自分の主張は現在の實際的可能性の上に基を置く政策の中間であるといふことを主張してゐる。が、この種の獨斷的哲學が丁度コロンタイの哲學の場合のやうに度を越してやり過され曲解され、同じやうな風變りな形をとることは不思議なことではない。

例へば、ペルムでは、コムソモル委員會で數人の熱心なピューリタン達が、夜スパイを放つてコムソモルの若い男女が川近くのベンチで『戯れてゐる』のを捕へ、逃げることが出來ないやうに頭に袋を被せて、相互批判と僚友としての忠告をうける爲めにコムソモルに連れて來ようといふことを決定した。ところが、偶々ある晩その人の主張でその方法が用ゐられることゝなつた委員會の書記自身が、袋に入れられてしまつた。けれど彼は健氣にも、自分に地位があるといふ理由で差別待遇がなされるべきではないと主張した。彼は公然と自分の過失を認め、それを自己の若年の故に歸して赦しを乞うた。そして他人を捕へることにその努力を倍加した。

この種の行動は、反對の無節制型の人々が非難されると同じやうに手嚴しく嘲笑されてゐる。コムソモルスキプラウダの記者リズミンは、この種の問題に多くの紙面を割いてゐる。『若い老年』と題する一つの記事の中で、彼は『新しき生活の道』と題した一本の手紙が彼の手に屆いたが、その中で匿名の筆者は、握手が明らかに被壓迫勞働者と農民との間に病氣を傳播せしめる爲めのブルジョアジーの發案

である以上それは廢棄されるべきだと主張してゐることを語つてゐる。勞働者階級のある指導者達がネクタイを用いるのは、最惡の趣味で、コムソモルによつて默許さるべきではない。身奇麗な服裝は、中產階級的偏見の如く排斥されなくてはならない。そして娘達は皆鞣皮のジヤケツトと長靴とを用いなくてはならない。戀は凡ての感情的な分子を抜き、あるが儘のもの——たゞ肉體的の結合として認められなくてはならない。退屈な報告を聞いた後でウンザリして口笛を吹き始めることを好まないコムソモルは、メンセヴイキか社會革命黨に加はるが優しである。小ブルジョア好みのダンスに耽る者は誰でも、雜草のやうにコムソモルの社會から投り出すべきである。

この手紙が自分自身を語ると考へて、クズミンはその終りに短い皮肉な註釋を加へて、それを自分の紙面に發表した。暫時して『新しい生活の道』について報告をするやうに命じられた『十月革命』工場內のある一人の同志が、上述の手紙を發見し、その主旨を更に敷衍して自分の報告として發表したといふことを報ずる手紙を受取つた時の、彼の驚愕はどうであつたゞらう。ある同志は、その『主旨』に贊成しなかつた。けれど報告者はその人々に向つてコムソモルスキプラウダの一部を示し、自分は中央委員會の支持を得てゐるといふことを示して彼等に口を閉ざさしめた。『これは、何かの造り話のやうに思へるかも知れない。けれどそれは實生活の一片である。最初の手紙の執筆者の考を贊成する手紙を受取る每に、私の髮は逆立つた！ その中の一人などは、戀愛は共產主義には何の係はりも持たないと語つてゐた——私はこの若い友が扉の外に押し出してゐる生命が、窓から飛び込んで來るだらうといふことをおそれてゐる』と、同志クズミンは語つてゐる。『コムソモル達は苦しんでゐる』と、クズミンは文章を結んでゐる。『無數の影響が彼等の上にその跡を止めつゝある。彼等は凡ゆる矛盾した影響からのがれる道を求めてゐる。新しい必要や、新しい思想、新しい欲求は生れてゐる。古いものは亡ぼされた、が新しいものはまだ創られない……休養の時を持たない若いコムソモル達は、飲酒に耽つてゐる。彼等は若い娘が泥だらけの靴を自分のペツトで拭かるゝのを嫌つたり、夕方ブラウスをとりかへたりするのを、小ブルジョア的だといふ……けれど我等のコムソモル達が、眞面目な仕事を勵むと同時に、身の廻りを整へ、身綺麗に裝ひ、或は又出來るだけ着飾つても、又例へば自分が好きであつたらネクタイをつけるとしても——過度の仕事はそれを公平に組織の中の人々の間に分けて自分を輕くするとしても——又村落で若い男女が閑暇な時にダンスをし手風琴を彈くとしても——何の變ふることがあらう？』

中庸を得た指導者達は老人であると青年であるとを問はず、これ迄述べて來た二つの極端については深く心を用いてゐる。私は、長い間の地下運動から、革命、內亂を經て今は黨でも責任ある地位にある古い共產黨員と語つた。私は工場や大學や學校の青年達や、汽車の中とか集會などで偶然に逢ふ人々にも語つて見た。そして彼等の凡てが、彼等の人生の事實に驚くべき率直さをもつて直面し、解決を得ようとして必死になつて働いてゐるのを發見した。凡ての彼等の場所に忌憚のない發表が行はれ、新聞雜誌の記事、著書等が無數に書かれてゐる。これらの問題がこの通りに切實な問題となつたので、共產黨の統制委員會は、一年前かの執行委員會で、黨倫理學の問題をとり上げた。黨に入つて來る多くの新しい黨員達は、古い道德を破棄せしめら

れ新しいものを與へられず、毎日の行爲に關する指針を求めてゐた。そこで統制委員會は何等か明確な『指令』を發し、道德上の問題についての新しい輿論をつくり始める時が來たといふことを感じた。

それ以來、黨の指導者達は、青年を導く爲めにある種の行爲律を定める決定的な努力をして來た。コムソモルと黨の各新聞雜誌は、各號のあるページを道德とブイト（Biiit）の問題に關する論爭と記事とに費してゐる。『Biiit』は文字上は『存在』といふことを意味する。けれどそれが一般に用いられてゐる形では、『與へられた社會の一つの階級が與へられた時代に生活してゐる物質的文化的條件の總和』又は更に簡單に『生活の道』と限定されてゐる。その他若い人々が年長の人々に助言を求めて書いた手紙もあるし、それに對して年長者達は他の年長者達が何時でもするやうに氣易く答を與へてゐる。最近これらの記事を比較的に完全に集めたものが、コムソモルスキブイトといふ名で政府のコムソモル出版所で出版された。この書物の內容は、少數のパンフレットを除けばロシヤで出版されたこの種のもの丶最初のものであるから、多少の注意に値するものがある。

レーニンとクラ丶・ツエトキンとの會見は、千九百二十年に行はれたもので、一般に性の問題に關する正統共產主義者の見解の最上の言說として受入れてゐるが、レーニンは、最初のプロレタリヤ政府が全世界の反革命運動を向ふにして戰つてゐた間に、勞働婦人の論爭の範圍が主として性と結婚の問題に止つてゐたといふことに驚いたといふことから話を始めてゐる。彼は青年達の性問題に對する『モダーン』な態度については、當てこすりを云つてゐる。

『性生活の諸問題に對する青年達の態度の變化は、「主義」の立場からであり、理論に基づくことはいふ迄もない。多くの人々は、彼等の態度を「革命的」であり「共產主義的」であると呼んでゐる。彼等は心からさうだと考へてゐる。けれど、この老人にはさうは思はれない。私は何人にも優つて陰鬱な禁慾主義者ではない積りであるが、この青年達の――それから時とすると彼等の年長者もさうであるが――所謂「新しい性生活」は、全然ブルジョア的であつて、丁度形をかへたブルジョアの賣笑制度の家のやうな氣がする。凡てこれは我々共產主義者が考へてゐる自由戀愛とは似ても似つかぬものである。あなたは、共產主義者の社會では性的衝動と戀愛要求との滿足は、一杯の水を飮むやうに簡單で些細なことであるといふかの有名な理論は、よく御承知だ。實際我等の青年達は、あの理論で氣を狂はしてしまつた。それが多くの青年男女の禍となつてしまつた。それの信仰者達は、それがマルキストの理論だと主張する……

『實際に、渴きは癒されなくてはならない。けれど常識ある人間が普通の狀態の下に街に座つて泥水を飮みますか？ 又澤山の人がつかつたコップで飮みますか？ しかしそれよりもつと重大なのはそれの社會的の局面だ。水を飮むといふことは、個人的の事だ。けれど二人の人が戀をする。それから第三者たる新しい生命が生れて來る。こゝに社會の利害が入つて來る。集團に對する義務が、考慮されなくてはならない。

『私は例へ一分時でも、禁慾を說かうとは思はない。共產主義は戀愛生活の滿足から生ずる人生の喜びと活氣とを持ち來たさねばならぬ。今日屢々見られるがやうな無節制な性生活は、私の考では人

生の喜びも活氣も持ち來たさぬだけでなく、却つて反對にそれらを滅ずる。革命の時には、これは惡い、甚だ惡い。

『青年は、健全なスポーツ、水泳、遠足、その他凡ゆる種類の肉體的訓練、各種の智的興味――勉强、調査、科學的な研究、などが必要である。健全な身體は健全な精神を造る。我等は僧侶も要らなければドン・ジヤンも要らないし、幸福な中間を行く獨逸の俗人は尙更要らない。

『あなたは、我々の若い同志Ｘを御存じだ……立派な、非常に才能ある青年だ。それでも私はあの男は將來何の役にも立つまいと危んでゐるのです。彼はこの戀愛からあの戀愛と飛び歩く。それは政治鬪爭にも革命にも役立たない……革命は、集團にも個人にも凡ゆる精力の集中と緊張とを要求する。プロレタリアは、前進しつゝある階級です。彼は性的放逸とかアルコオールとかによつて自分を眠らせることも刺戟することも要らない……彼が必要なのは、ハツキリとした意識です。

『けれど、許して下さいクラ、、。私は私達の話の要點からスツカリ外れてしまつた。何故あなたは私に注意しなかつたのですか？ 私の驚きが、私に語らせたのです。我々の子孫のことが、私にはひどく氣にかゝるのです。彼等は革命の一部です。だからもしブルジヨア社會の惡い徴候が革命の世界に現はれ始めたら――丁度何かの雜草の花をつけた根がひろがるやうに――遲くならないうちに對策を講ずる事がいゝのです』

それにつゞくページでは、ブハーリン、ルナチヤルスキー、ヤロスラウスキーその他の多くの人々が、レーニンの同意に考へてゐる。そして彼等が大工に道具が必要であるやうに新社會の建設者に必要であるとする行爲の法則を、更に細かに展開してゐる。明らかに淸教主義の方が力說されてゐる。彼等は凡て一齊にアルコホル、タバコ、性的放縱を非難する。彼等は、自分達は青年を道德化しようとする考からでなく、全然社會的影響の見地からこの問題を扱つてゐると主張する。彼等は、前世代の人々が模範を示した責任がある以上、恐らく今日の狀態にしたのは彼等が責任者であるといふことを、卒直に認めてゐる。彼等は年長者の生活には政治だけで充分であるのに、彼等が彼等の時代に更にその以外のものを有した以上、現世代の人々はその生活を富ましむる爲めに更に多くを必要とするといふことを、知らしめられた。

未來の社會の『細胞』として過渡期に於ける家族の大切なことゝ、國家が充分にそれを行ふことが出來る狀態になるまで兩親が自分達の子供を教育することの必要は、到るところに强調されてゐる。數人の人々は優生學の原理を主張してゐる。

『わが青年達は、一つの事を忘れてはならない』ニコライ・コルゾフ教授に書いてゐる。『彼等の中の最も立派な人々は、その力と才能とを新しい文化の建設の爲めに與へるだけでなく、その能力を次の世代に讓つて、人類を傳へる事業を、野生の鳥の如くに生きて不注意と精力の不足をその子供達に傳へる、あれらの無益な人々に委ねて置いてはならない。建康で强い、才能ある凡ての青年男女は、その肉體的成熟の始めから自分達はもし次世代が現在の世代に劣らず才能に惠まれてゐることを望むなら、少くも三人更に多くは四人の子供に生命を

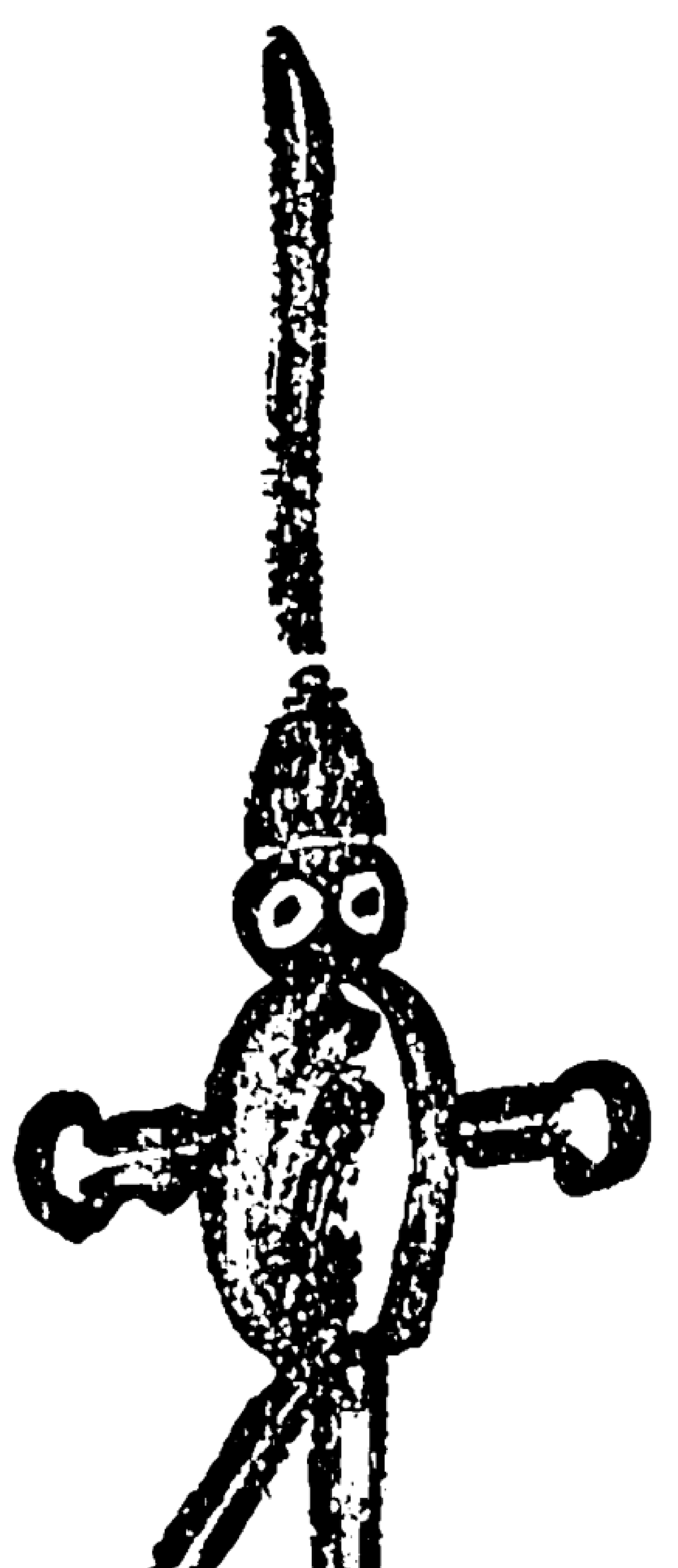
與へなくてはならないといふことを記憶して置かねばならない。結婚しようとする凡ての青年をして、最もよき子供をその人によつて設けその人によつて教育せしめようと望む配偶を選ばしめよ。結婚に對してこんな態度を持つ人々にとつては、結婚法、登錄、扶養法等々についての現在の議論は、凡てその意義を失つて來る。』この本の最後の部分は、コムソモル組織の各種の方面から集つた決議案や報告を集錄したもので、ある物は悲劇的、ある物は喜劇的で、それらは新しい生活の道はどんなものであつてはならないかを示す實例として揭載されてゐる。

彼等が書き、又自分達のことについて云つてゐることはこゝで終ることゝする。私が自分自身より彼等の云ふところを多く引用したのは、國語を充分に知らず、大部分ロシヤに於けるアメリカ人の社會の間で暮した外國人には、ロシヤ人のその方面の生活を充分によく知ることは出來ないからである。私自身が描いたら繪畫は多分更に明るいものであつたゞらう。彼等が通過して來た凡てのものについて、私の想像に暗影を描きはするが、私は決して彼等の努力の下等な、喜劇的又は悲劇的な局面には驚かなかつた。私にとつての驚きは、寧ろ彼等が保留して來た健康の量と彼等が既に創造した秩序と美とであつた。極端を行く人々は、私の眼を眩まさなかつた。何故なら、私はロシヤ人の性格は、安定をうる迄には大きな弧を畫いて搖れなくてはならないことをロシヤの歷史によつて知つてゐたからである。

革命と戀愛（神近市子）

ジエシカ・スミスの『ソビエットロシヤの婦人』は一個のジャーナリストの見聞記にすぎないことは無論であるが、今日の私共がロシヤの婦人について最も知りたいと希つてゐることを集錄してある點で、私には大變興味が深かつた。私はこゝにその八章の大部分を譯して見た。コロンタイの「戀愛の道」が邦譯され、それが若い人々の間で可なり問題とされてゐるやうな風も見えるので、ロシヤそのものがそれをどんな風に批評してゐるかそれを同時に知つて置くことも必要であらうと考へたのが、これを譯載した理由である。尙ほ機を見て私は同書中の別の一二章、主として勞働婦人の自覺と活動の狀態に關する部分を續いて譯して見たいと考へてゐる。

尙ほ右譯文の各所に現はれるコムソモルは、共產青年同盟とも名づけるべき全國的組織である。



大阪　アヤ子



[illegible]内青萃

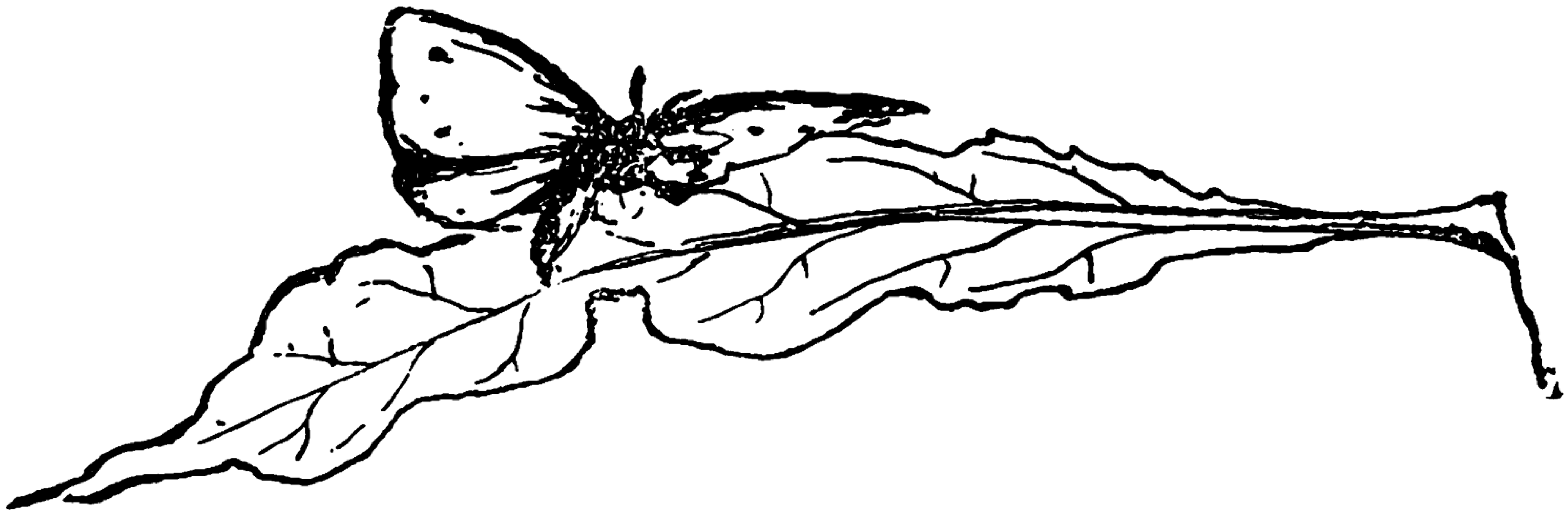
夏の花

長谷川かな女

鈴蘭に書きし便りのいつはらず
子と二人寢ねし蚊帳の薄綠り
土産物集めくゝりぬ梅雨の宿
脊を燒くもぐさかぐはし梅雨の入り
梅雨衣次々脫ぎぬ灸點場
もぐさ分くる綠に梅雨の繪茣蓙敷く
蚕這ひし今朝の敷布に發ちし哉

尾上菊子さん

支那服に皆白く咲け夏の花



この半歳 1

川島つゆ

陋巷

更くる夜の追羽根ひびく哀れなり

追羽根の影して朝の障子哉

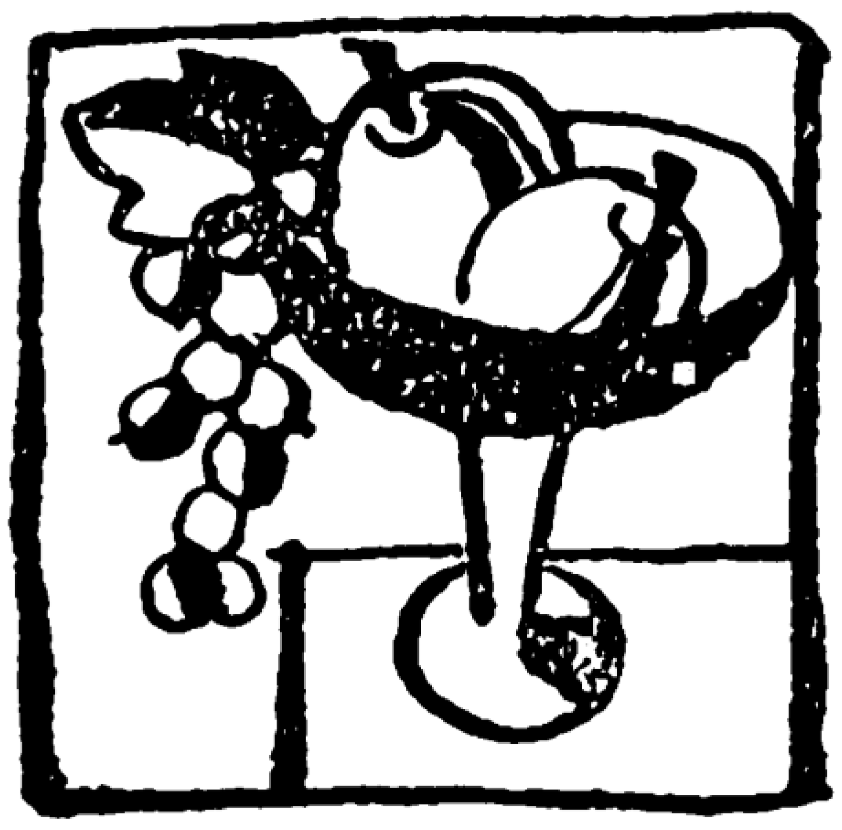
初風呂の足袋キッチリとはいて出し

浅草情調

春浅き石佛洗ふ内儀かな

偶感

白魚の身の透きとほる二月かな



吉田雅子

朝と展望の配列

八木秋子

プロパガンダは資本主義社會の哲學である。

この哲學が何ゆゑに古來のどの哲學者の說よりもいち早く、萬人の實踐にうつされたかといふことは、いかにして美味しいものをらくに食はんかといふ人間の欲求と、もひとつは時代の流行をコンドビーフよりもありがたがる現代人の心理が說明する。

この哲學をまつさきに生活したのは政治家、次に女性、次にマルキシスト。

この哲學のもつ特質は所有と、摸倣と、分裂。

この哲學の第一の功勞者はジアーナリズム、映畫、ラヂオ、警官、理論闘爭……しかし、この哲學の必要が決して資本主義社會にかぎられるものでないことは、ソヴイエート・ロシアが事實に於て證明するところである。

政治家がまつさきの實踐者であつたことに不思議はない。それは「御國のため」であるからだ。彼等はその足もとに地震にあつても崩れないビルデイングや、超高射砲や、高等警察保安課のうづだかい書類を、民衆から獻上させることに成功した。

女性は、愛人のために、コンドビーフをいかに料理すべき

かといふ感覺よりも、もつと鋭敏な戀愛の感覺を以てした。いつの時代でも、戀愛は哲學のパイロットであり、また忠實な證人でもある。で、この哲學が彼女等に與へた最大の功績は、世界の辭書の中から――戀愛のプロセス――といふ文字を完全に抹殺し得たことにある。

女は、そのスカートの短さを以て各大學の中に映畫研究會を設けさせることに成功し、處女の血液檢査の發明といふ學界の名譽をたすけ、また明治大正先覺婦人全集の刊行に貢獻した。

マルキシストは、この哲學に「全無產大衆の要求」といふ赤い大きなマークをつけた。彼等は祖先崇拜の故をもつて當局から表彰狀をもらつた。この表彰狀は近く宗祖マルクスとレーニンの墓に奉納すべきことを、今度の準備協議會で決議せんとしてゐる。そのうへ彼等はソヴイエート・ロシアの政府からも、摸倣の創造……といふ最高勳章を受ける二重の名譽をになつた。

この哲學は彼等をして農民と勞働者に「支配と權力」「排擊と分裂」とを敎へた。彼等のひもとく飜譯書の高さは理論鬪爭での雄辯のバロメーターとなり、雄辯は理論の把握の實證論に役だち、また「祖先崇拜的戀愛」をたゝかひとることに成功した。彼等はたまたま海の外から聞へて來た革命政府治下にあがつた共產黨の民主化宣言のこゑは、これを默殺することにしたのである。

だが、彼等の戰列がその行進の途上にあつて、第一にぶつからなければならなかつた難關は、彼等の文藝陣といふ陣營そのものゝ整備にあつた。彼等の行手には――文藝の本質――といふ摩天樓が雲をついて頑張つておりその周圍には……人間性の探求……愛欲の諸相……本能の凝視……主觀の燃燒……表現技巧の練熟……取材の自由などゝいふ大小あまたの砲壘が樓をぐるりととりまいて、あだかもまもり顏に控へてゐるばかりか、いかにも堅固な城壁が萬里の長城のやうにながく＼とうちつゞいてゐるではないか、そして壁には大きく「出版界」と彫られてある。

こゝにおいて、彼等はまづこの堅牢な城塞に向つていかなる方法をもつて攻め入るべきかといふ方法論を決定すべき必

要を生じ、第二には味方の陣營をいかに整へ、また戰線におくるべき將卒をより多く獲得する手段と、そして軍隊の機能をより活潑に、より効果的に展開して行くことについての對策を根本的に講じなければならなかつた。で、つまり彼等が決定した實踐の哲學といふのは、現代の社會に最も効果的な資本主義の哲學……プロパガンダ……であつたことに格別の不思議はない。

そこで、彼等はその外敵にむかふ攻擊の方法として一度に喚聲をあげることにした。……文藝至上主義……ブルヂョア・イデオロギー……アナーキズム文藝……目的意識文學の確立……取材の限定……月刊雜誌の作家の地位を俺達にゆづれ、等、々、々、また大衆にむかつてはかういつて叫ん……だ向ふの陣營はまさに崩壞せんとしてゐる……そして將卒は老衰した……勝利は我々のものだ……大衆は我等の陣營へ……と。夜をこめて樂の音をひゞかせ、大衆の前に人生を踊つた。

彼等が川ひる彈藥は用意された。それは工場の生活、ストライキ、淫賣婦、監獄部屋、貧民窟、等、々、々、そして彼等は集會やストライキや、また或る時は私娼窟やカフエーの生活感情をたたかひとるためにあらゆる楔機をとらへて人民の層へとはいつて行かなければならなかつた。曝露の快感を味はつた。勿論……これはマルキシズムといふ彼等のミリタリズム精神の鼓吹のために……

ところで彼の陣營にあつての困難は、外敵に對するよりもむしろ內部の統制の困難にあつた。で軍紀肅正のためには兵士達を組織と統一によつて訓練しなければならなかつたし、更にまた隊內の集會や、決議や、討論などによつて武器を磨くことをも教へなければならなかつたのである。不幸なことに、この兵士達は心臟をもつてゐた。心臟をもつといふことはいつの場合にも不幸な事實である。そしてこの事實が文藝辭典のなかに「分裂」といふ頁を發見させることになつた。

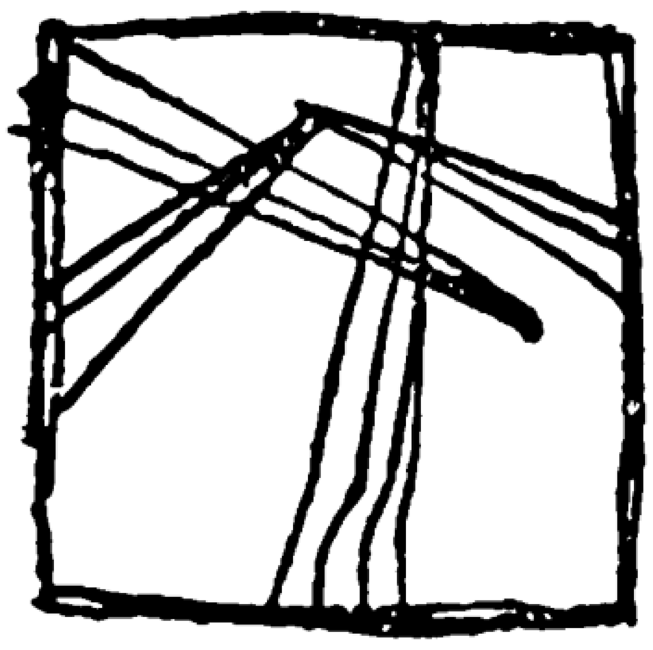
彼等は戰線の中にいくつもの兵舍をつくり、塔をきづいて戰備を整へることに熱中した。それはおどろくべき勤勉さと辛抱づよさをもつてしたにもかゝはらず城の內外からはい

ろいろな矢が飛んで來る。矢はます〳〵多くなつた、兵士達はその原因をさぐつてまた新な戰術を講ずる必要を生じた。第一に隊內の軍紀肅正の藥品が適量を超へて兵士達の心臟の機能がにぶりかけてゐる傾きがありはしないかといふ事だ。つまり罐詰の肉はとり出して太陽にあてる必要があるといふ論理を得る。武器製造法もこれまでのやうにストライキの應援やポスター張りや、檢束などの方法だけでなく、大衆の生活感情——を把握する事をもつてせよ、といふ。彼等は文藝の陣營の中に、心臟の價値を認識したのだ。

　プロレタリア作家の陣營はかくして次第に戰列をとゝのへて行くであらう、何故に他の陣營內の兵士達が自分の陣營をすてゝ此處をめざして來るやうになつたかといふことは、人間の勞働量と賃金の高と、活字の名前の相互關係がこれを說明する。まことに彼等の戰列はとゝのひつゝある。しかるに或る將軍は、人間の年齡及び頭のあたらしさと古さの差を測定するに、唯物論的經濟學者の功績と不朽の作品を遺した文豪の偉業との對比をもつてして、小手をかざして敵の陣營を見ながら感慨深く、敵の將軍達にして自分と年齡を同じうしながら、尙ほ且つその陣營にとゞまる者の頭のふるさを、撫然として嘆いた。いふまでもなく新らしい時代の感覺といふべきである。敵陣の士氣にも次第に高まる城外の喚起につれて動搖の氣運が見え、城壁をくゞつて彼等の陣營に馳せ參ずるものが生ずる事になつても、敢てひきとゞめる氣力もないかに見える。

　賑かな戰ひではある——七月の太陽が朝のまどにカーテンを笑ひゆるがせてゐる。哲學のコンドビーフがハムにかはる日があらうと、微風は頰をすべつてふりかへらずにゆく。野に出よう、露にぬれた靑草の上で、桃の實の赤んぼにやはらかな接吻をおくらうよ。……風、風と薔薇の感覺がはろばろと踊つてゐる朝だ。

（七、八）



大原アヤ子

汎太平洋婦人會議と私

市川房枝

六月二十五日夜、朝日講堂で、所謂場ならしの爲めと稱する汎太平洋婦人問題講演會なるものが催された。

いざ開會といふとき、ベルの音につゞいてどん帳がシズシズとまき上げられると、壇上には十數名の代表諸氏が綺羅星の如くゐながれてゐる。まるで舞臺のいたつきそのまゝで、しばらくは拍手がなりやまなかつた。

筆者も壇上に居並ぶ光榮を有してゐた譯であるが、流石にそれは御辭退を申上げ、閉會の辭だけを聞いて食堂へ逃げた。

尤もこの席だけはのがれても、日本汎太平洋協會推薦代表の一人として、多數のお歴々のお伴をして繰りだすからには口惡の友人から

ハワイ座

市川房枝丈へ

ひゐき

□□ □□

といつた贈り物をとゞけて來ても、文句がいへない。

それにこれも皮肉屋の他の友人が

『旅費が出來なかつたら與謝野夫人の短冊を擔がせてやる』

といつた事などを、新聞に書かれたので、會ふ人毎に

『旅費は出來ましたか』と聞かれる。これは勿論好意である事は分つてゐるが、聞かれる身は少々辛い。

もと――日本汎太平洋協會は選ぶだけで金の心配はしてくれないし、婦選は先刻御承知の通りの貧乏世帯だし、失業者の筆者自身に金があらう筈はない。

從つて出掛ける以上その金は誰れかに心配してもらはなければならない事は初めからわかり切つてゐる話だ。が、さて此頃の樣にうるさくいはれると――出掛けるのまでいやになる。

とはいへ私のやうなものゝ爲めに乃至は私が代表して行く事になつてゐる婦選獲得同盟の爲めに、心配し、奔走してゐてくれる友人や先輩の好意に對しては衷心感謝の念に滿たされてゐる。――がその感謝につゞいて私自身何を以て報ひ得られるかを想ふと、重たるい氣持とならざるを得ない、これはいつはりのない此頃の私の心情である。

會議は八月九日から十九日迄十一日間ホノルルで開會される筈である。出席者は太平洋沿岸諸國――米國、カナダ、メキシコ、ニユージーランド、オーストラリヤ、フイリッピン、支那、印度等各國の婦人で

□保健衛生
□教育
□勞働婦人問題及び職業婦人問題
□婦人と政治
□社會事業

の諸問題についてそれぞれ各國の事情を紹介し、討論を行ふ事になつてゐる。

會議の日程も決定し、各國からの出席者も大體決定してゐるが、矢張他の婦人の國際的な會合團體、クラブウーメン、ブルジョア乃至はプチブルジョア婦人、婦人官公吏等の集りで、それが、初めての無組織な會合であるだけにまとまりにくい井戸端會議式な、お祭り的なものに終りさうである。

ハワイ見物が主要目的ならいざしらず、さうした會議そのものに、大金や時をかけてまで出掛けるだけの價値があるかどうかは、勿論疑問に思へる。

私自身、氣乘りのしない原因の大なものはそこにあるのであるが、然し個人で出掛けるのではなくて、團體の代表となつてゐるし、今迄の行きさつもあるので、さう簡單に引込ます譯には行かなくなつてゐる。

汎太平洋會議がどんなものであるかは、何も今になつて分つた譯ではなし、その計劃を知つた時から想像されてゐた所である。

それにも拘らず、實を言へば私自身隨分この會議の爲めに太鼓をたゝいて來た。

それはむしろ會議そのものゝ爲めといふよりも、敵は本能寺の我婦人界にあつたのである。

日本の官憲や資本家乃至は保守的な帝國主義者等に對しては、國際的な會合を利用することが如何に有効であり近道であるかは、毎年ジュネーヴに於て開催される勞働議會の例が明に物語つてゐる。一昨年改正された婦人の工場勞働者の夜業禁止も、今年改正されようとしつゝある婦人の抗内勞働の禁止問題も、共に會議に於て他國より攻撃され、若しくは攻撃されんとしたことに直接の因があつたことは周知の事實である。

尤も勞働會議はオフイシヤルのものであり、此度の會議はアンオフイシヤルのものであるし、其の内容組織も甚だしく異つてゐるので直に兩者を比較することは出來ない。然し、會議に於ける日本の地位から言へば、後者は汎太平洋であるだけに前者よりも遙に重要な地位に置かれる譯である。

從つて私はその點を特に力説し、日本婦人乃至は日本の社會の注意を喚起すると共に、相當數の代表者を送る事を主張した。殊に代表者その人については一部の語學に堪能なる所謂ブルジョワ婦人の自薦によらしめず、出來るだけ各方面の適任者をあげる事を説いて來た。

私のこの意見には相當の共鳴者があり、それ等の人達によつてこれが實際運動も組織的に行ふやうな計劃がたてられる所まで進みかけてゐた。所が、これが實行にうつらない前に日本汎太平洋協會による詮衡委員會が組織され、お歴々二十名近くを代表に選び上げてしまつた。さうして現在見るやうにあつちでも送別會こちらでも送別會と、日本開闢以來の一大出來事となつてしまつた。

この有樣には太鼓をたゝいた私自身も少々意外とする所であるが、色々な意味で注意を喚起したと言ふ事から言へば、詮衡委員會の功名ともいへよう。

此度私自身が代表して行く婦選獲得同盟は詮衡委員會なるものが組織されるよりも半年も前に昨年の四月の總會で已に代表者を出す事を決議してゐた。

それは汎太平洋婦人會議に於ける重要な一つの問題として「婦人と政治」が掲げられてゐる以上婦選は當然代表者を出す權利と義務があるとの見解からであつた。從つて後に出來た詮衡委員會に對して所謂委員による詮衡を拒否し、むしろ委員會からの懇願によつて割込んだ形となつたのであつた。

婦選獲得同盟は左翼の人達からはブルジョワ婦人團體として攻撃されてゐるが――その事實は私自身も或程度迄は肯定出來るが、然し現在の婦人團體中では最左翼に位してゐる。

從つて普通の團體からも仲間はづれにされて來たし、官憲からも望ましからぬ團體として除外され迫害されて來てゐる。

さうした經驗が私達をしていち早く所謂代表の先取權を表明せしめたと言へば言へるかも知れない。

獲得同盟から私が出掛ける事に決定したのは昨年の暮であつた。――勿論旅費は他で工面することゝして。

から言ふ次第で私は、行く事に――否行かねばならぬ事になつてしまつた。從つて今更後へ引かれぬ譯で、いやなことでも我慢しなければならぬと觀念してゐる次第である。

然し行つたとて私の語學私の辯舌では大演說をして會衆をあつといはせる自信もなければ、又大に策を巡らすといふ柄でもないことを承知してゐる。

從つて會議での私の役目は、日本の事實をそのまゝ曝露し――曝露したつて甲斐もあるまいが――各國の事實を出來るだけ聞いて來ること、今一つは日本各代表諸氏の御奮鬪振りを逐一拜見して來て、さうして日本の皆樣にお報告する位のところにあらうと思つてゐる。

會議と關聯して日本の名譽、日本の體面、乃至は代表者の共同一致といつたことを此頃よく聞かされるが、然し日本といつたとて色々ある。私は事實を事實として提供すればいいと思つて居る。他の諸氏が保守的な側を紹介されるなら私は日本に於ける新しい進歩的な方面の意見の紹介を忘れはしまい。その結果他の代表諸氏と反對側に立つ事があつても一向

差支ないと思つてゐる。

實は私の關係してゐる今一つの勞働婦人委員會で勞働婦人問題が此度の會議で一つの問題となつてゐる以上、代表を一人出すべきであると話し合つてゐたが、費用の點で遂出來なかつた。私自身委員會關係者の一人ではあるが費用を負擔せすに名稱を兼ねる事がはゞかられたので、とう／＼勞働婦人委員會としては代表を出さないことにしてしまつた。

此方は東洋婦人勞働問題の委員會をつくつてゐる米國の婦人勞働組合及Y・W・C・A、(女子青年會)から相當の人が來るし、米國の勞働省婦人局長も來るし、濠洲あたりからも何人か來るやうだから一番面白さうである。が二兎を追ふことは一兎も得なくなるので、此度は自分の擔任の方に時間をとる積りであるが、餘裕があれば少しは關係したいと思つてゐる。婦人委員會で決議したものゝ、英譯したものも持参する積りである。

會合が所謂ブルジョア婦人だけだから全然拒否して參加せず、代表否認の決議を送るといつたことも無產婦人の立場からはもつともである。大にされたらいいと思ふ。

然し我々の現在の立場は、さうして關係しないで外から抗議するだけではなくして、中にあつてそれをしようといふのである。

或はさうした努力は無意味だといはれるかも知れないが——其結果はよく眼にみえなくして、一層骨が折れるのであるが、そこにまだ現在の自分等の使命があると信じてゐる、汎太平洋會議を問題とするのはその點からである。(七月三日)



吉田雅子

文壇と左傾

永島暢子

或左翼の政黨を支持する組合の婦人部が、職業婦人に働きかける一つの手段として、文藝座談會を開くといふ時だつた。講師として今東光氏が招かれるといふ事を聞いて私は鳥渡不思議がつた。すると若い一人の婦人部員が無造作に言つた「今さんは黨に入つたのよ。それから左翼の組織にも入つたのよ」それだけでいゝのよ、といつたやうな涼しい顔をした。それではいつか東京朝日新聞に書いた「感想ＡＢＣ」は、ブルジョア社會への別れの挨拶であつたのか、それはたしか何とか大衆文藝の全集に自分の作品をオミツトされて、利潤のみを目的として生産する出版界を罵つた言葉で充たされてゐた。かつてムッソリニを崇拜し、無産解放運動に反動的な言辭を弄し、社會主義的な文藝に對して一種の侮蔑的な態度を持して來た氏が、急に方向轉換したのであらうか。方向轉換も勿論結構な事として、やにわに百八十度の回轉とは、實に超人だと思つてゐたら、改造の五月號に片岡鐵兵氏の自己の立場の闡明である。「左翼文藝陣は、なか〳〵お賑かですこと」と誰やらが、ながし眼でほゝ笑んだ程に、左傾は一種の流行であるやうだ。流行は常に時代を反映し、さうしてあつさりと地の上を流れて行く。だから大々的の廣告、鳴物入りのおはやしで騷ぎたてねば、購買心をそゝる事の出來ない商品のやうに、さうした左傾には何かしらのお景物がつく。お景物がつくと遂好感情を持ちたがるのは人情だが、さうした人情は時代社會を肯定し、或は倒壞意志のない人達にだけ傾けていゝ事であらう。だから私は、所謂左傾したといふ太鼓

入りの宣傳をうけたからとて、急に正直に何んの檢討もなく、全的に信じる事が出來ない。精々現代社會の機構のからくりを、出來るだけ技巧をこらして暴露してくれるか、戯畫化してくれるかだけであらうことは、今までの既成作家のプロレタリヤ文藝への轉向によつても示されてゐる所である。

さうした内容を持つ作品も、現段階に於ては、大きな使命を持つ事は事實である。しかしそれは單に暴露だけに止まり、または技巧を享樂し、プロレタリヤ的情熱をそこに盛る事が出來なかつたならば、無産者にとつてはなんでもないのである。村山知義氏の「進水式」「やつぱり奴隷だ」林房雄氏の「洒盃」藤森成吉氏の天を衝く程の意氣を持つ「何が彼女をさうさせたか」も一向文壇外の人を感激させてくれず、「山盤」と來てはなんとも申しあげやうがない。それは殊更に左翼文藝陣の錚々と自負し、人も亦目標とするが故に私に疑問を持たせる。私にはかへつて左翼戰線から追ひのけられてゐる形の、前田河廣一郎氏等の作品に或種の親しみを持つ。それは私自身さう左傾してゐないからかも知れないが、私は敢へてそれを恥ぢようとしない。今日に於ける文藝運動の中心的使命は、個人主義的イデオロギイの破壞運動であり、感情より來る無産階級的昂奮に役立て、やがて來るべき社會主義社會に咲くイデオロギイの根を培ひ、方向の道しるべをする基礎的運動であると信じるが故に、即ちこの破壞より建設への途上に於て、完成したる作品を求むる事が無理であり、また所謂文壇の行き詰り云々もこゝに原因すると思つてゐる。それなのにプロレタリヤ的に轉向したる人達は、あまりに性急に自分を完成したるものに祭りあげたがるのが目立つ。そして左翼といふことに、彼等自身だけの昂奮を醸成してゐる。

また相對立してゐる「文藝戰線」と「戰旗」とに作品上どれだけの差異があるであらうか。作品だけ見せられたら、文藝戰線同人の作か戰旗の同人の作かけじめがつかない。彼等は政治理論の差異によるといふであらう。しかし文藝戰線の第一次分裂當時の聲名書を讀んでは政治と文藝の交流の認識に於て多少の差こそあれ、强ひて惡罵を吐きつゝ分裂せねばならない程の事を認められないし、第二次分裂に至つては、猶更好惡感情の對立以外融和協同する事が出來ない位隔絶してゐるとも思はれない。しかも尙左翼藝術誌と銘打つものは等々と雨後の筍のやうに出ることは、常識的に考へても、そ

の力の分散を惜しむものである。殊にそれは、分裂的宗派的對立以外何物でもないのであり、文藝運動は政治運動程に尖鋭なる對立を必要だと考へられない私は、この英雄主義的左傾の分子を、マルクスボーイが外見上怪奇な風をてらひ、口喧ましい理論を振りかざし、大衆より浮游しながら指導者顔をして、親の脛をかぢれる間だけ元氣なのが、無產階級解放運動にどれだけの効果を持つか疑はしいやうに、私はプロレタリヤ文藝運動のために疑ふのである。

左翼運動は決して意志表示でもなければ、机上の理論でもない。從つてマルクスの理論を理論としてのみ込んだとて、マルキシストでないのだ、といつたら、その幼稚さに誰でも笑ふであらう。けれど一般は、その笑ひを自分に振りかくるべき言動をして平氣でゐるのみか得々としてゐる人の多い事を無產階級解放運動のために悲しみ、私は敢へて先輩への禮を失して愚感を並べて見たのである。

少年少女の讀み物について

文壇と左傾（氷島暢子）

先頃私は、或所に働いてゐる一人の年若い女中さんに、讀み物を送らうとしてはたと當惑した。少女雜誌をと思つたがそれはあまりにブルジョア少女の好きさうな桃色の涙、夏の日の笑ひ、着物と遊戲をしか見る事の出來ない小說や映畫で滿たされてゐて、貧しい少女には何等の關係もない事を思つて送らない事にした。令女界や若草は專門的すぎるし、婦人雜誌は勿論駄目である。それでは單行本をと考へたが、彼女の眠つてゐる智識を幾分でも目覺ませるに役立つもの、自分といふものを考へる上に何等かの暗示を持つてゐるものを漁つたらさうした本の、何もない事に失望した。田舍の貧しい農家に生れて、赤ン坊をおんぶしながら、尋常三年まで通つたが、後はどうしても通學する餘裕のなかつた彼女は、向學心に燃えながらそれを充たすべき術を知らなかつた。その邊にころがつてゐる新聞雜誌を、手當り次第讀んではゐたのだが、その結果は彼女の持ち物、服裝等に表はれるばかりで、智的方面には何等の効果も示さなかつた。

最近無產階級解放運動の白熱化されるにつれて、これ等に關する本が、漸次手に入り易くなつて來た。廉價版、普及版さてはパンフレツトなど、たとへ多くの伏字に惱まされながらも、その戰線に立つもの丶勉强に役立つ事が多くなつた。

しかし最も智識の道をはゞまれた女工さん少年工、その他無產階級の子女の讀むべき又は讀み得べきもの丶、指を折る位もない事はまことに心細い事である。而して彼等の血の出る樣な錢で、稀に買ひ與へられるものは、徒に文明を尊び、ブルジョアを讃美し、反動的精神に卷き込み、より搾取に便利な人間に仕立てあげようとするやうな本しかないのである。今日兒童の問題に最も關心を持つてゐる人達は社會事業家と稱する人達である。託兒所、兒童圖書館、幼稚園などによつて、兒童らしき智識情操の發達に資する事に相當努力してゐる。しかしそれ等はやがて反動勢力の一戰士として送るべき準備教育以外何物でもない事は、彼等は、宗教的、愛國的、人道的、さうした言葉の僞瞞を以て兒童の正しき探求心を痲痺させ、ブルジョア社會の典型的人物を造りあげる事に汲々としてゐるのでも證明される。或貧民教育を以て名高い某氏はこんな事を書いてゐる。「自由勞働者中無學者又は、中途退學者の收入を調査した所一日平均壹圓三十錢である。しかるに義務教育終了者は、平均一圓五十錢で僅か六ヶ年の教育が、日收賃銀二十錢、一ヶ月六圓を示してゐる。」だから貧民の生活をよくするには教育を普及すればよいのである。彼等にはその教育が、どんな結果を示さうとして待ち構へてゐるか、それを知らうとはしないのである。勿論ブルジョア社會の一機構として役立たすべく待ち構へてゐる教育が、やがて自分の解放に對して働くものである事が考へられるが、或時期まで、無產階級解放の陣營に無關心であらせてよいであらうか。いつか無產者新聞の辻賣に立つた時、一人の勞働者はいつた。「無產者新聞を讀んだつて俺等にわかるかい」本當にさうだ。無產者新聞は、立派な無產階級解放運動の指導新聞である。しかしあの新聞を讀み得る者は、インテリゲンチヤ、鍊へられた前衞鬪士、また幾分階級意識に目醒めた人達以外に、どれだけの理解者を持つ事が出來るだらう。大方はやはり、熊公、八公の落語講談の方が、食後の手にでも取り易からう。今日の解放運動は、勞働者農民及一般無產階級のそれ〲の結成及日常鬪爭が重大な事は言ふまでもない事であるけれど、その日常鬪爭の一翼として、反動勢力の一分子たらしめんとして培はれてゐる、無產階級の兒童を、解放運動の陣營に取り戾すことの必要を痛感するのである。幼い頃から事物を科學的に觀る事を習慣づけ、社會は如何にして發展し又發展して行くか、現代社會に於ける政治も道德もま

た宗教も美もどうした構成の上に成りたつてゐるか、例へば現在小學教育でなされてゐる教育はどうした意圖の下に成されてゐるか、それ等をいろ〳〵の方面から讀み物として提供すると共に、我等無産階級の目的、我等は何を知らねばならないかなどゝいふ事を、やがて彼等が熊公八公に興味を持つであらう以前に、これ等を考へる根を培ふ事も等閑に附する事は出來ないと思ふのである。無産階級解放運動のために血みどろの戰ひを續けてゐる出版家、作家も多分にある。しかし兒童に對して關心を持つ人々の少い事を私は遺憾とする。そして大方の御高見を伺ひ度いと共に一つの提案を申し出たいのである。

× × × × × ×

夕の丘に

柔らかな草の丘に
しづかに
陽(ひ)の落ちるのを眺めてゐやう
夕ぐれの風は
頰にみだれる髮をなぶる
何も思ふことはない
何も考ることはない
うつろな瞳と
力ない手足があるばかり
夕陽(ひ)をめがけて
塒をとぶ鳥がある
また
忙しげに町を行交ふ人々がある
しかし
私には何のかゝり合ひもない
陽(ひ)がすつかり落ちてしまつたら
また變つた世界がくるであらうよ

（田尻稻子）

文壇と左傾

（永島暢子）



電報

ポール・ギニイスティ作
正宗乙未譯

「私のジヤンヌ、私の可愛いゝ人」

マダム、ベッランは男の此の愛撫に身を震はせて云つた。

「貴方は何て云ふ力を妾の上に持つてらつしやるんでせう！ すつかり妾て者を變へてお了ひになるなんて……。妾つたら、まだ自分が自分自身だつて事が眞個にはのみこめませんの、だつて徃様に臆病者だつた妾が、貴方を此處へお呼びする爲に、色んな計略を廻らす程大膽不敵な女になつちまつたんですもの――然も其れが長い事かかつたのだつたら……、極く僅かの間にすつかり情熱に捲き込まれて――。」

「私は其の可愛いゝ明けつぱなしな處にてもなく惚れ込んで了つたわけですね」

「何とでも御隨意に、だけど、貴方に對する妾の戀情は自分の力ではどうともならないんですの、もと／＼妾あコケットでは微塵もなかつたんですのにすつかりめちや／＼にされちまつて、此の別荘から妾の召使達を街へ追ひ出す爲に、願ひもしないのに暇を與れてやつたりして――」

「井戸端會議がたつた一つのお慰みときてる此の濱邊ぢや、とても私のホテルなどへお招き出來ないですから」

マダム、ベッランはヂヤンヌの肩に委靡れかゝり乍ら、

「勿論ですわ、其様な恐しい事、妾きつと何時か後悔するだらうと今から覺悟してますの、だけど、かうして貴方に抱かれてる間は何一つ氣にかゝりませんの」

二人は、サンアランのカジノでの懷しい逢ひ初めを思ひ出した。ヂヤン、ダレードは一目見て惚れ込むで、どうしても忘れる事が出來なかつた見知らない女に再會する爲に、彼が如何に人知れない苦策を廻したかを語つた。

「まあ、妾は全く貴方の腕の凄いにはびつくりしましたの。今日迄貞潔な生活しきや送らなかつた妾がすつかりくらまされたんですもの」

「幸福を知らせるハートの聲を聞いたんですよ」

「でもね、長く愛して下さる？」

チヤン、ダレードは長い接吻で其れに答へた。だが、女を盪かす術にかけてはエキスパートである此の脊の高い美男子は、自己迄溺れ切らさない術をちやんと心得て居た。何故なら若い女が男の愛撫に恍惚としてる間に、彼はちらりと掛時計に鋭い一瞥を投げた。それから含み聲で何だかつまらない言葉を女の耳に私語いた。切角の色男をだいなしにするノンセンスな言葉も、戀する女にとつては魂を盪かす音樂だつた。

×

突然マダム、ベツランは霞へ上つて叫んだ。

「おや、お聞きにならなくて？　車の音です。庭の玄關で止りました」

彼女は窓の方へ走つて行つた。闇の中に二つの燈がきらめいた。

彼女は狂氣の様に叫んだ。

「南無三寶！　不意に夫が歸つて來たんですよ。てつきりさうですわ。夫は一時二十分に着く汽車で出發つたんです。なんて早く罰がやつて來たんでせう！　如何したらいゝか……」

彼女は極度の恐怖に打たれて、闇にきらめく一點を凝視した。

「夫はすぐやつて來ます」

「さて」

とチヤン、ダレードは決然として云つた。

「貴女を救ふ爲に自分の身を捨てるのは今です。芝居によく有る古くさい方法で——仕方ないでせう、今更とやかく手段の詮議でもありますまい——此際私は貴女が災難から免れる事つきり眼中に無いんです、——で私は喜んで盜人と早變りしませう、だから貴女は貴女から一切の疑を退ける爲に、私が演る役割をいかにも眞實らしく見せる様な物を取出さなくちや駄目です。さあ大至急〳〵、寶石結構、お金、貴重品、全部、早く私に渡して下さい。萬々一上首尾に切りぬけられなかつたら、私が貴女を強迫して冒したと、まことしやかに云ふんですよ、さうしたら問題は丸く片付く事受けあひ」

マダム、ベツランは大周章に周章てゝ簞笥を開けて、其の中から寶石の小箱や、立派な手提鞄を引き出して云つた。

「ほんとうに、獻身的な貴方の行爲になんてどんなにお禮申していゝやら」

幸な事には、ベツラン氏は御者と釣錢か何かの事でごたついて居たらしく、急には廣い庭をよぎつて家の中に這入つて來なかつた。

チヤン、ダレードは身をかくした。

夫が彼女の側へやつて來た時にはマダム、ベツランは彼女の苦惱の爲に殆んど氣を失つて居た。彼は心配さうに聞いた。

「一體何事が起つたんだ」

「おや、貴方でしたの、若し御存じだつたら」

「だが全體此の狼籍は」

「盜人！　見て頂戴、何もかも持つて行ちやつたの」

「盗人？」
ペッラン氏はあきれ返つて叫んだ。
「其の大膽不敵な奴は何時お前の部屋へやつて來たんだ」
「たつた今しがた、それつきり姿知らないの、だつてまだ此の通り震へてるでせう」
「さつそく警報を傳へなくちや」
と云ひ乍ら、ペッラン氏は階段へ續く戸口の方へ行きかけた。マダム、ペッランは周章てゝ叫んだ。
「一寸待つて頂戴、今ぢやもうおそ過ぎますの、夜は更けてるし、奴も逃げるに手間がかゝるでせうよ……。それに警察のない此地方で、今時分如何な救ひがあてになるでせう。武器一つ持たない危險な、むだな追跡はお願ですからよして、妾を一人ぽつちにしないで頂戴」
今被害を受けた家の主人はすつかり混亂におち入つて了つた。
實際盗人は探し出せない程うまくやつて了つた。彼は庭の低い堺をやす〱と乘り越へたらしい。
「確に、盗人のお見舞を受けて了つてから歸つて來るなんて間がぬけてるさ、……だがお前の電報を受取ると、取る物も受りあへず六時の汽車で發つて來たんだ」
「えッ、電報で？」
「まあお前どうおしだ、可哀さうに、あんまり恐しい目にあつたんで、何もかも忘れて了つたんだね」
かう云つて彼はポケットの中から一通の電報を取り出して妾の目の前に差出した。

カゲンワルシ、スグカヘレ　　　　ジヤンヌ

「さあ思ひ出したかい」
「えゝ……ええ……」

×

マダム、ペッランは急にどつと涙を流した。それは、夫に取つて此樣なひどい興奮の後の精神的反作用の樣に見えた。だが然し、彼女は恐しい困惑を感じ、彼女の上にのしかかつて來る恥しさで茫然自失したのだつた。――たとへそれが夫に知れないとしても――。
彼女は急にヂヤン、ダレードの所謂武士道なるものの正體を了解した。彼の伊達者がかぶつたと見せた假面こそ、正直正銘彼自身の本體だつた。商賣柄、彼は非常に經驗に富むだ巧名な手段を弄して、係蹄を張つたのだつた。彼が夫を丁度うまい時機に歸宅させる樣に電報を打つた事は、一點の疑惑もさしはさまないで、犧牲的美名の下に、大びらに寶石類を捲き上げる手段だつた。
彼は何と用心深かつた事よ！　被害者が沈默を守る事は神かけて確でなかつたらうか――誰だつて身を亡ぼしたくはないから――。喩へ樣のない憎惡の念がマダム、ペッランの全身にみなぎつた。彼女は未來のつまらない生活を考へてハンカチを痙攣的に唇にあてた。恰も今となつてはけがらはしい其の接吻の跡を拭ひ取つて了ひたいかの樣に。そして彼女はいま〱しげにもう一度自分自身に物語つた。――私の一生一度の晴の戀愛事件がこれであつた――かと。

――終り――



初夏に歌へる

目次緋紗子

春が訪れたら
花が咲いたら、

初夏になつて
あの溌溂とした若葉を見たら、
どんなに晴れやかな
明るい心になるであらうと
けれど去年の落葉のやうに
冷たい石にしがみついてゐる
冬枯れの日の落葉のやうに、

初夏に歌へる（日次耕紗子）



生きると云ふ事の
何と矛盾の過程なのであらう
否定の肯定か、肯定の否定か、
私には全く解らなくなつてしまつた。

初夏の太陽に照りかへす若葉のやうに
思ふ存分に手足がのばしたい、
晴れやかで元氣な面をあげて
聲を高らかな小鳥のやうに歌つて見たい
花の間を浮かれ飛ぶ蝶のやうに、

けれどその様な事は
到底望み得られないのかしら
年毎に嶮しくなつて行く私の行路
年毎にむしばまれて行く私の魂、



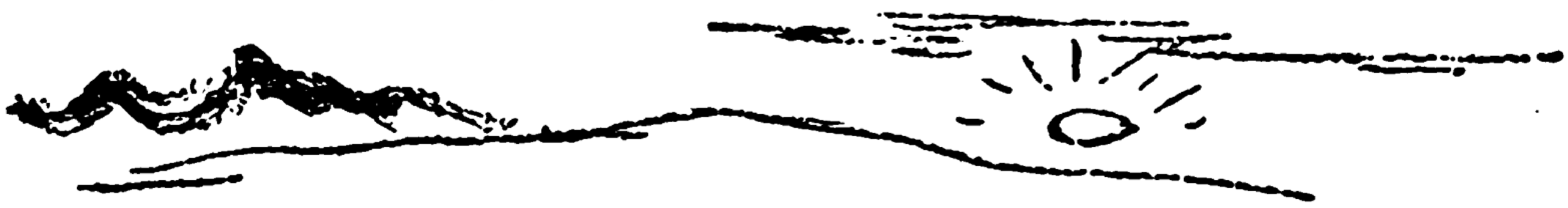
初夏に歌へる（目次緋紗子）

何と、いぢけた意氣地のない
人間の弱さの歎きなのであらう、

あの綠濃く繁つて行く若葉のやうに
思ふ存分手足がのばして見たい
あの小鳥のやうに聲をはりあげて
生きてゐるよろこびを歌つて見たい
花に浮かれる蝶のやうに
たつた一夜の夢を
遊びつかれて眠つて見たい、

それにしても
私は化石になりさうです。

一九二八、六、二五、



あゝ二十五の女心の痛みかな!
細々と海の色透きて見ゆる
黍畑に立ちたり二十五の女は
玉蜀黍よ玉蜀黍!
かくばかり胸の痛むかな
廿五の女は海を眺めて
只呆然となり果てぬ。

一ツ二ツ三ツ四ツ
玉蜀黍の粒々は二十五の女の
佗しくも物ほしげなる片言なり
蒼い海風も
黄いろなる黍畑の風も
黒い土の吐息も
二十五の女心を濡らすかな。

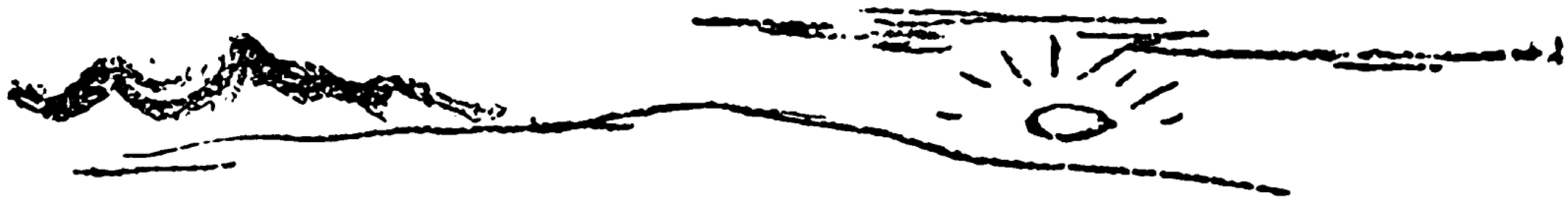
海ぞひの黍畑に

黍　畑

林　芙　美　子



長谷川春子

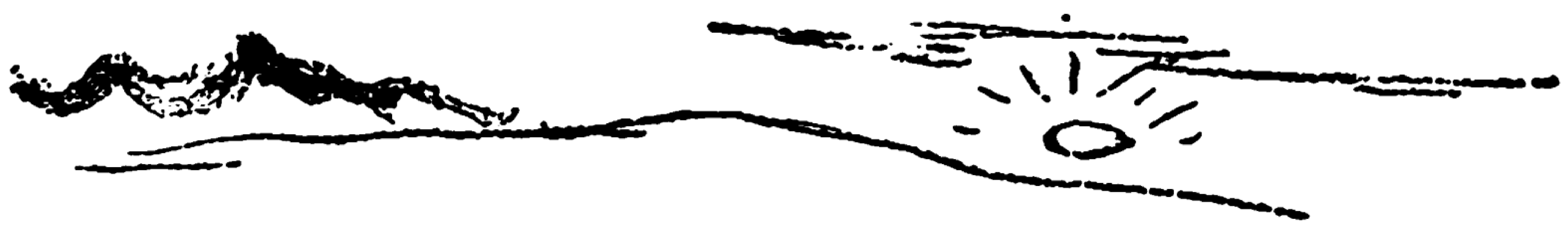


黍畑（林芙美子）

何の願ひぞも
固き葉の颯々と吹き荒れて
二十五の女は
眞實命を切りたき思ひなり
眞實死にたき思ひなり。

延びあがり、延びあがりたる
玉蜀黍ははかなや實が一ツ
こゝまでたどりつきたる
二十五の女の心は
眞實男の子はいらぬもの
そは悲しくむつかしき玩具ゆえ
眞實世帶に疲れる時
生きようか死なうか
さても佗しきあきらめかや
眞實友はなつかしけれど
一人一人の心故……





黍畑（林芙美子）

黍の葉のみんな氣ぜはしい
やけなそぶりよ
二十五の女心は
一切を捨て走りたき思ひなり
片瞳をつむり
片瞳を開らき
あゝ術もなし
男の子も欲しや旅もなつかし

あゝもせよう
かうもせよう
おだまきの糸つれづれに
二十五の呆然と生き果てし女は
黍畑のあぜくろに寝ころび
いつそ深々と眠りたき思ひなり

あゝかくばかり
二十五の女心の迷ひかな。

—一九二八、六、五—



深澤紅子



窮鳥

マジヨリイ・レイネル作
松本恵子譯

ハリイ・マアンの破獄事件が、一度新聞紙上に現はれると、ラヂオのやうな速さで國内に傳播された。人々は樣々な形式で此驚くべき報知を受けた。或者は初號活字を見たゞけで、眉を顰めて新聞を投げ出して了つた。或者は恐怖と昂奮の爲に眼を瞬つた。だが多くの人のうちには、活動寫眞の活劇を見るやうな遊戯的な氣持で、ハリイが巧く逃げ終せて了へばいゝといふやうな望をかけてゐた者もあつた。

ジユンはその一人であつた。とはいへ彼女が暗い街角に立つて脱獄囚を待つてゐる仇つぽい女だと想像したら、それは誤りである。

ジユンは土地の名望ある醫師マアチンの妻で、婦人會の副會長といふ肩書をもつた立派な淑女である。然しメッカフ銀行を破つて十年の禁錮に處せられた、ハリイ・マアンが曾てはジユンに取つて初戀の男であつたといふ事實を知つたなら、誰しも成程と領首であらう。

時計が丁度十一時を報じた。ジユンは讀み耽つてゐた書物から眼を離して今夜は良夫の歸宅が何時頃であらうと考へた、醫師の妻として五年間經つた今日では、彼女もかうして淋しくひとりで留守居をする事にすつかり馴れ切つて、窓外の風の音にも樣々な想像を馳せて恐怖に怯えた時代は既う過ぎて了つた。

そこは夢のやうな東洋風の洋燈の光に照らされた落着のある心地よい部屋である。柔い緑色の安樂椅子に凭つて靜かに讀書をしてゐたジユンは、折々眼をあげてぼんやりと棚の上の置時計を見戍つてゐた。彼女の胸には過ぎてゆく若き日に對する淡い哀愁があつた。凡てに馴れ切つた平和な、いひかへれば平凡過る程穩やかな日が靜

に流れてゆく。「どうしても十八位にしか見えない」さうした言葉を聞かされる事も稀になつて了つた。いつの間にか彼女の若さの中にも奥様らしい落着が來て了つたのである。

ジュンは詰らなさうに輕く欠伸をしながら立上つて、書物を卓子の上に置きかけた時、カチリといふ音がしたので、扉口(とぐち)を振り返つた。それは正しく扉の把手を廻した音である。息を凝してぢつと視詰めてゐると、把手が微に動いて、やがて音もなく扉が開かれた。彼女の手から書物がバタリと床に落ちた。彼女は卓子に手をかけて、扉の隙間から闇を見透さうとするやうに眼を見据えてゐた。

次ぎの瞬間、彼女の頬から、さつと血の氣が褪せた。痩せ衰へた青年の姿がのめるやうに部屋へ蹣跚めき込むだのであつた。

『ハリイ！』

『扉に錠をおろして下さい！』青年は嗄れた聲で喘ぐやうに云つた。

ジュンは急いで扉口へいつた。そして再び彼と向き合つた時、彼女の双眼から涙が溢れ落ちた。彼の服は鮮血と泥土に塗れてゐた。彼の若い顔は青褪めて、苦惱に歪むでゐた。七年間の苦役は彼を別人のやうにして了つた。僅に彼の華奢な姿だけが、昔日の面影をとゞめてゐる。

ジュンは彼の襯衣に滲むでゐる血を指ざして、

『やられたの？』と訊ねた。

青年は頷首いた。

『醫者の手當を受けなければ‥‥それで僕は‥‥』と云ひかけて、彼は蹣跚いて危く倒れかゝつた。ジュンは周章(あわて)てそばへ馳寄つて、彼の片腕を自分の肩にかけた。

「さア、私に寄りかゝつてゐらつしやい。臺所の傍に女中部屋があるから‥‥家では女中を使つてゐないから、時々ジョーヂが午睡をするところなのよ。』ジュンは青年を扶けてやう／＼部屋へ辿り着いた。青年は椅子に腰を下して、兩手をダラリとさげたまゝ、がつくりと首を垂れた。ジュンは悸として眼を瞬つた。

『ぢきにジョーヂが歸つてくるから、貴郎は床に入つて休むでいらつしやい、こゝまで來ればもう、大丈夫よ。』

ジュンは相手がそれに應へないので、屈むで靴の紐を解いてやらうとした。青年はその手を押しとゞめて、

『あゝ、僕、自分でします。』と少し赧くなつて呟くやうにいつた。青年の羞(はにか)むだ顔の中に彼女の思出が甦つた。初めて彼が彼女の耳に戀を囁いたあの樂しい夏の夜から、もう八年經過つてゐる。

ジュンは簞笥から良夫の寢卷を出して寢臺の上に置くと、湯殿へいつて湯の加減をした。そして青年が湯を使つてゐる間、臺所の瓦斯焜爐の上で珈琲を沸しながら、呆乎と目の前の白い壁を凝視めてゐた。彼女の胸に浮むでゐたのは美しい並木道を連れ立つて歩いた、血色のいゝ若々しい青年の姿であつた。彼は未來に就いて成功に就いて、愛に就いて語り續けた。彼女はどんなにか彼を信頼し、その華やかな未來に期待をもつたであらう！　彼の空色の眼は常に輝いてゐた。彼の朗かな聲は常に樂しく笑つてゐた。

突然玄關の扉の開く音がした。急いで馳けていつたジュンは廊下で、往診から戻つて來た良夫と顔を合せた。彼女は救ひを求むるやうな眸で良夫を見上げながら、

『貴郎、ハリイが來ましたのよ、大層怪俄をして‥‥』と早口に云

つた。

『何處にゐる？』背の高い良夫は妻を見おろすやうにして、氣忙しく訊ねた。

『女中部屋に寢むでゐます。』

醫師はそれをきくと、無言で、傍に置いた藥鞄を取上げて、臺所の横手の女中部屋へ入つていつた。ジュンは良夫のいつにない嚴格な顔を氣にしながら居間の椅子に埋つて、どうしたら完全にハリイを隱匿つておく事が出來るだらうかといふやうな事を考へてゐた。そこへ良夫が入つてきた。ジュンは良夫の心持をはかりかねて、膝の上を視詰めながら相手の言葉を待つた。

『中々重態だ、内出血をしてゐる。』醫師は鞄を卓子の上へおいて、電話機を取上げた。ジュンは愕いてその手を押へた。

『貴郎、どうなさるの？』

「警察へ報告するのさ。」

『まア！ 私そんな事、夢にも思ひませんでしたわ。あの人は私達を友達だと思へばこそ、頼つて來たのですわ。それにそんなに酷く怪俄をしてゐるといふのに、警察へなんぞ渡したら、直ぐに死むで了ひますわ。』

良夫の眼のうちにある疑惑が閃いた。ジュンはその意味をよく知つてゐた。けれども、わざと、默つて良夫の手から送話機を奪つた。

『然し……犯罪者を隱匿する譯にはゆかない。吾々は市民としての義務を果なさければならない。』

『そんな事を仰有つても、神様の前に立つたらどんな人間だつてきつと罪人ですわ、それだのに法律で裁かれた人だけを、私達が特に違ふ人種のやうに扱ふといふ法はありませんわ。』

『そんな分らない事をいつて、ひとを困らせるものぢやアない。あの男を庇つたら、吾々も法律上の罪人になるのだよ。』

『それにしても、何もわざ〳〵こつちから警察へ電話をかける事はないぢやアありませんか。』

二人が言ひ爭つてゐるところへ、患者の家から電話がかゝつてきた。

『ホワイトさんのところの子供がひどく不良いさうだから、私はすぐ出掛けなければならない。では警察へ知らせるのは、いづれ歸つて來てからにしやう。』

ジュンは良夫の言葉を道理だと思つた。けれども彼女の氣分から云へばどうしてもこのまゝハリイを警察へ突出す事は出來なかつた。それは恰も彼に對する死の宣告文に署名するやうなものである。良夫がいつて了つた後で、ジュンはハリイの臥てゐる部屋へいつた。

『どんな工合？ ひどく苦しいの？』彼女は青年の額に滲み出てゐる汗を擦布の端で拭いてやつた。青年は感謝に滿ちた眼でジュンを見上げた。

『貴女の旦那さんは眞實にいゝ人だ。僕の身體には、死むでゐやうが、生きてゐようが、一萬弗といふ懸賞金がついてゐる。だから大抵の人だつたら屹度警察へ突出すに違ひない。世の中の人達はみんな僕を危險視してゐるのです。貴女は僕を怖がりはしないでせう？』

『いゝえ、ちつとも。』ジュンは青年の窶れ果てた傷ましい姿を見て胸に痛みを覺えた。

『貴郞を眞實によく知つてゐる人は、決して恐れたりしませんわ。』ジュンは慰めるやうに云つた。

『貴女はちつとも變りませんね。僕はこの七年間、貴女の幻を見續けてきました。貴女の美しい髮の毛はオレンヂの花の香がしてゐました。僕は決して忘れません。』

ジュンの頰に涙が傳つてきた。

『僕は貴女があんな立派ないゝ旦那さんの傍で幸福に暮してゐるのを見て安心しました。……旦那さんは何處へいらしつたのです？』

『また病家から電話がきて、出掛けたのよ。』

『大丈夫でせうね。眞逆僕を密告しにいつたのではないでせうね。僕はもうどんな事をしても二度と監獄へは歸りません、寧ろその前に死んで了ひます。』

『大丈夫よ。安心なさい、決して貴郞を裏切るやうな事はしませんから……』

『有難う、今晩受けた親切で、僕は今まで受けてゐた苦役が帳消しになりました。これで貴女の旦那さんは僕に對して、何も負債がなくなつたのです。』

『えッ？　何の事なの？家のジョーヂが貴郞から何か負債があつて？』

『さうです。僕は貴女にその事を話したかつたのです。あの銀行の金を盗むだのは實は貴女の旦那さんのお父樣なのです。けれどもあの方はあんなにお年寄りでしたし、それに僕には自分を充分に辯護する事が出來なかつたのです……』

ジュンは暫時無言で青年の顏を凝視してゐた。咽喉の奥が焦げるやうであつた。

『貴女は僕を信じて下さいますか……僕は貴女だけに眞實の事を知つて貰ひたかつたのです。僕は胸の病氣にかゝつて、もう長くは生きられないのを知つたのです。それで貴女にだけこの事をお話しようと思つて、命がけで牢を破つて來たのです。』青年は折々烈しく咳込みながら語つた。

ジュンの腦裡には、良夫の老父の臨終の光景がまざまざと甦つてきた。

『ハリイ、それで解つたわ……お父さんが息を引きとる間際に、頻りに貴郞の名を呼むで何か懺悔をしようとしてゐました。けれども私達には何の事だか解らなかつたのよ。お父さんはきつと私達に貴郞の事を話さうと思つたのね。』

『何卒この事は誰にも言はないで下さい。決して旦那さんの御耳に入れないで下さい。今更そんな事をいつたつて無駄な事ですから……屹度ですよ。』青年は幾度も念を押した。そして云ふだけの事を云つて了ふと烈しい疲勞の爲めに、ぢつと眼を閉ぢて深い沈默に墜ちて了つた。

家の中は怪しく靜まり返つて、廊下の時計の音が際立つて急しく響いてくる。

ジュンが青年の病室を出たのは曉近くであつた。彼女は扉を背に

して立つたまゝ良夫を迎へた。

『私は鳥渡貴郎にお話したい事があるのよ。』彼女は小聲でいつた。良夫は不安な眸で病人の臥てゐる部屋の扉を見た。

『私達は在來の道德觀念を離れて立たなければならない場合にあるのです。私は貴郎の道德觀を變へて下さいとは申しません。けれども貴郎はこの頼りない青年を一層苦しめるか、或は貴郎の妻を棄るか、どつちか一つにきめて頂くより他ありません。』

『ジュンや、お前は疲勞れてゐるのだ。お寢みなさい。ハリイの事は明日の朝きめよう。』

『私は結婚した時に、お互に終世愛し合ひお互に信じ合つてゆく事を誓ひました。私は特にいまその事を貴郎に求めてゐます。貴郎はハリイに一萬弗の懸賞がついてゐる事を知つていらつしやるでせうね。』ジュンはさういひながらも、それは良夫に對して餘りに酷い言葉だと思つて、苦痛に堪えなかつた。

『ジュンや、お前は何をいつてゐる。私がそんな金の爲に動くと思ふのか』。ジョーヂはむつとしていつた。

『若し私が貴郎を信じなかつたら、それつきりではありませんか。貴郎に最後の望をかけて來た可哀想な子供を賣つてまで貴郎は市民の義務とやらを贖はうと仰有るのですか。』

『自分の妻の初戀の男を庇ふなんて……お前はそれを拒む事は出來まい。十年間の苦役を宣言された罪人ぢやアないか。お前はあの男をまだ愛してゐるのか。それでなくてどうしてあんな脫獄囚などを庇ふ道理があらう。』

『さう御思ひになるならそれでもよろしうございます。何といつてもハリイは私の友達です。私はあの人にとつて世の中にたつた一人しかない友達です。私は自分の懐中に逃込むできた鳥を殺すに忍びません。ハリイの信頼を裏切りたくありません。』

『然し法律は……』

法律？　でもキリストは人道を先におこしらへになつたでせうかそれとも法律を先にこしらへたでせうか。それにハリイは周圍の狀況だけで有罪に決定されたのではありませんか。……貴郎は何故私がハリイを庇ふか答へろと仰有いましたね。それは私達の子供――若しあの子が生きてゐて、ハリイのやうな青年になつた時の場合を慮へるからです。若しも自分の子供が何かの事情で罠にかゝつて無實の罪に陷るやうな場合があるかも知れないと慮へるからです。』

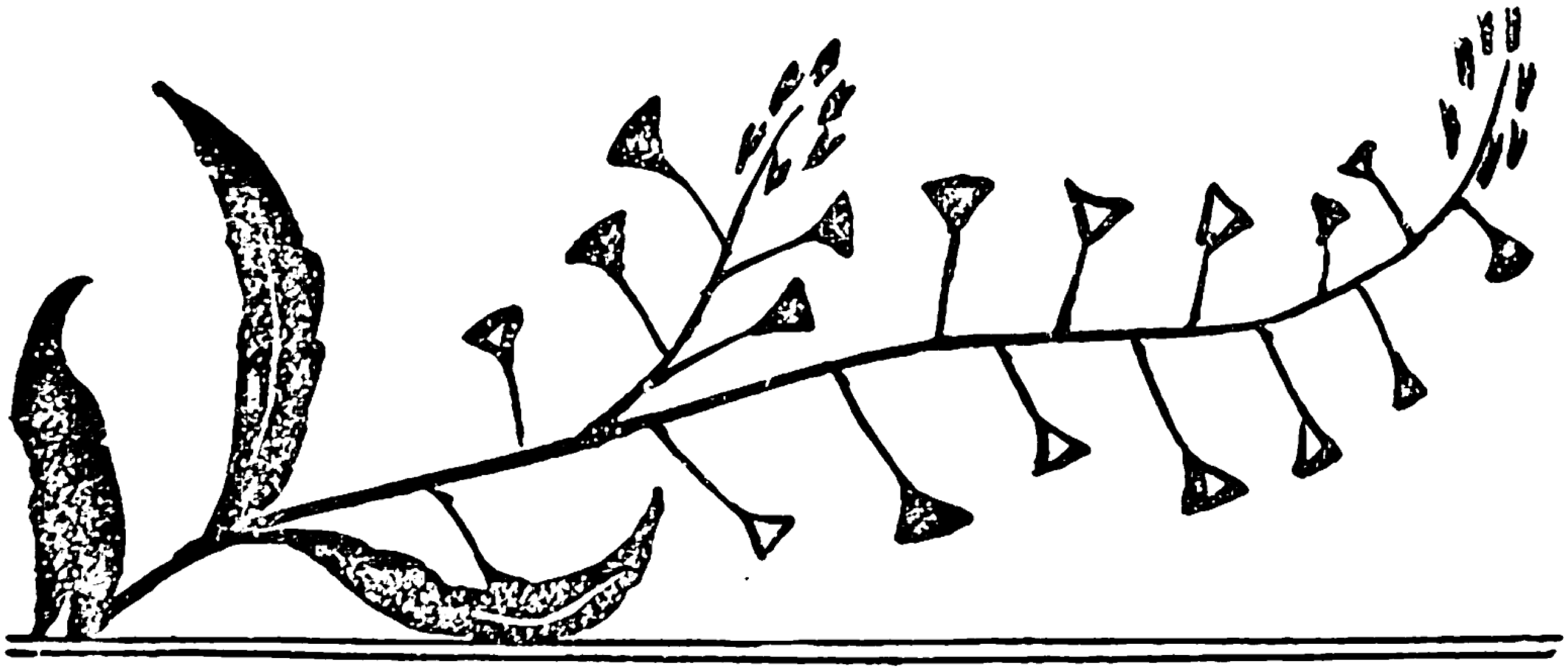
終にジョーヂは頭を垂れた。ジュンは良夫の心に何が映つたかを明かに見た。生れて十ヶ月目に兩親の悲哀と共に冷い墓地に埋められた愛兒の姿が、二人の胸に浮むでゐた。ジョーヂは靜に妻の手をとつた。

『ジュンや、私はよく解つた。ハリイが丈夫になつたら、お前達二人を何處か安全なところへ逃がしてあげよう。私も男だ……』

『貴郎！　私は貴郎が御自分を知つていらつしやる以上に貴郎をよく知つてゐます。さうでなかつたらどうして貴郎を愛す事が出來ませう。』ジュンは良夫の肩に手をかけて涙と共にいつた。

『お前は眞實に……眞實に私を愛してゐるのかい……』ジョーヂは探るやうに妻の眼を覗込んだ。

『私は貴郎を愛してゐました。いつも渝らずに……そしてハリイは一時間前に、私達に感謝しながら安らかに息を引取りました。』（完）



深澤紅子

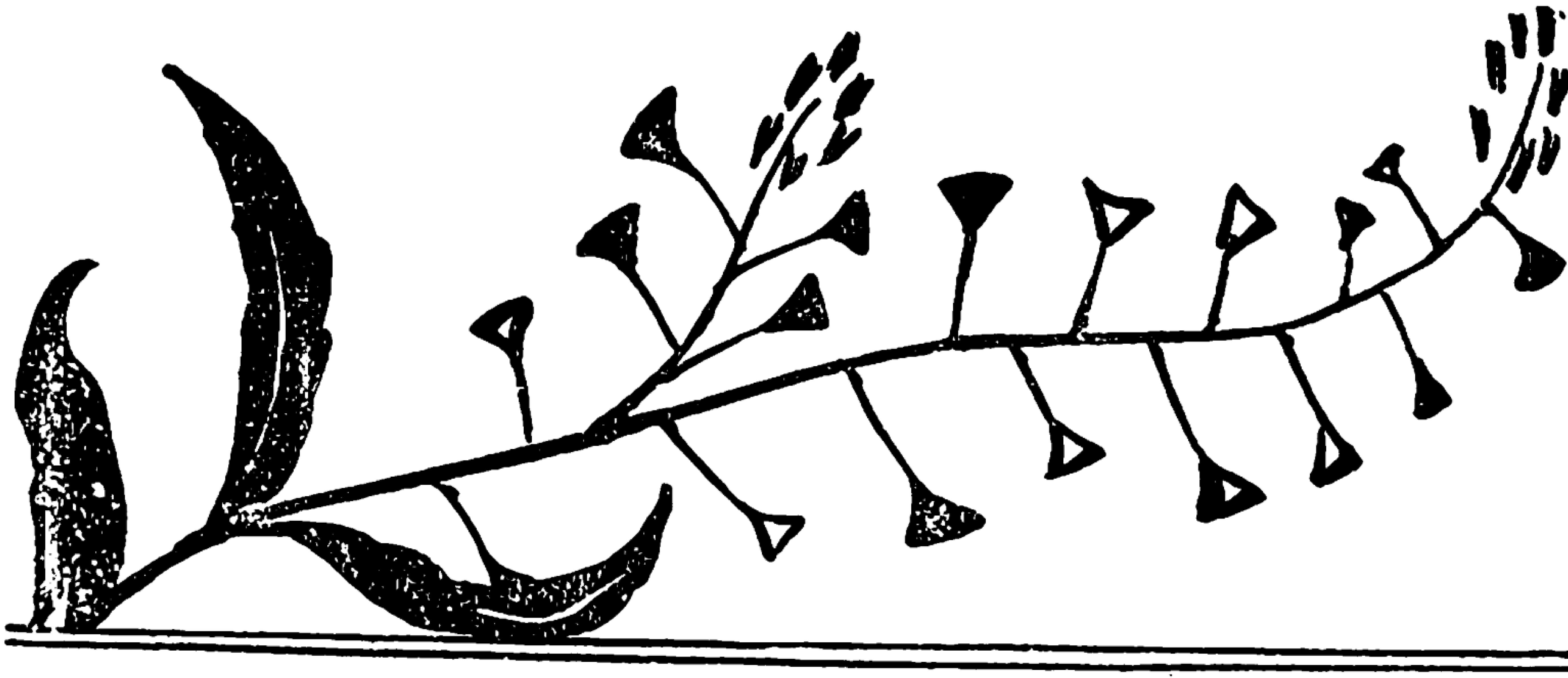
詩二篇

友谷靜榮

彼女の岸の挨拶

氷河のやうに照る砂濱を
遊歩する月の圓い踵に
彼女は熱い接吻をあたへた
月の無關心はすべてであつた
かくしてひとつの接吻は
永遠の岸に凍つてしまつた
海は彼女の貞節にまで
千萬の眞珠の花環を捧げた。

詩二篇（友谷靜榮）



貴夫人と猫

貴夫人は春のやうに着飾つて
華奢な赤いパラソルを浮べてゆく
足もとで海が強く光つてなつてゐた
黑いヒゲや青いヒゲや黃色いヒゲのある人種が
鎖のやうにつながつてきたのにも
貴夫人の眼はとまらなかつた
貴夫人はかつて狡猾な猫を愛した
彼女が金色のながい美しいヒゲをもつてゐたので
或時そのヒゲは一本一本丁寧に拔きとられて
アルコールランプにかざされてもえてしまつた
以來貴夫人は
あらゆる種類のヒゲの存在を忘れたのである


深澤紅子

美酒か毒酒か（感想その二）

――三角關係の一端より――

生田花世

――三月十八日午後十二時――

私も生きるのだ、かう思つて心は盛り上る。私が生きるには？　かう思つて心は這ひまはる。死ぬか、生きられるか？　かう激しては呪ひの道をさがし、ひきかへし、復讐の術をさがし、ひきかへし、ゆるしの道をさがし行きなやむ。苦しいこの私の心持。

×

『親しかりし友も辭しゆきぬ。いつくしみし弟も死にゆきぬ。今は夫も戀を得て出で行きぬ。別れゆき、死にゆき、ひとりのこされて、何たのしみに生きゆくや、生ける屍、あふれざる、あふるゝよりも、なほもあふるゝくるしみは、心のうつは七つにたたふ……。』

×

『なぜ、お前は死んだ？　死んだりする時ではなかつたぢやないか』

なさけない心持で、夜半に泣き、夜明けに泣く。弟の死はまだ私には新しい。二十五歳といふ若さで死なして了つた。かけがへのないその生存ではなかつたか、子供のない私達にとつては子供であり、あまりに、あまりに詩人的な夫に代つては、私の生活上のなくてならぬ人であつたお前、お前が生きてゐないばつかりに何もかも亂れて了つた。支へを失つたあの人はとんでもない女の人に心がからんで胸が火になつたのだ……。

×

どうしてもやめないといふかたい決意だつた。どうしても行くといふその決意の中に、死がこもり、戀がこもり、眞劍のやけがこもり、生ききらうといふ心がこもり、ゆるされたいといふ心もこもり、ふみにぢ

らうといふ心もこもつてゐた。斬り取つてでもその手をこゝにのこし、斬り取つてでもその脚をこゝにのこし、ころしてでもその身體がこゝに止まるやうにと思ふ狂想が私の心に活動した。殘忍なことだと自分も知つてゐたがやむにやまれぬ心持。それは出來ぬとおもふ心持、行つて了ふまでの十日、行つてからのこの三日。客觀と主觀の赤頭、白頭！

×

どうしていいか分らぬ
かういふ悶えに十日をすごした。
どうしていいか分らぬ
かういふ惱みに三日をすごした。
今もなほ
どうしていいか分らぬ。

×

ころす道もふさがり
ゆるす道もふさがり
ぢつと耐へる道も暗く
とび出してゆく道もあさましく
ものいふ口も動かず

美酒か毒酒か（生田花世）

ごはんも食べられぬ、ねむられぬ
笑へぬ、八方ふさがり。
ちりちり鍋で燒ける牛肉のやうに
心は燒けて白くちぢむ。

×

苦しい時は何が心やりになる。たゞ落書(らくがき)ばかり。歌を作らうとおもふ。歌は荒れてる私の心を和(なご)やかにするだらう。

はてしらず
行くにまかする
人心
とどむるすべを
われし
知らずも

×

死にはてん、かくおもへども埃立つ都の風をいとふ心地す……すべて身を棄てられはてゝのち死なむかくおもひつゝ苦しみに居り……昨日までわれにやさしきみこころとおもひかども今日おにと見る……死ぬべくはかへりて死なむふるさとの泉わくなる椿のほとり……弟のみ骨をもちてかへりゆかん、うづめてのちに死なば死ぬべし……姉弟(きやうだい)ののぞみむなしくなりにけりかくおもひつゝくるしみに住む

×

妻といふは
いとあはれなる
名なりけり
かくおもひつゝ
苦しみを
耐ゆ

×

いまこゝに
命をたつは
いとやすし
命たつべく
しまし
耐ゆべき

×

この戀をゆるさば家はこのまゝに
こはす心はなきものを
母のごとき心をもちて居たまへと
君はいふとも母ならじ

美酒か毒酒か（生田花世）

妻なるものを。

×

空に見ゆる
くちづけのかげ
地に見ゆる
くちづけのかげ
二人くちづけするものを

×

ひたすらに戀ふなる二人相寄りて
くちづけするをたれかとがむる。

×

別ろともなどかうらまん、かゝる身を、いとしみたまふこともありしを……棄てたまふことのなりゆきたとふれば、吹きゆく風の吹きゆくごとし……あぢきなき世なりとおもへ、つかれたる心に去らず君のおもかげ……わが心ものものしくもきはまりて眞底しづかに女わらへる……いとにがき涙笑ひに見てゆかん、わが棄てらるるはじめをはりを……棄てらるゝをみなとこそは生れけれかくわがための墓にしるさん……かにかくに都はわれにつらかりき住みて得たるはたゞうらみにて……その日よりたゞ水を飲み、くだものにいのち寄せけり蟲かもわれは……二二が五、かゝることをばのぞまれつ、何を足してか五とはなるべき……『家』をのみたのまれにけり『家』てふは二人たのしきものと思ひし。

×

かくばかり君を見まくとおもへども、君はあらすも、見まくとおもへど……いとつらき人の心とおもへどもやさしき時もありしとおもふ……人も見じ、町も歩まじ木も草も見じと心におもふさびしさ……生きんてふ心ひとすぢ綱のごと吹く風のまま揺れて危き……またも思ふ、いやはての日に死にぬべし心はやりて死なば悔しも……人を殺し我身を殺す道知れど人のみたりはいとしきものを……夜もいねず飯も食さずておとろへのわれの姿を見せまく愛しも……夜もいねず飯も食さずておとろへのわれの姿とゆめゆめ爲すな……夜もいね、飯も食しつゝすこやかに逢ふべく君に見せめ心を……死なであれ出でてゆくなといふことを云ひのこせしをかりそめと見じ……金なければすべての書を賣らましと言ひし言葉はとどめしものを……

×

はてしらず
くるしと知れる
三人の
男女の
仲をくるしむ。

×

まぎらする
事もあれかし
いつしかに
世は春となる
頭とおもふに

×

夜もすがら
心せまりて
生きがたし
生きなば
神のたすけなるべき

×

ねむり薬がほしいとおもふ。せめて明日の十時頃まで…。これからの十時間…何も考へないでゐられるやうにとおもふのだけれど。

×

自殺こそは復讐とおもふ。
自殺、自殺とおもふ。
しかし……
復讐していいかわるいかがいまどうしても分らぬ。

×

阿呆にならう。阿呆にならう。考へることをしない阿呆にならう。考へまい考へまいとおもふといやさらに考へこまれて来て仕方がない。何かひどい痛苦にへしつぶされればいいのかともおもふ。何かでこの身、この心を砕いて了ひたいとおもつて部屋の器具に目が走る。又紐などに、柱などに……。

×

美酒か毒酒か（生田花世）

これで自殺もせず、氣も狂はず、人も殺しに行かず、一月なり、二月なりくらせる自分のことが考へられるか、どうすればいいであらう、どうすれば自分が救へるだらう、今は悪魔！と感情はせく。

×

あゝしかし感情にはしるなとこの間、弟は云つたつけ、とおもふ。『少しでも感情に走つたら姉さん自身の破滅より外何もありません。そして姉さんの破滅はみんなの人の破滅になりますよ、しつかりして下さらなくちやなりませんよ』と弟は云つたつけとおもふ。

×

弟、やさしい弟、一人は死んだが、もう一人ゐて、私を護つてくれる、あの弟の言葉はまもらうとおもふ。

×

がまんしなくては何にもならない。だれのためにもぢつとがまんしなくては何にもならない。

×

行け行けと心は思ふ。行つて争つて、三人であさましい場面を製造すると心がスッとしよう。バクダンのやうに二人にこの『私』をたゝきつけるのだ、さうすれば、どんなにさつぱりとするだらうとはおもふのだけれど……。

×

『こんな強烈な情熱をもつたこと、あたし、はじめて……』
とおまへは私の夫にその第一の手紙を書いてよこした。そのおまへの名を秘した手紙を名を秘してゐたローマ字の手紙であつたがために、留守をしてゐた私が、知らずに開封してがぶがぶと毒酒をのむやうに飲みほしたのだ。お前の盛つた毒酒が私の身體に今かうしてまはつてゐる。女よ、心を狂はすその毒酒が、私をピクピク痙攣させるのだ。亂れに亂れさせようとするのだ。

いたづらな女よ
お前が飲ましたその酒で
凄いやうな面白さ
こつぱみぢんに砕けたことだ。
申分のないこのしまつ

美酒か毒酒か（生田花世）

狂ひ出したりそちらもこちらも
すきだと思つてゐた女から
好いてゐますとくちづけされて
はしり出さない男があるなら
そんな男は木か石か
木でも石でもないかぎり
迷ひ切るのがほんとでないか

これはたかみの見物と
ぢつとしてゐる—細君はネ
こゝのところはたゞぢつと見てゐる
いたづらな女よ
その手には私はのらぬ、ぢつとしてゐます……。

女よ、お前のはげしい戀の言葉は、一人の人間の死（弟の）によつて異常な空隙に陷つてゐた私たち夫婦を右と左に分けた。あの人へは天國を、そして妻なる私へは地獄を。

ありがたうよ、女よ、それが上京してやさしくやさしく死んだ人へのくやみ、悲しい遺族なる私達への見舞をのべたお前の手と心とでなされたのだ。こんな痛快な親切は一寸どこを探してもないだらう。多くの人は花をくれたり悼辭をくれたりしたが、フリジヤの花と一緒に戀をくれたあなたが一番ふるつてゐる。

あの手紙さへ見なかつたらとしみ〴〵おもふ。しかし、私の家ではむやみやたらと風變りの若い人々の手紙が來るのを、みんな私が受けて整理するのが、この長い年月の家事の一つになつてゐる。『ミス・ロビン』かういふ名のお前の手紙も私の家事の一つとして開封した手紙だつた。そして私は一字、一滴の毒にあてられたのだ。

『讀まざりせば』の悔は深い。しかしもうどうしようもないハメだつた。私はお前のヒミツを知つた。私は夫の口からそのことをきいた。『知る』は地獄のはじめ……。

×

白刄と白刄……それが、その手紙がこの家に入つてからの夫婦のみにくいもの凄い心と心のたたかひではなかつたか。

×

だが、私は辛じて耐へた，耐へて、こゝで、ぢつともちこしてかうしてゐるではないか、なぜ耐へる！分らないから耐へる。女よ、お前の心が十分分らないから耐へる。自分の心も分らず、夫の心も十分分らないから耐へる。すべてのことがもつともつとはつきりするまで、私の脚も私の手も縛る。私の口も、私の心も、たゞにたゞに控へる。化石させるのだ！

×

どうにかする、必ずする！それのために私はぢつと形勢を見る、ケントウ違ひはおそろしい。……ぢつとしてね……。だがこのぢつとしてゐるといふことはぢつとしてゐないよりも五倍も十倍もくるしい。力がいる。何しろ妄想地獄だから。

×

あの女があの人のためにすべてを棄てゝ出るだらうか。もし出ない時はこのさきどうなるあの人だらう。

×

今日、上野で見た樫の大樹の幹。それは

みにくく、洞もあり、瘤もあり、條目もあつて灰色してゝ見るも汚いものだつた。年月といふものがそんなに傷手を負はせたと私にはおもはれた。年月たてば綺麗にはならないでその反對になる。何といつても結婚生活などそんなものらしい。伐つて了ふ方がずつと小綺麗でよいとおもふのも一つの考へ方。たとへどんなに汚なからうともそれは生かされてゐるのがいいとおもふのも一つの考へ方。きれいに純粹に行くといふことはのぞましいことであるが、理想であるが、とてもゆけさうもないなら汚くともやはりつづけてゆくところに人間としての敬虔な心もくまれよう。

×

はたさねばならぬ義務。
つくさねばならぬ責任。

×

——三月十九日午前二時——

獅子もつかまへて檻に入れてあるのを見て來たではないか。あきらめてはならぬ。

×

妄想夫人よ、から自分を呼ぶ。嫉妬夫人よ、からもまた自分を呼ぶ。『バカ』と。

×

『あなたはどうします？　やはりあの人と一緒にゐますか、かくも心を虐げられてもやつぱり……』

『だつて仕方がないではありませんか、人の心も、自分の心もまだおちつくところまでおちつかないでゐるのですもの、やみくもに騒ぐことはハメツですもの。あの人も保ちたく自分もたもちたく、あの人もいかせたいし自分も生きたいのですもの』

といふ風に自問自答する。

『そんな侮辱と苦痛を耐へるなんていくぢなしですね』

一いくぢなし……かもしれません。侮辱されたといふことはよく知つてゐる……しかし、出かけて行つてるあの人は問題ではない。私の射たいのはあの女の心です。あの女と私、この二人の爭ひです。引張り出す力、引張りもどす力、力のためし時とおもふとおもしろいもの……。かうしてぢつとするうちに私の爆破されたものがどれほどであつたか分る。煙が消えるから。そして……そして……そのあとで、『時』をまつて……』

×

——三月十九日午前六時——

朝の光が訪れてくれた。どうにかしてあひたいとおもつてゐたこの親切な『朝』の貌。死なないで又朝をとおもつてゐた『朝』が母のやうにやさしく來てくれてうれしい。これで丁度四つ目の朝を迎へる。あの人の發つたのは十五日の夜そして十六日の朝が來た。十七日の朝が來た。十八日の朝が來た。今この十九日の朝も來た。丁度四つの朝。

×

さて今日の日よ。
私には何がある？
なにが私をなぐさめる？



ハシジイ

旅苞

深尾須磨子

『アルサス行』より

巴里のギャル・ド・ノルからサヴエルヌまで七時間、一寸雜誌一册の旅である。

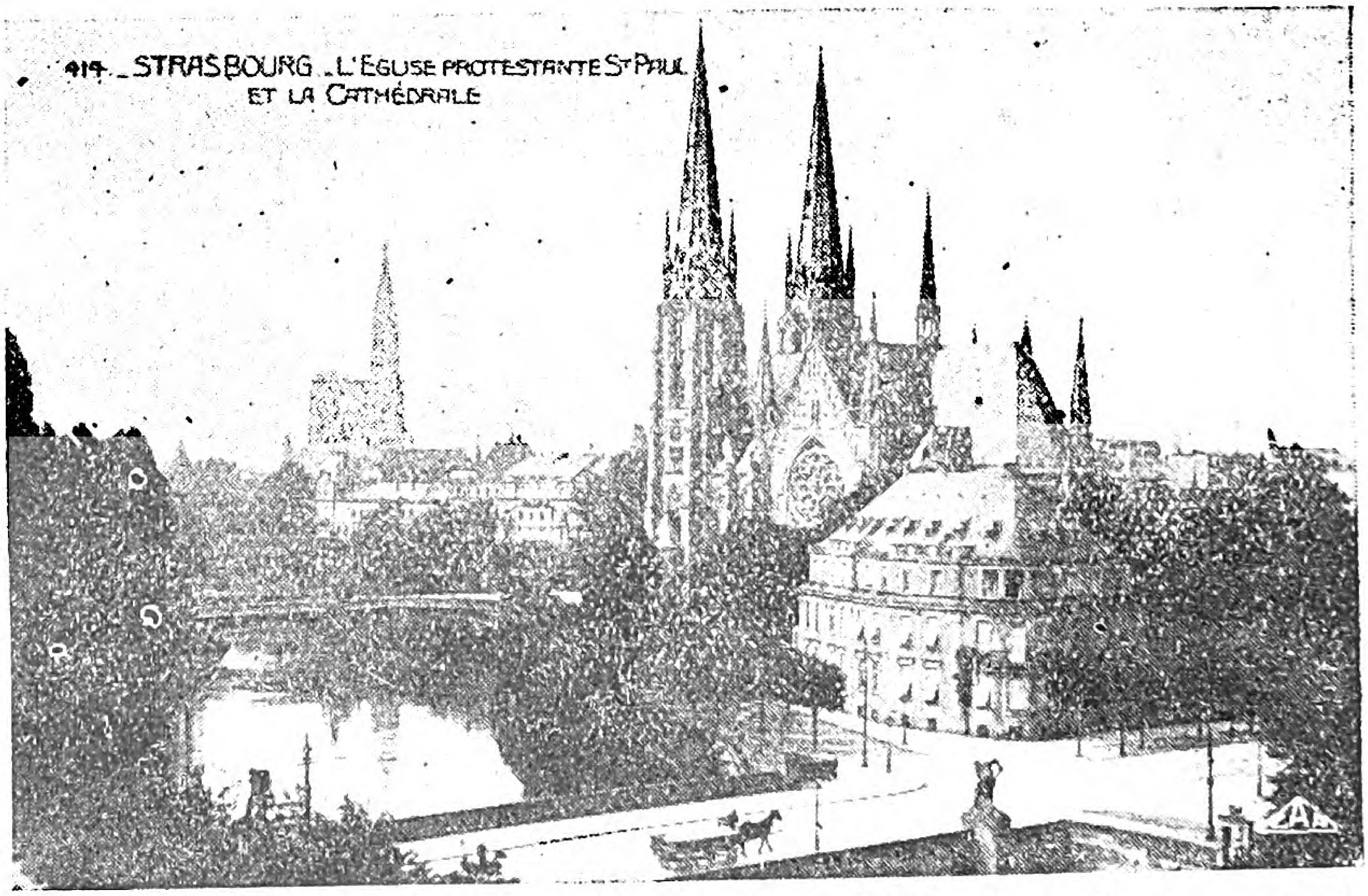
沿道におごる刈萱や、滿秋じみた秋草の中に、とり亂した季節おくれのひなげしが、「血のやうな」と云ふおきまりの形容を、危ふく咽喉佛のところまでおびき出す。茫茫、どこを見渡しても只茫茫である。茫茫としてひろがる牧場と、麥畑と、じやが薯畑と、川と、丘との縞模樣。ところどころに乾草車が行きかひはするが、家らしいもの、人らしいものはほんの數へるほどしかない。一體ここは無人島かしら、どこへ行つても家が額を突き合せてゐて、毎年何十萬とかの人の餘りのやり場に困つてゐる國などは見るからに涎の光景である。あの小高いところに掘立小屋を建てて、あすこの荒地をたがやして、と、つひにはさうした意地ぎたない根性にもなる。

ナンシイからサアルブルグあたりにかけては、さすがに十年間の時も片づけきれなかつたらしい。いやらしい物の形が殘つてゐる。卽、茶碗飛び、鉢舞ひ、どころではない、うつかりすると、地球の進行をさへ止めかねなかつた、あの大喧嘩の紀念品である。この肌寒さ、平和！今こそわたしは祈る。

佛蘭西のいとし子、歸れる子アルサス、

ところで折角歸るには歸つて來たが。再三の逆境に僻みが出來たせいか。どうも親との折合が惡い。口癖に子の名儀が返上したいと云ふ。遂には一人立ちがしたいともせがむ。

何しろ「子を奪ろ子奪ろ」で隣りに奪られてゐた五十年の間に。使ふこと嚴禁のお達しで、アルサスは肝心の佛蘭西語を忘れてしまつた。それ故佛蘭西のいとし子、歸れる子アルサスは、よし獨逸語には通じてゐても。佛蘭西語にはいたつて怪しいものである。そこで佛蘭西は氣が氣ではない。何とかしてアルサスに佛蘭西語が話させたい。片言でもいいからなるべく早く仕上げさせたい。が、ここでは五十年の時が特に意地惡く長くて有効である。もとより郷土



ストラスブルグの寺院

的な――獨逸語風の――アルサス語の持主とて。嚴しい養ひ親の五十年の教化は、憎いほどにも行屆いてゐる。商店の廣告から一切が、今尚獨佛語の二樣で記されてあり、ストラスブルグには立派な獨逸語の新聞がやにさがつてゐる位で、しかもそれは單に言葉の上ばかりではない。佛蘭西語の通じぬアルサスは、たとへ元來のアルサス風を差引いても。尚すべてが佛蘭西の他地方とは大違ひである。しかもアルサスのよさ、その自然も、その文明も……。おまけに佛蘭西の富源アルサスの野を享けて、人人の質實さは木なら樫である。

このあたりの建物一切は、かなり雪國向きのもので、また地方味たつぷりである。その構造も、色合も、全く子供のこしらへた手工品の趣で、その窓の作り方にも塗り方にも、たしかにくろうとには出せぬ味がある。自然がめぐらす配景にも十分に忠實で、配景を引立てこそすれ、決して邪魔はしない。自然に對する從の位置をよくよく心得てゐる。

働き方にも色色あるが、ここアルサスの人達の働き方と云つたら、それこそ佛蘭西中の懶惰の總和を、ここで取返さうとでも云ふ風だ。なまけ者の亭主を苦にして、身を粉に碎く女房が偲ばれる。一週に一度日曜の他は、ここで見付からないのは遊んでゐる人。

二本の手足では不足のここで、何よりの恥辱は云ふまでもなく無爲。たしかにアルサスの人達は、生きてゐる間よりも働く間の方が長いに違ひない。

アルサス名物はじやが薯に玉葱、それから鶴の巣。ここら一帶の屋根屋根には、春毎にめでたい鶴が巣をかける。

一枚の畫。野中を行くのは一人の小娘。

藍色の服と、花模樣の肩掛と、頭の黑いリボンはそのからだほど大きい。足には木靴。右の腕に抱へた赤い大蝙蝠がさぞ重かろ。左手のさげ籠からはじやが薯がのぞく。おつと、その人形のかあいい兵隊さんをおとさぬやうに。小娘の後ろには紫の山、山の麓には會堂の尖塔、塔の頂にひろがるのは、白と薄紅色のむらむら雲。

また一枚の畫。これは一人の男の子と、二人の女の子。子供達を浮きあがらせる配景は、白楊の木立と、牧場と、小徑と、それから赤い屋根屋根と、入道雲と、青空と。一人の女の子の持物は大蝙蝠傘、いま一人のは花束、男の子のは佛蘭西の國旗、六つの木靴が步調を揃へ、三つの口が合唱するのは、佛蘭西の國歌マルセイエエズ。

また一枚の畫。氣を付けをして誰かを待つ男の子と女の子、男の子の肩には鐵砲、女の子の手には花束、あたりの百姓家には高高と佛蘭西の三色旗がひるがへる。子供達の待つのは將軍。

これらの畫は、すべてアルサスが持つ戲畫の天才ハンジイ（大の佛蘭西思ひ）の作品である。

大戰が終つたのはすでに十年一むかし前、だがこの大疵はなかなかなほらない。「どうぞ二度と戰爭のないやうに」「もう戰爭はこりこりだ」逢ふ人每の誰もが繰返すこの叫び、もしかどこかに好戰症の氣違ひがあるなら、その神藥にこの叫びこそは聞かせてやりたい。

嫁に行くことと、子供を生むことを、後生大事に樂しみながら　但し子供の方には？が必要である）只働きつめるアルサス娘達の眞直な兩脚が、どんなにたしかに佛蘭西を支へて立つか。

ストラスブルグからサヴエルヌの宿へ歸る汽車中に、乘り合せた上品な老人が、かねて佛蘭西領事として、日本の各地にゐたとかで、日本のことを褒めるは褒めるは……。いかに身贔屓なわたし達でも。しまひには顏が赤くなつた。褒められるのも苦しいもの、無性に涙がこぼれたり、嚏が出たり。

ストラスブルグの「深い穴倉」と云ふカフエの一部屋。隅のテエブルに一つになつてゐる顏ぶれは、と、かう云へばいかにももの凄い一團を思はせるが、さてこれはいたつて善人揃ひ。中でのおしやべりが銀行員のジヨセフ、次が粉屋アレキサンドル、それから機械屋フランシス、ジヨセフの許嫁エリイズの順。ビイルの泡よりも活潑な談笑の聲、その輪の一番靜なところで、ストラスブルグ名産腸詰の御馳走になつてゐるのは、お客分の日本女須磨子と綾子。

宿の姉娘の方は佛蘭西語もかなりだが、妹娘の方は皆目話せない。「話せないのではなくて話さないのです。あれは佛蘭西が大嫌ひで、獨……」と云ひさして姉娘のエリノズが急に言葉をにごす。ハンジイの畫に恥ぢねばならぬアルサス娘、こんなのがあつてはお母さんの佛蘭西も心配な筈である。



潮の香・草の香

大井さち子
松田解子
葵イツ子
河井稲子

海！ 海？ 海!!

みんな私のやうにするのだらうか。海をあつかふのに——、戀と星と、太陽と月と、果實と、シャンパンの小量と、風と帆と、ＥＴＣ‥‥それらと一緒に日に一時間か二時間念をいれて息を吐いたり吸つたり曲つたり伸ばしたりすればそれで好いのだらうか。

實際、豐かな光線の束は獨りぼつちの私を青空色にぐるりと染めて、海から運んでくる生物のやうな氣高い匂ひを周圍にまきちらす。すると私は壯大になつて、『‥‥何うもあのすばしつこく動いて來る波の背といふ奴は栗毛の背波の艶に似てるやうだな‥‥』とかう呟やく。

しかし誰もその地球の心臓である處の海についてことさら露骨に饒舌らうとはしない。男も女も海に馴れてしまつて、もう驚異的な瞳を投げかけようともしない。泳ぎつかれたものは飲酒の後につゞくやうな愛

鬱と疲れを睡氣に感じて灼けた砂をほつて腹這ひになつたまゝ自分のことを考へたり情人のことについて祈つたり語つたりしてるだけだ。

岩の蔭で遊びに餘念のなかつた女の兒は突然笑ひ出していふ。

――ママ、ママ！ べべの手をごらんなさいよ。桃色の蟹みたいだわ。

ゴーガンのタヒチの女達がスカールにむけて若い手を愉快に帆立貝のやうにふり、哄笑が蝗のやうに頬つぺたにとび跳ねる。

――あなた知つてるの?! あの人達を、もう一人はほつれ毛をかき上げながらいふ。

――いゝえ、だつて好いわよ。ちやんと喜んで笑つてるんだもの。

陸へあがつた上着をつけない男達の兩胸には赤い天道虫が一つづゝ浮いて私の瞳を吸ひつける。たゞの氣まぐれから輕く觸れて行つてつまむでみたい。

處で今朝、夫より一足先きにおねだりしてホテルに着いた品の好い若いお氣取りやの夫人は赤、青、緑、黒の洪水の躁いだ渚をかろやかにそゞろ歩いたのち、寢所にゆく太陽が眞紅になつて染めてるテラスの一隅でこんなことをかきつけてゐた。

――ムシユー！、あたしのお莫迦さんつたら!! 結局この海濱は、いまのあたしに長い吐息をめまぐるしく、つめこむばかりです。ひとりでは、本當にひとりでは……それに今夜にでも海が暴れて來たら何うしませう？――どんなに淋しがつてるあたしだか想像して下さいませ。明後日の土曜がまたれてまたれて心が痺びれて來さうです。お役所がおすみになつたら、どうぞ一刻も早く、ね、――

おや、潮の香が印象や愛情のやうに流れて來た。（さち子）

草原の夜

都會で、周圍を引く事を覺えて來た友達の俊枝さんが、其の夜の女王だつた。吾々は、純愛に就て語つた。空には銀河――流星。露がみんなの臉を、しつとりと潤ほして居た。遠くからは灯。其處で、頑固な親達が待つて居る――『俊枝さんはどう思ふの？』

彼女は、直ぐには答へなかつた。私は、彼女の、悩ましげな、小さい、黒い、ハート形の唇を、横から眺めた。

『私は、とても、それを考へる勇氣さへないのよ。だつて姉があんなにして死んだでせう……戀なんて、恐ろしいものだと思ふわ。命懸けのものだと……。』

『命を懸けてやつてもいゝ事があるんだつたら、實に仕合せな事じやないの。』

私は其の頃、戀にすら命を捧げても構は

ないと思つて居た。
『だつて、さうかしら……やつぱり、あゝして死んでも幸福なのかしら？』
　涙ぐましい面持ちで彼女は云つた。長く引いた眉墨が、白い横顔に浮いてゐた――この眉墨が、此の人をも、戀の犠牲にする楔になるだらう。其の外に何が有る？　萬年センチメンタリスト！　私は、半ば嫉妬に似た反感を或辛辣な言葉で表現したくて堪らなかつた。彼女は、思ひ掛けなく、私共に宣言する様に云ひ切つた。
『さう――殺される程愛されてゐたんだわ姉は――幸福だつたのだわ。』
　だから自分も、其の眉墨と屍とで、死ぬ程の戀をするがいゝ――私は、滅茶苦茶に蹂躙された草深い自尊心を、どう爆發させていゝか分らなくなつた。
「でも、戀で死ぬなんて馬鹿らしいや。もつと／＼大事な仕事がある筈だ！』
　私は、無意識にさう口走つた。
『なあに、もつと大切な事つて　・
　年下の絲子さんが、詰問した。
『きまつてるじやないの。私達が始終、やらなければならないつて話合つてる事よ。』
『うん。』殘りの二人も私に同意したらしかつた。俊枝さんは、長い袂を夜風に、搖らせ乍ら、草原に立つて云つた。
『私、早く又、東京に行きたいわ。』
　暗藍に澄んだ夜空に、銀色の尾を曳いて、星が流れた。
――待つてゐるだらう。又、小言を云ふだらう。色んな事をうるさく聞くだらう――
　私は、戀の事も、戀よりも大事な事も、露の降りた草原に投げすてゝ、一散に家に走つた。（解子）

顔

　畑ばかりの中に、ぽつつり落ちたやうな、小さい家であつた。主人が此處に住むことになつたのは、暑さを避ける意味も無く、唯、夏いつぱいに、協力して仕上げなければならない、仕事の爲であつた。終日默々として、頁を繰つたり、書き入れたりするばかりで、隨分疲れても、夕風に吹かれて休みたいのに、その暇さへも無かつた。それに、すつかり文通も絶つてゐたので、誰のことも判らなくなつてゆきさうで、全く寂しくなつてゐた。
　さういふ時に、綺麗な毛並の宿無し犬が、毎日來るやうになつた。人間の都市であれば、斯ういふ動物は、交通の邪魔にもなるし、通行人を怖がらせもするが、此處は野菜畑であるから、何事も無さゝうに思はれた。
　放浪の犬は、ジプシーと名附けられた。皆が食事の終る毎に、庭先に待ち兼ねてゐるジプシーのところに集つて、何かを與へるのを樂しみにした。ジプシーは元氣よく遊び廻つては此の家に歸つて來て、益々、

專屬の形になつて仕舞つた。

二ヶ月ばかりの後である。家の横にある牛蒡畑の中から、農夫が、此方に向つて呼びかけてゐるので、皆が、其處の窓に集つた。「お宅の犬が飛び廻つて、こんなに畑を荒すので、困つて居ります」といふのである。さう言はれて、指差された方を見ると、今迄氣附かなかつたが、可なり廣い土地に、整然と列を爲して、何かゞ芽を出しかけてゐるところを、氣の毒な位に、踏み亂してゐる。農夫は、肥料の代價や、種々な手數に就いても訴へるやうに話した。

あの犬を下さいと言はれると、可哀さうで堪らない。然し、こんなに、人間に迷惑をかけてゐるのであれば、殺されることを、妨げることは出來ない。私達は「ジプシー！　ジプシー！」と呼んで、農夫に渡さなければならなかつた。

ジプシーを荒繩で縛つて、竹で叩き乍ら伴れてゆく農夫の顔は、殘忍に見えた。

だが、もつとよく見てゐると、それは、犬に對しての、瞬間の殘忍性の表はれでは無くて、現代の農村人の、現實が組み立てた顔であつた。

若さを持ち、機會を得た者は、最小抵抗線を求めて、都會へ行つて仕舞ふ。その跡に敗殘者が、相變らず勞苦の多い、收益の少い仕事をしてゐるのであつて、太古のやうな生活にでも引下げない限り、安定の無い窮狀である。

いつ見ても、變化の無い、面白味の無い土を耕してゐる。そして今、炎熱は、農夫の健康を助けずに、滅亡へ追ひ立てるやうに照りつけてゐる。

空氣の濁つてゐない、靑くて美しい野菜畑を、農夫は散歩してゐるのでは無かつた！（イツ子）

生命をいとほしむ

夏の海邊の朝ほど氣持のよいものはない。私はいつもまだ涼しい朝の影の深く思はれるお庭に眼をやりながら、その淸い空氣に快い呼吸をする。眼覺めて、松の樹の幹にうるほふ朝露を思ひ、ゆるやかにひゞく波の音をきいて、私はどんなに心よい事であらう。

一ッ家の寂しさも、このあたりの靜寂も、朝の澄みまさる空氣に淸められて私を待つてゐてくれるやうな氣がする。畑も森も散在する別莊も眼に馴れたものながら、今朝の新しい眺めのやうに思はれる。緣側に坐りながらお庭に下り立つ事さへも殆どないと言つてもいゝ程であつたが、朝の私の室からの淸らかな、澄んだ眺めに心からの滿足とよろこびとを思ふ。

まだ歩いてはならないといふ醫師の言葉を守つて、私は朝々を靜かにすごすのである。すこし位歩いてもよくはないかと家の人は言ふが、醫師から許されるまでと私は

いつも答へる。海邊へゆける小道はすぐ眼の下につゞいてゐる。朝早くからした道を歩いて海風に吹かれてきたら氣持のよい事であらうと思ふ。さうした日が私にある事かない事かかつて考へた事もなかつた。私は松原になつてゐる森のあたりを眺め、海近くある身を思ひ、波の音などきいて、そこにある私自身に別に不滿も思はないのである。またたとひ不滿を思つた所で仕方もないのであるが、思はないから極めて平和である。健康であつた頃に今思つてゐるやうな平和さが私にあつたであらうか、とさへ思はれる。

　名のわからない草花が、此の頃本當によく咲く。ぢやのめ草と殆ど同じと言つてもいゝ花で、その艷のある黄色の花が梅雨の空の下でも美しく輝いてゐる。この花は二三年前から誰が植ゑたともなく自然に生へて毎年ふえ、今年は私の家のお庭の半分は此の花がかざつてゐてくれる。私の家ばかりでなく、海岸の大抵の家にはみんな咲いてゐるといふから砂によくつく花であらう。

なでしこもまた此の邊の野生の花で、高價な撫子よりもはるかに美しいものである。あちこちに撫子が咲き初めてそれを取つて來てもらふ頃はいつも私の待たれる心である。野いばらの淡い香りは今私の机の上にあつて、朝の明るさを思はせてくれる緋のダリアと共に私を樂しませてくれる。咲き亂れ、咲きほこる花を眺めながら、私は何思ふともなく時をすごすのである。雨に濡れた朝の趣、畠に百姓の出て來るのも私の早く目覺るのも、夏の朝のよろこびでないものはない。

　かくて靜かな朝が私に訪れ、海の空氣を深く吸つて、私は私の生命をいとほしむのである。（稻子）

表紙繪及びカットの募集

清新にして印象的なるもの、象徴的にして鮮麗なるもの、其他、強烈なるもの、優雅なるもの、各種各樣の表紙繪及びカットを募る。女性生活に對して暗示をもつもの、店頭における多くの表紙繪をつのる。ふるつて應募されんことを――應募者女性に限る。

洋　畫――六號大
日本畫――菊版四倍大程度
カット――雜誌を見て適宜に
期　日――毎月十五日
謝　禮――應分のお禮をいたします。



吉田雅子

長流記

（その一）

山田邦子

これは曾て三宅やす子氏主宰のウーマンカレントに「故水野仙子女史と私」と題して書きはじめてみたものの續篇のやうなもので、或る時代――明治の末年から大正の初めの頃――姉妹同樣に親しみ合つた二人の女性が、互の心に互の特點を感じ合ひ認め合ひつゝ女性らしい弱さと不明さから心の底に互に忘れ難い捨て難い眞情の觸れ合つた親しみを持ちつゝそれを尊重するよりも離れ〴〵に見える二人の一面の性格の相違點を高潮させて袂を分つてしまつた。それには一口に言へない心的經過があるので、あまりに卽きすぎたものゝ離れてみたい不一致な點が目につき鼻についてくる人間的心理狀態の一道程でもあり――これ程に卽したものゝ別れて數多の星霜を經た後の思ひ出の深さ微妙さ！――又年齡の時期的關係、境遇の變化、時代思潮の影響等もそれ〴〵原因をなして、折りから外面的には二人を隔てやうとした妙な邪魔（？）も手傳つて、二人はいつか又手をとり合ふ時を祈りつゝ分れ〴〵になつたのである。

其一方の女性が早く世を去つて十有餘年の歳月が又過ぎ去つた。殘された一方の女性が不惑の年齡に近づいた今日それ等の過去を眺めかへし…あへて事件にのみよらないで、すぎて來た當時の時代や自家の生活狀態をも合せて…靜かな涙の流るゝ心持でしみじみと追想記を書いてみたい願ひを起したのである。

感謝すべきを感謝し謝すべきを謝し、又友の狹いと思ふ見解をもたゞしてみたい公平な心の聲として己に語り亡き友の魂に語り

世に語らうとする一篇である……。

思想急進の今日に於て之等の企ては直接若き人々の心を退屈に導く外益ないものであるかもしれない。……然しながら常に新なる世に於て過ぎし時代の眞味をたどし味ふ事は又大いなる完成への一率仕であると私には考へられる……。それは兎も角も私は筆を起すとしやう……。前篇に於ては金もなく職もない二人が初蓋の丘の小さい家に生活に窮しながら仲よく暮してゐる頃を書いた。其生活も半年程で、職を得た二人は通勤やいろいろの都合上麹町と下谷とに離れて暮すやうになつたのである。今回はそこから筆をおこす……二人共文筆によつて身をたてようと志て上京自活生活を續けてゐる女性で二人の交友は明治四十二三年頃の女流文藝雜誌上の交際から初まつてゐるのである。

番町と西町時代

二人の心持はだんく\結婚の方に傾いていつた。どこまでも藝術に精進して、家庭などに捕へられず、專心其道の勉强をしようとて一年前に家を出て東京に自活を續けてゐた二人ではあつたけれど……。

其ころお慶さんは谷中（やなか）の或る地方相手の小さい雜誌の編輯を引受けてそこから受ける報酬で暮して居たし、私はC新聞社の家庭記者としてそれから得る金で生活をたてゝゐた。私の下宿は番町のA子爵邸の物さびた赤煉瓦の塀と向ひ合つてゐるY邸の土塀のなかに小さい借家の通り（とほ）に面した古びた三疊間であり、お慶さんの下宿は下谷西町の狹い小路に駄菓子を並べて細君が小使とりをしてゐる大工さんの家の奥の六疊であつた。

私の下宿の小母さんは以前醫者であつた人の未亡人で三人の遺兒を育てながら生活をたてる爲に東京で素人下宿をしてゐたので、六間の家に自分の家族が四人と外に三人の下宿人が居た。私をぬかす三人の其人々はもう長く前から居る人たちと見えて——三人とも會社員であつた——家の人たちと一緒の食卓で朝夕家族的に食事をしてゐる事を私は越して間もなく知つた。其なかの一人が金持の道樂息子で會社を怠けてよく牛肉を買つてお酒を飮む時なども、そこの三人の子供たち——長女は電話局へ長男は中學校へ末の娘は小學校であつた——まで其まはりに座つて肉やしらたきを小皿に分けてもらつたりして食べてゐた。私だけには小さいお膳がべつにこしらへられて三疊に運ばれた。

小母さんは親切な人で私が田舍から持つて來た着物を行李の底へい、しはだらけにして入れておくのを見て裾がつぶれてしまふと言つて自分の家の簞笥の一ばん下の抽出しを一つ空けて私に着物を入れて

おくやうに借してくれたりした。私は毎日出かけて歩きまはつて歸つてくるので勞れがひどくて箒を取るのもいやな日が多く部屋のなかは埃だらけになつて物がとりちらし放だいになつてゐるのだがごくまれに晴れた日曜日などに急にたすきがけになつて行李を拂つたり硯を洗つたり大がかりの掃除をはじめる事があつた。小母さんは笑ひながら

「マア長田さん今日はたすきがけですね。どれお手傳をしませう」

など〻身輕に夜具を干してくれたりする小母さんであつた。

「長田さんのはきだすごみは其まゝにしておいて下さい、私が一ぺんしらべて捨てますから……長田さんのごみには役にたつものがどつさりありますよ、ホラ〳〵此きれもたすきになる……此半襟も頂いていゝんですか」

といふやうなつましい處のある小母さんでもあつた。

お慶さんの方の小母さんも親切者であつたが何を言ふにも大工のおかみさんで下品の處はあつた。いつかお慶さんのお辨當のおかずが梅干一つにたくあん二切といふので編輯の同僚が大いに同情して一同少しづゝおかずの寄附に及んだといふ滑稽談もぢきに生れた。時にお金を貸してくれと言ふので困る、今仕方なしに五圓程貸してしまつたからと言つて私が行つた時お慶さんは店の駄菓子をどつさりお皿に盛つて持つて來たりした。

「昨日はをかしかつたのよ、私がこゝで原稿書いてゐると四十位の男が店に寄つて一寸出てゆくと又引かへして來て小母さんと何か言つて行つたの、すると晩に小母さんがさつきの男が奥に居る女の人は何をする人か、一人ものかとやたらにきくんですつて、そして一人ものなら世話をしてもいゝつて……バカにして、お妾の口が一つ出來たわ……」

お慶さんはかう言つてニヤ〳〵と皮肉な笑ひ顔をしてゐた。人によつてはこんな事を侮辱と感ずるのだがお慶さんはさうした處は何も小説の材料だといふやうに、いかにも自然主義作家らしい興味をもつてそれを語るのであつた……お慶さんの下宿はさうした下町のごみつぽい處であつた。

二人は時折往復しながらも自分々々の生活にいそしんで幾月かゞすぎた。然し其頃の社會が婦人に與へた職業の地位は今から思へば實に狹くやぶさかなもので、わけて文筆生活に於てそれが甚だしかつた。然し男とても、たとへば私のつとめてゐた新聞社のなかにも百圓の月給をとる人は三人とは居なかつた時代である……それにしても婦人記者の生活は苦しいものであつた。男の記者には仕事の上の役得があつて、華族や富豪の、人物を見込んでの援助といふやうな事も――到底利益交換にすぎない援助といへ――いくらもあり得るのだけれど、婦人の場合はさうはゆかない、そこまで切りこんで行き

得るのはおそろしく仕事になれた腕き〻か——こんな人はおそらくなかつたら——或は貞操を捨て〻の野を行く氣持になるかの外はないのである。

私は毎月の月給のなかから九圓の下宿料を拂つてしまふと下駄と半襟と足袋は職業上毎月必要とするもので是非買はねばならぬし、通勤の電車代を拂ふと晝食をするお金に不足する薄給であつた。洋傘やショールの季節には雜誌の仕事を手傳つてやつとそれを買ふといふ追はれるやうな月々であつた。

強いやうで弱い私の性分はだん〲と此世苦に勞れあえいで來た

朝鮮が日本に合併された年の秋向ふの貴婦人が揃つて母國觀光に出かけて來た。私の日々は朝から深夜まで飛びまはらなければならない程忙しいものになつて來た。何々會の招待、何々協會の……と招かれてゆく貴婦人たちを追つて、時には會の後を其宿所までも尋ねて記事をとらなければならなかつた。夜更けて人氣のない編輯室に歸つて來て原稿を書いてゐると下の工場の職工たちの活字を拾ふ聲が水面に響く唄のやうなあはれな調子で聞えてくる……

「長田さん、これだけ切つてゆきますよ」

職工長はあがつて來て私の書きかけの原稿をはしから切つては持つて行つて活字にひろはせてゐる。自分の書いた原稿を讀みあげるそのあはれな唄のやうな調子をき〻つ〻私は筆をいそがせた。

……李止鴨夫人を訪ねて御感想をとへば……李止鴨夫人を訪ねて……原稿の唄は深夜の工場を流れて二階の編輯に一人筆を走らせてゐる私の心を涙つぽくさせる……。

月の光を身に浴びて家に歸りついてみるとほの赤い電燈の光の下にお慶さんの置手拭が見える。

大そう忙しいとみえて來るたび留守なのね、私も此頃忙しく暮してゐるけれど何かしみじみ貴女に話してみたい氣がするの、此度の日曜に又來ます。

佐千子様　　けい

お慶さんも仕事に勞れはじめてゐた。元氣よく初秋の丘を下つて職についた二人の勞れは同じ形でやつて來たらしく、朝鮮の貴婦人たちが歸つてしまふ頃から私たちは一人で居る日はまれになつてしまつた。お慶さんが私の方に泊るか私がお慶さんの宿に泊るかして……瓶にさして出た白百合の蕾が咲いて散つてしまふ頃やつと自分の下宿に歸るといふやうな互に寂しい心の狀態にはいつていつた——。

波がしら

松助が倒れしとある新聞の記事を見つむるさみだれの朝

梅雨小袖その家主の面影をふと思ひいづる朝の食卓

あでやかに香煙のごとしだれたる小雨の夕の門の青柳

折紙の鶴よ紫雲英よ小さき手が卓を取巻く雨の山莊

或る朝は雨に唄へり或る朝は風に踊れり山の高萱

松越しの青き日ざしに晝ながら蟲の音ぞする山莊の庭

波がしら青く光りてゆきかへる宵闇こそはなまめかしけれ

夏の夜はなべてうつくし青蚊帳もお六に似たる人の素足も

牡丹燈籠の物語りめく人ふたりふけゆく窓に天の川見る

山百合の香がしみ〴〵とうつりたる夏の夜明の水色の帯

（以上十首鎌倉にて）

木村富子



（長谷川春子）

黒の羽織


（栃内晋琴）

杉浦翠子

眠薬飲み過ぎしわが顔色に死に遠からぬしづけさただよふ

薬飲むともこの口惜しさに寝つかれず髪毛さへも熱し枕に

我が使ふ扇の風はそよそよと隣にゐます君にこそ吹け

我が姿もやがてかくあれ黒の羽織につくをみなの寂びを見て居り

我が夫に白髪生ふは我がさびを知るより悲したよる心に



遠近

シャポー

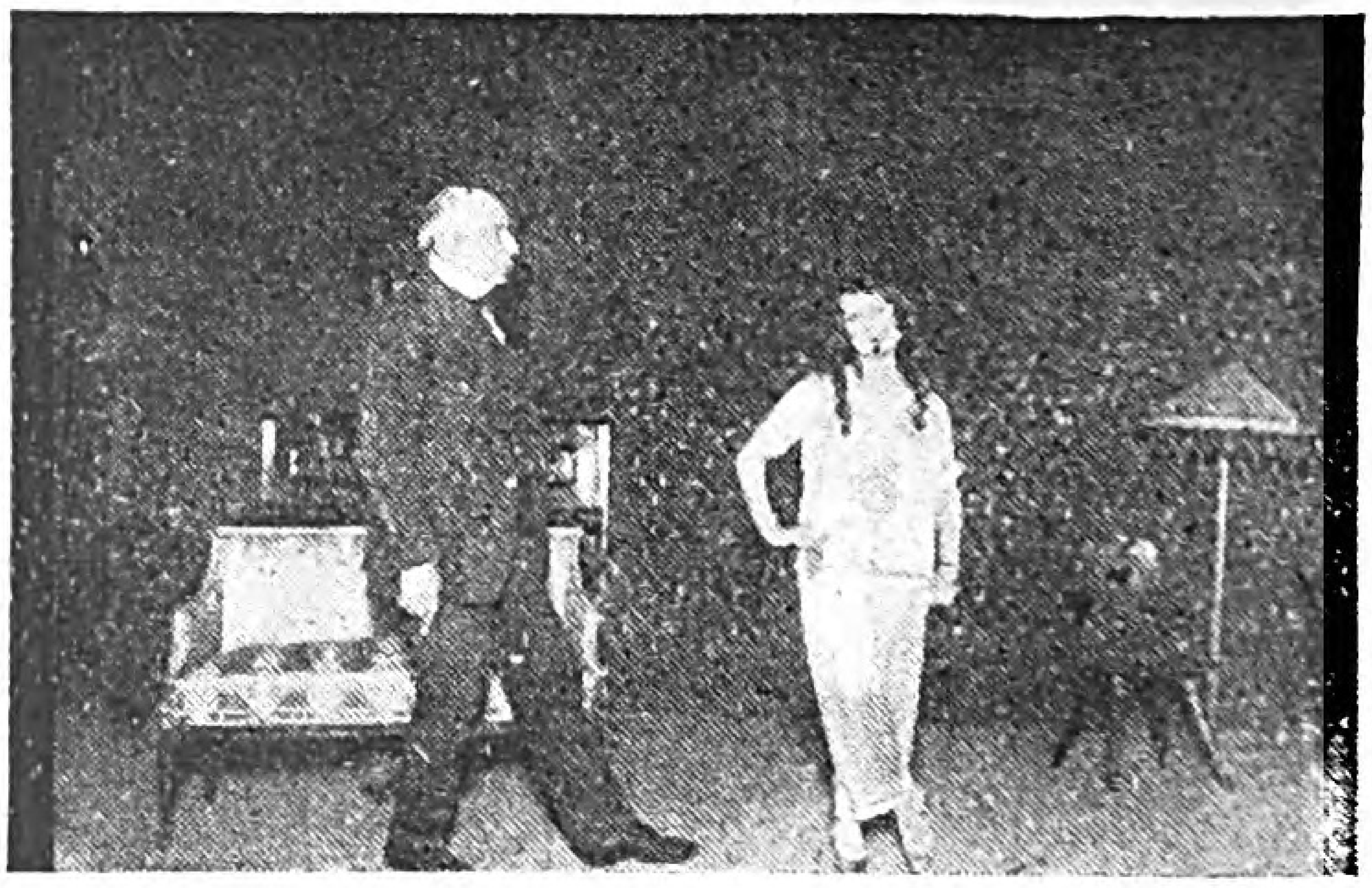
三四年ぶりで「コメディア」を見る。裏を返してみて思はず一驚する　三四年前の「コメディア」の裏、（第四面、附錄のはさまれてゐる時には第六面）は全部芝居、寄席、音樂會の案内に當てられてゐたものだつた。それが、――上部には大きくスイネ・コメディアと記されてある。いふまでもなく此頃は映畫に献げられてしまつたのである。下方に小さく活動寫眞館の廣告も出てゐる。館數の夥しくなつたのにも一驚せざるを得ない。ヴイウ・コロムビエの名をその中に見出すに到つては、哀惜以上の何かを感ぜしめられる。

ヴイウ・コロムビエの説明をするのは蛇足のやうな氣もするが、哀惜の情が一人合點になる場合を惧れて念の爲その何であるかを一應明かにしておく。ヴイウ・コロムビエはルーニエ・ポーのメゾン・ドゥ・ル・ウーヴルと共に、巴里に於ける新劇運動の先鋒といつてよいものだつた。其處には彼自身優れた役者であり作者であり同時に又演出者でもあるジヤック・コポーの精悍な眼が光つてゐた。コポーは又一方に「ヌヴェル・ルヴユ」といふ堂堂たる雑誌を持ち、他方ではモンマルトルにアトリエ座を經營して俳優の養成を心がけてゐた。メゾン・ドゥ・ル・ウーヴルが僅々百人を入れるに足るだけの小屋であるに反し、ヴイウ・コロムビエはかなりの前房がある上、三百人以上は優に收容し得る小劇場で、舞臺も舞臺装置も、ほんの小細工にすぎないメゾン・ドゥ・ル・ウーヴルとは大違ひの整然たるものだつた。私はその舞臺で「ロカンデイエラ」や「メゾン・ナタール」やジヤン・サルマンの「アムベスイール」などの演ぜられるのを見た。舞臺の上のコポーは小憎しいほどの巧さのある俳優だつたら。

巴里に於ける小劇場の經營難を耳にしたのはかなり前だつたが、その結果が「コメディア」の映畫欄に現れてゐるのを見ると、あまりに決定的で、妙にはかない氣さへする。ヴイウ・コロムビエに比べると吹けば飛びさうに貧弱だつたメゾン・ドゥ・ル・ウーヴルは依然イプセンの「野鴨」などを上演してゐる。出し物だけから見ると、築地小劇場もメゾン・ドゥ・ル・ウーヴルと同じレヴエルにあるやうだ。

今私はメゾン・ドゥ・ル・ウーヴルのことを吹けば飛びさうな小屋だといつた。が此小屋の價値と歴史とは決してヴイウ・コロムビエに劣るものではない。デイユーセもかつては此處の舞臺に立つた。クローデルの作品の初めて上演せられたのも此處である。私は此處でダヌンツイオの「ヂヨコンダ」やストリンドベルクの「父」やイプセンの「人形の家」などを觀、妙にテアートル・アンテルナスイオナールといふ感じの湧いてくるのを覺えた。私は又此處でメーテルリンクの新作が新夫人とリユー

遠近（シャボー）



ニエ・ポーとによつて演ぜられるのも観た。舞臺の上のリユーニエ　ポーはコポーよりは更に肚のある、大きさのある妙味を見せてゐた。クロードルが、誰が何といつたつて彼だけは自分を認めてゐると力んでゐるのも、むべなるかなと肯かれた。序でに附言しておく。リユーニエ・ポーの夫人スザンヌ・デプレは、國籍こそ違へ、エレオノラ・デイユーゼの直弟子といつてもいい。づんぐりとして不美人だが、藝は大したものである。私は彼女の「ヂョコンダ」を二度観て二度共泣かされた。

巴里で藝術家を引き立てるのは貴婦人達のサロンだといつていいだらう。それだけサロンは時勢に對して鳴銅(なるかね)や響鈸(ひびくおうはち)の如く敏感である。そのサロンの話題の中心が今やスイネマに在るといふのだから、活動熱の蔓延恐るべしである。現に五月十九日の「コメデイア」は「演劇界の危機」なる題下にウーヂエン、ブリユー等の意見を載せてゐる。曰「大衆は昨日の形式を賞味せず」又曰「生ける影は劇に於ける臺詞の如くエスプリあるものに非ず」つまりブリユーは劇は劇として再興の機あり又あるべきものと信じてゐるやうであるが、かくまで全盛な映畫には映畫で、何かよいものの出るのが當然といつていいだらう。さうしたよいものが日本に來ないのは何といつても寂しい。五月十四日の「スイネ・コメデイア」はスル・レアリズムのスチール、――「或大都市の交響樂」と題する一葉を載せてゐる。此一葉から全般を推すことは、映畫が動くものであるだけ、至難のやうに思はれるが、これによつて察し得るスル・レアリズムはダダイズムの一ヴアリアスイオンであるらしい。映畫の正道がかうしたヴリアスイオンに在るとは思へないが、あらゆる方面に新、或ひは珍を表現しないではやまない巴里人が、映畫に於いてもかかる表現を選ぶに至つたのは、不思議のない氣がする。それに又誰しも何か新しいもの珍しいものを求めてゐるのは事實だらう。それがどんな幻滅物であるにしても。



ブリユーを持ち出した序でに、彼の「嬰兒(アンファン)」といふ戯曲を紹介しておく。まだ飜譯も出てゐないやうだから。「嬰兒」は一九二三年の作、たしかフエミナ座で上演せられ、かなりな成功をさめたのみならず、識者、就中知識階級の婦人間でかなり問題になつたもの



である。簡單に筋をいへば、此處に廿歳をよほど過ぎた獨身の處女ピエレットといふのがゐる。彼女は或男と通じて姙娠する。彼女は子を得たかつたばかりにその男と關係したので、子が出來ただけで滿足なのださうだつた。ところが相手の男も彼女と彼等の子供とに對して責任を感じない譯にはいかない。それに彼女の兩親は、孫の未來の爲に何でも正當な結婚をせよといふ。だがピエレットは頑として聽き入れない。此子は、私の子私一人の子として育てたいのだといふ。そこで大論議となり結局は我子が私生兒である事の慘めさを想うて、結婚を諾ふことになる。

私生兒に對する社會的壓迫のさして激しくない日本では、この戲曲の暗示するところがはつきりとは理解せられないかも知れない。が歐米諸國では婦參の次には私生兒を明るみに出さうとする運動が行はれてゐる位だから、以て私生兒達が如何に陰慘な道を歩まねばならないかといふことも察するに難くないであらう。勞農露西亞では籍の問題などどうなつてゐるのだか。コロンタイの作物などを通して見ると、さうした問題は超越、或ひは無視してゐるとしか考へられない「戀愛の道」の女主人公にしても「三代の戀」の三代目の少女にしても、母たりたい欲求は非常に强いやうだし、生れた子供を自分一人の子として育てたい氣持もピエレットに負けないほど持つてゐるやうである。ただ三代目の少女は目下の多忙の爲墮胎を選び、「戀愛の道の女主人公は生れる子を托すべき育兒院の建設を心がけ、ピエレットは子供の將來の爲妥協の一路に陷ちるより外なかつたまでである。だがコロンタイの描く男共はどうして皆ああまで薄情な動物ばかりなのだらう。男にも父たりたい欲求のあるのが當然ではないか。女にしても、コロンタイの描く女は、――だが今の露西亞に人間性の機微に觸れた藝術品を求めるのは無理かも知れない。我我自身旣成社會の拘束の中に在るせいかいろいろの約束の爲に自意を飜すピエレットの心情の方が我我には近いやうな氣がする。

あまり堅苦しいことばかり書き過ぎたやうな氣もするから、少し碎けた挿話を添へて此稿を閉さ

う。サラベルナールは、晩年にはカトリツクに回心したが猶太女だつたからとアンティ猶太の佛蘭西人はいふ。が回心した晩年の彼女も、決して慘めでないことはなかつた。彼女は大切な兩脚を切斷しなければならなかつたのみならず、脚がないのに舞臺に上らなければならなかつた點、わが田之助を想はせる彼女は偉かつただけ又意地惡でもあつた。彼女の意地惡の爲首を縊つた女優もあつたくらゐだつた。その祟りだらう、或晩脚のない彼女は一人閉幕後の舞臺に置き殘された。彼女は橫柄な調子で人を呼んだ。がやがて樂屋にまで響く高聲で、聞くに堪へないやうな罵詈や呪詛の言葉を發し始めた。そこへ、名は忘れたが或若い美貌の詩人が通りかかつた。すると彼女は得意の一芝居を演じて曰「私は何か恐ろしい夢を見てゐたやうですが。――」

次號豫告

多方面戀愛座談會

盛夏炎熱の時人ははじめて大自然の大情熱に心打たれるであらう。海ももえ、山ももえる。人間もまた心中旺なるものあればその燃え立つにまかしめよ。人の氣さかんなれば天に勝つといふ言葉がある。われら『女人藝術』第三號の大充實を企圖するところから、こゝに白熱の戀愛、悲痛なる戀愛、戯れの戀、戀愛のマソヒズム、サデズム其他、

各種各態の戀愛相を女人獨特の心境、批判力をもつて縱橫に座談せんとす。室內の溫度いかばかりか高昇する？ いたづらに凉を山水に追はず、熱をもつて熱を征するの銷夏法也。女人の氣焰さかんにして幸にして天に勝ち『女人藝術』盛大をなさばまさに痛快この事である。以上次號好個の讀物としての豫告、興味ふかく待つていたゞきたい。

文藝筐鑑（二）

生田花世

一『（朝の呼吸）といふ書をよむ。私の朝の讀書の時をあてゝ心靜かにひもといてゆく。朝の心は淸爽である。朝つとめて夙く起き机にむかふ時の頭腦淨玻璃の感はいかばかり私にとつて幸福であらう。あゝ私にも快いこの朝の呼吸よ。』『草の露いまだ乾かざる涼しさなり朝かげひきて蜻蛉飛び交ふ。……朝露の乾く眞晝となりにけり蕾はひらく桔梗の花……淺間おろし吹きめぐりつゝ松原に我がさしくれば松風を聽く……山のかげ眞下に落ちて川づらの底むらさきに眞晝を昏む……からまつの林は深し經る年の同じ太さの幹立ち揃ふ……こゝに來て我が伏しゝあとを殘したゞ敷きたる草は起きかへらざる』

『あの輕井澤の千ケ瀧にてよめるかず〳〵の杉浦翠子氏の歌は、私の愛誦しておかないものである。氏の新刊（朝の呼吸）はやはり何といつてもこれらの歌によつて價値づけられてゐる。』

『杉浦さんはたゞ歌にのみ打込んでいらつしやるといゝのね。例のあのイラ〳〵した悲憤辯明の辭は寧ろこの人の爲に惜しみますわ』

『時がくるとおやめになるでせう。ものいはざれば腹ふくるゝで、云つて云つて、云ひきつて、この人が默つて了つたらこの人の完成が來るでせう。しかし、こんな風に對世間的の苦痛の中で、たゝかへるだけたゝかひ、忍ぶだけ忍び、苦しむだけ苦しむといふことは、この人の人間味が出てゐてたしかに面白い。古來、才媛にはカンシヤクもちが多いとかきいてゐますがいゝではありませんか、かういふ地金まるだしのところは。杉浦女史親しむべしです。敵もあるが味方もあるといひたいところ。九條武子夫人に對する、又、現代女歌人に對する、アラヽギ社に對する忌憚なき言葉など　この人にしてはじめて言ひ切れるものだらうとかうおもひます。』

『歌論、歌評、なか〳〵ケイレツです。とにかく、杉浦さんの『人』は古風な圓滿溫雅さではありません、なか〳〵個性的です、カツカカツカと鳴りひゞく音です。こちらの氣持もからりとしてあの尖くなりさうな八月の朝のひとときのやうにさつぱり、さつぱりです。』

『近來の燃燒的な書として私は、友人にすゝめたいとおもふ。』

（朝の呼吸）定價一圓六十錢——福永書店

『いつの月でもおくつてくれる女流短歌雜誌（ござやう）を讀む。ハンでおしたやうな編輯だし、これぞといつて人の目をひくやうなこともしてないのだし、たいくつしさうなものだが、（ござやう）同人の方もたいくつしないし、私もたいくつしない、毎月ひとわたりよむ。』

『みまかりしいとし兒への哀歌、庭の栗の花の歌、ややおよすげし幼兒を見るの歌（中河幹子氏八首）曲藝團スケッチの歌、上野公園の夜の歌其他（水谷靜子氏九首）池の歌、水すましの歌、草丘の歌、（清水千代氏五首）墓地の歌、梅雨空の歌（清水乙女氏七首）といふ風に

並んでゐる。他に（焦色雑感）——清水千代氏（初夏作　讀後）——中河幹子氏（ニューヨークを立つ日）瀬尾すみゑ氏といふ風なものものつてゐる。

『この（ごぎやう）といひ、前號紹介の（窓）といひ、次號に紹介したいとおもふ（草の實）といひいづれも片々たる小册子ではあるが中にはとても氣持のよい女性の純情がこもつてゐる。書架上いまだ一册といへども私のソマツにしないのはその純情が貴ばれるからである

（ごぎやう）——三十二錢市外世田ヶ谷町下北澤九二五　御形詩社

『佐佐木さん、あなたが戀愛をとりあつかつたらどんなものが出來るかしら。』

　私がそんなに言ひ〱してその人の戀愛をとりあつかつたものが出たら讀まうと約束してゐたその知人佐佐木千之氏の（戀愛行）が出た。

『佐佐木さんは戀に燃える心持、どんなバカなことでもする心持、辻棲のあはない人間になつて了ふ戀、それが分つたり描けたりするには少し性格が澄みすぎてゐるやうにおもへるのよ。戀を戀する人であつて、戀に亂れる人ではないかもしれない。そんな風にいつか私はおもつたことであつたが　この一卷の（戀愛行）一生懸命に描いてゐるが何しろまだうらわかき戀心、出てゐる男性も女性も戀愛ににはいまだはなはだ遠いといはなくてはならない。しかしそれだけいやなものではない。』

『（戀愛行）の面白味は二人の乙女に對してのあこがれ、はしなくも見た夢、父と子との接觸、戀と野心のいとなみ、さうしたところの若いひとのすぢな心の姿にあるやうだ。青年處女の心によびおこす共鳴はこの青春の焦燥、世に出でんとする情熱……。』

『絶望の只中に投げ出された私は貴方に對して、不足を言つたり又不足を感じたりする力さへもなくなりました。たゞ貴方のお心にかなはなかつた自分がいかになさけないかを骨身にこたへるほど感じさせられました（作中の女性の手紙）』

『愛して愛されざるうらみ、愛されて愛しえぬ痛み』

『私位の年頃のものは、この（戀愛行）によつて、弟とか、自分の子供（男女の）の世界をのぞくやうな氣がする。さういふ意味で深い興味もわく。』

　この作家の將來について心配するもの、ひとりこの作中の秋月夫人のみではないとおもふ。北國一「苦惱の街」「戀愛行」の三卷千何百枚の完成稿を祝するとともになほその未來の精進を囑さゞるを得ない感がわく。

（戀愛行）一圓八十八錢——新潮社

『（コスモポリタンは語る）——翁久允といふ方の書が女人藝術社に來てゐるのを私は紹介したいとおもつて、それに二三日をあてた。アメリカと日本とこの兩國の生活、精神の間に立つて、强くも惱ましめられた民族鬪爭の問題、平和の問題、兩國人情の機微が　極めて平明にものがたられてゐる。』

『あの早く衰滅してくれゝばよいと思つた日本のあらゆる舊習舊俗に對する反逆心が、今投り出された新しい生活の上に恰も思ひもよらぬ花園に飛び込んだ胡蝶の歡喜そのものであつたのである。日本人を卑しむ心、　む心、それらの若々しい、今から考へると、矢張り若かつたなあと思はれる心が、春の淡雪の下から萌え出づる若草のやうにもえ立つたのであつた。「ところがどうだつたらう私は無精に淋しくなつたのだ」』

『日本人といふ民族名を脫したいしかし脫し切るみちのないのが痛いほど感じられるにがい心は、批評心となる。愛するがための激語育てたいがための鞭、この著者の心は、この書の隨處にさういふ風に閃いてゐる。（鵜の國禮讃）など

きういふ風な批評的日本生活感がのべられてゐるので、面白かつた。旅行者が、旅行案内をよむごとく、私たちはかゝる傾向の書をたえず讀み破つてゆきたいものとおもふ。

（コスモポタリンは語る）一圓九十錢――聚英閣

秋田雨雀氏の歸朝歡迎會。

會の通知のハガキが私の管鑑の中にある。六月二十一日の夜の會だつた。それに私は出席したからその日のことを一寸書いておく。

女性がもつと明るく、もつとくつろいでからういふ會場でゐられたらとおもつた。私は一人ポツンと入口の卓にゐられた弘津千代氏（戯曲『吉田御殿』の作者）が何かから困つた風な心持でゐられることが分りすぎる位だつた。受付の人に紹介をたのんで、話しかけた。二人になつて互に救はれた心持。しづかに扇子をつかつた。

『中條さんも湯淺さんも今熱心に勉强されてゐますね。中條さんのロシア語の方の進歩はグン／＼目立つてゐたですよ。今はぢつと考へてゐたいかもしれません。書くといふよりも。『女人藝術』に原稿をおくらねばならないがとはいつてましたよ』

『何しろ中條さんは强い樫の木のやうに强い性格の人ですから、その點で、いゝところもあり、もつと深くロシアの人々の生活の中に入つてゆくにはさまたげが、その性格からしてあるかもしれませんね。しかし何しろ强い女性だから、何かきつとしつかりつかまなくちやならないと考へてゐるでせう。』

以上、私のきいたお話。隣席に坐つたので。

『ソビエート、ロシアの文藝は一寸日本の文壇なんかとはたちのちがつたものですから：：』

そのすつかり違ふロシアの文藝について、熱心に報告的に説明される。來會者みな緊張してきく。それは何れももう雜誌に發表されたらしい。

『ロシアでは戀愛が非常に自由になつてゐます。そしてその整理方策としては各勞働工場への性についてのパンフレットの頒布、××××××の××××××その外にに離婚の自由もあつて、實にうまくいつてゐます。從つて、賣笑婦は少いやうです』

『劇場などは勞働者が七分どほりまで、早く、やすく切符が買へていゝ席をしめるのです。金があるものといへども金だけでは入られないといふ風になつてゐて、他とはちがつて金の少いものでも權利のあるものはいゝといふ風に實にめぐまれてゐます』

「私生兒は、みんなあつめて、ソビエートロシアの國家の費用で、よく敎育されてゐるのです。』

『（ロシアは肥る）と前田河氏が書かれたがあちらでそれをモスコーで讀んでヘンな氣がしたです。ロシアは在來瘦せてゐた勞働者があヤは奉仕的に二倍も三倍も働いてゐる狀態にあるので、ロシアは瘦せるといふ風な感があつたからです。』

『とにかく、現在のロシアは、外面は固く内面に靜かに整つて往く柔かくまとまりつゝあるといふ風です。等、々。』

秋田雨雀氏の歸朝談話は氏が藝術家としての見聞といふ點に一般の期待がこもつてゐただけこの夜の出席者の耳は一齊に傾いてゐた。氏の眞實な聲に。

其後ソビエートロシアの實情については武小路實篤氏が書かれたものについて、村の會場へ出かけていつて、秋田雨雀氏の談話もあつたときく。どの點まで兩氏の對談が兩氏の滿足しあへるものであつたかはしらないけれども所詮はその人々の心眼の問題でしかなからうから、やはりソビエートロシアは深い謎として我々に映ずるわけである。

『女人藝術』創刊のつどひ

――レインボーにて――

『女人藝術』創刊號の市場に現れるのと前後して、創刊號執筆者を中心にして各方面の文筆女人の方方を大々的にお招きして、心からの挨拶もし、心からの意見もききたいといふことは考へずにはゐられないことであつた。若い編輯部の方々が、お知らせのはがきを多數せつせと書いた。各方面の方々にあてて。

六月三十日、いよいよその會の日になつて御返信を見ると、缺席といふよりも出席といふ御返信の方に珍しい方が多かつたのでみな喜ぶ。早く會場に出かけて、お待ち受けしようと、堀江かど江、生田花世、城しづかの三氏は會場へ、長谷川時雨、素川絹子、二氏は、雜誌についての他の實際的方面への外出、社員一同が、力を出し切つて働く。

午後二時頃、レインボーには、もう二三十人もお顏がそろつてゐた。しかし二三人、又二人、又二三人といふ風に、ひきつゞいて集つて來て下さる。洋裝、和服、支那服、とりどりの女性がやがて一堂に一杯になつた。五十人を突破してゐることはたしかだつた。

あちらでもこちらでも親しい話聲、それは自由で、いかにもくつろいだ會の氣分で生き生きしてゐるものだつた。窮屈、因循、そんなものをちつとも持つてゐない女性達のつどひのいかに快活なことよ。社交婦人のあつまりといふ風に形式的でなく、又、女學校の同窓會といふ風に狹い範圍のものでなく、一人一人の女性に打てばひびくもののある、完成されてゐるもののある、人格的なよろこびのあるさうしたもののこの一夕を親和する有様のそのたのしさよ。それは勿論一人一人一つの世界をしつかりと把持される點の妥協はどの方もお持ちになりさうもない。分れ切つてゐる。しかし分れてゐべき點は分れてゐて、大局的に調和される點は調和されてると見るべき會の有様であつたとおもふ。

大村嘉代子、木村富子、弘津千代、長谷川時雨各氏が戯曲家として……。長谷川かな女氏が俳人として……。英美子、林芙美子氏其他の人が詩人として……。今井邦子氏其他の諸氏が歌人として……。金子しげり、坂本眞琴、新妻伊都子諸氏が婦人運動の方の人として……。竹中繁子、城山登美氏其他の方が婦人記者の方面として……。太田菊子氏其他の方が婦人雜誌方面の人として……。津輕夫人、倚夫人が知名婦人として……。ささきふさ、北川千代氏眞杉靜枝氏野溝七生氏其他の方々が作家として……。神近市子氏、堺眞柄氏、望月百合子氏、平林たい子氏其他の諸氏が新興言論界の人として……。

其他音樂界、美術界、飜譯界の人、かぞへてゆけば、各種各方面の人々が、みなお顏をそろへて下すつてるわけだつた。こんなに各方面のしつかりした女性が多く集つて談話する會は、これまでなかつたやうですねと太田菊子氏がおつしやつてゐたやうだつた。

各社よりの寫眞班の撮影がすんでから別室のテエブルにつく。白いテーブルクロース……、夏の花……、食器……それを中央にしての一列七十何人といふ女人のみの齋席はけだし壯觀といつてさしつかへないものだつた。

長谷川氏の挨拶、生田氏の挨拶、それがすんでから、神近氏、今井氏、金子氏、平林氏、伊福部氏といふ順にテエブルスピーチがつゞく。とても愉快だつたのは、自己



紹介であつた。

七時散會、上々の首尾でお招きしたものの感情も、意志も打出すことが出來、お出でいたゞいた方の氣分も、御註文もきかせていたゞけたのは幸であつた。女性文筆の『公器』にといふ編輯部の方針は、かくも多方面の方々の出席によつて、十分理解していたゞけたことが、事實によつて證明されたので、みなの面に喜色が漂ふ。『さあいよいよこれからだ。あらゆる方面からいい作品を獲て、いい女人の雜誌を作り上げるのは』からいふ風な感激と昂奮とは、この三十日の會によつて申分なく胸に來た。テエブルスピーチで、太田菊子氏に、口も八丁手も八丁と愉快なことをいつていたゞいたが、『女人藝術』のために努力する私たちの心もまつたくその必要を感じた次第である。なほその上にどこで、だれがいい作品を書いてゐるか、それを感能する第六感さへも吾々は必要とする。いい作品、いい作品、その外に何があらう。私たちのほしいのはたゞそればかりだ。いい騎手も駿馬を要する。そこで私たちの『女人藝術』がいい女人騎手のために駿馬たらんことをとおもふ。

なほ創刊早々不馴れや手ちがひや通信上のあやまりにて、御招待出來なかつた方やハガキのとゞかなかつた方や、あとで、しまつた！とおもつた惜しい人やが、會後無數に出て來たので、ざんねんがつてゐる。しかし又、それは、次の會にとおもつてゐる。今後とも『女人藝術』が中心になつてかなりいい仕事、いい會が出來さうにおもつてゐる次第である。何分とも、御聲援を乞ふ。（無名指子）

音樂・舞踊・映畫の會

幸にして、その夜は晴夜だつた。その夜われらが女人藝術創刊記念として、女人のみ出演の「音樂・舞踊・映畫の會」を催したのである。時は七月七日、所は明治神宮外苑の日本青年館。集ひ來し人々は、若きはいふをまたず、お孫さん連れの老婦人もあり定刻には既に一階二階は空席を見ないといふ素晴らしさ。舞臺には文藝春秋社から贈られた花環が二つ——尾上菊子孃へと本誌へと——薔薇やジンジヤの香を場内にまき散らすかとうれしい。

ベルが鳴る。幕が開く。いつもながら、お元氣な三宅やす子女史が、最初の御挨拶をされるべく登場。「女人藝術」發刊と、女性のみでまとまつた仕事をしてゆく事の如何に困難であるかといふ事など二十分許りお話になる。

次は馬場孤蝶氏令孃晴子さまの



メゾソプラノ。シューベルトの「野薔薇」外二曲を、まこと野薔薇の花の香の如く、床しく、匂やかに歌はれた。つゞいて、佐藤美子孃が拍手に迎へられて、お得意のカルメンの一節「ハバネラ」の歌。あの草の葉のやうななよやかな君のどこからあふれるかと思はれる强い情熱のソプラノ。邦語の「搖籃の唄」「燕」もなつかしかつた。アンコール、又アンコール。(だが眞實をいふと人々はこの君のお聲よりも、お姿により以上の魅力を感じるのぢやないかな。失禮…)

情熱の詩人深尾須磨子氏が、フランスみやげのフリユート吹奏にみな好奇の耳と眼をそばだてる。その樂器の銀のしぶい光と、踊り出る東洋的な音色との微妙な交錯――げにフリユートとは、その名も床しきものなるかな。伴奏は若きピアニスト吉川節子女史。

「あゝ、マリアさま！マリアさま！」ゲエテのファウスト中の可憐なマーガレットは祈る。築地小劇場の山本安英孃の脚本朗讀である。あの落ちついた小劇場のある夜、ある時の場面が築地黨の人々には、はつきりと浮んだであらう。

プログラムは進んで、故九條武子夫人作歌、荻原濱子女史作曲の箏曲「砧」。高島田床しき高橋もと子孃が、十三絃の前に斜めにきちんとお坐りになつた、あの、﨟たけたおふり袖姿を迎へた人々――

「やつぱり日本の風俗はお上品でございますね。まあ御覽遊ばせ。あのおぐしのお見事なこと。」

「僕はやつぱり日本髮黨だな。どうだい。實に美しいぢやないか」

「さうだね。だが、箏つてやつは一寸御免かうむりたいな」

私も亦、御免かうむりたい組だつたのだが、初めてきくこの朱絃會の箏だけは、全然趣きを異にしてゐた。月冴ゆる夜、砧うちつゝ遠く離れる夫を思ふ哀切な調べがきく人の胸をひしとうつ。うれしかつたのは、歌詞が非常に明瞭にきゝとれた事である。

「向ふ通るは淸十郎ぢやないか：：」あはれ、情熱の女、お夏！お夏！菅の小笠とつて踊り狂ふお夏の、亂れる黒髮、ゆれる袂……。

「笠がよう似た、すげ笠が……」

黒い背景の前に、白蛇のやうになよやかに踊る菊子さん。凄艶といふより可憐な菊子さん。踊る。踊る。狂ほしく……。ふと氣づくと、純白の洋裝した一人のお孃さんの眼に、何の故か涙が一しづく――。最後の映畫はロイズ・ウエベー女史原作脚色監督の「彗星雲を衝いて」長谷川春子孃の說明ぶりは、まさに本職と讚へておく。かくて十時三十分頃、盛會裡に催しは終つた。(眉女)

× × × × × ×

小サロン

◇

新らしき村の芝居に、武者さん「だるま」に扮して机の上にありどうしたはずみかすつてんころりそこでその起やがりこぼしつぶやいて曰く「机の上はおちるもんだわい」作㭭生、喝破。いつそ河岸をかへて緣起棚へは？ めんどうだ、も一度轉がつて鉢卷きをする。

◇

谷と對談中の三宅やす子女史、「ちよいと來い」とひつぱられる。といつて女史が赤化した譯ではない。引つぱつたのは女史の坊ちやんで、お母さんを自分の方へつれてゆくと、コマの臺になつてくれとねだつた。そもそもコマの曲は衣紋通し、扇がへし、眞剣白刃どめ（その他委しくは白井喬二氏著「新撰組」で御覧下さい）種々さまざまであるが、坊ちやんのコマは毛の薄いお母さんのおつむの眞中で美事に廻りはじめた。コマの臺のお母さんは凝と頭を据て坊ちやんをよろこばせてゐる。それを見たお客、涙と笑ひが一しよこたにこみあげて來て、女史の頭のお皿のまん中を撫てあげながら、しみじみ女史のかくされた面目に觸れて、心のよさに感動した。

◇

自動車にのつて不快なことがあつたかなどと問ひ合せする雜誌もある此頃、これはまたトビキリ愉快な話一つ。小寺菊子女史のおまねきで生田花世女史、今井邦子女史を誘ふ。二女史をのせたる自動車は小寺菊子女史居住の大久保百人町にむかつて疾走す。まづ新宿に出で、四谷見附に向ひ、濠端を迂曲して江戸川大曲方面に突進す。車上の二女史、いい氣持で話してゐたが、あたかも鐵砲玉のごとくあらぬ方にはしりゆく形勢に色を失ふ。とりわけ案内役の生田女史ハラタテテ『そちへ行つてはダメよ。おろして頂戴』運轉手曰く『道がいいのです。ぢつと乘つてて下さい。』走り走つて、戸山が原に迷ひこむ。『アラ、こゝはどこ、こんなヘンテコな自動車に乘つたことないわ』と今井女史面白がつたり、不安がつたり。代々木より大久保までの數十丁、時間を費すこと一時間餘。彼れ運轉手大久保百人町を知らず。たゞよき道を走れるのみ。生田女史曰く『タチのわるい運轉手には見えないのにね、あの顏付では……』今井女史曰く『いい顏だわ、にくめないわ』かくして好運轉手大に恋うけたりといふ。

◇

コロンタイの『赤い戀』が問題にされてゐる現段階に於て（皆さま現段階ですよ）これは又とつくの昔、コロンタイ女史にもまさる新らしい戀愛觀を叫んだ女流作家があります。『オールド・ミスの貞操觀は、すべての男性に對して貞操を守ることである。』と。すべての男性に對して貞操を守ること、卽ちすべての男性に對して貞操を與へることである眞理を吐かれたもの卽ちわが吉屋信子女史であります。たゞ誤解してはいけません。これは吉屋女史の聲のすべらし方が悪かつたので女史のスキーのすべらし方は上手ださうであります

◇

英雄に閑日月がありとすれば傑女にも餘裕綽々たるところがなければなりません。ある日、編輯室の樓上でA子さん、B子さんの二人が角力をはじめました。勝負は互角の勢で、さてどつちに采配が上るだらうと見てゐると、A子さんの方が負け腰になつてきた。『A子さん、腰の重心を左の方に……』と應援をしてみましたが、B子さんの構へが鋼鐵のやうで、動かばこそ、ぢりぢりとひた押しに押してあつといふ間にA子さんを押し潰してしまひました。折も折、そこへ長谷川さんがかへつて來られて、このやうすに聊かあつけに取られてゐたやうであつたがニコニコしながら朗かなこゑで、『そりやあB子さんの方が勝つにきまつてますわ、B子さんは旦那樣があるんですもの、お角力の手はすつかりきたへ上つてゐますわ……』だが、讀者の皆さま、これは褌を締めてしこを踏む角力ではありません。ペンを片手の腕角力なのです。

文壇商賣見立

順序不同

武者小路實篤　牧師
田山花袋　町内の顔役
島崎藤村　田舎教師
泉鏡花　箱屋
永井荷風　眼鏡屋
菊地寛　香具師の親分
久米正雄　女學校長
久保田万太郎　小間物屋
加能作次郎　村の藪醫者
長田幹彦　看護婦會々長
望月百合子　アマサン
生田花世　産婆
柳原白蓮　尼僧
片岡鐵兵　ヴヰオリン彈き
藤澤清造　富山の藥賣
高橋新吉　牛太郎
小堀甚二　大工
佐々木孝丸　馬の足
新居格　養豚業
若杉鳥子　邦文タイピスト
岡下一郎　ども又役者
金子洋文　バック描き
吉田絃二郎　旅行く法師
高群逸枝　動物園女看守
德田秋聲　トッカピン製造業
水上瀧太郎　角力年寄
近松秋江　金貸しの隱居
西條八十　女優周旋業
山本有三　顔の長い女形

小寺菊子　蒲團屋
葛西善藏　禪坊主
前田河廣一郎　土方の親分
里村欣三　支那料理出前持
翁久允　汽船事務長
村山知義　ヶ車ボーイ
神近市子　救生軍の女士官
青野季吉　サンドウイッチマン
藤森淳三　縁日のタタキ賣
本莊可宗　古本屋
秋田雨雀　十八世紀の畫家
壺井繁治　どぜうや
宮地嘉六　仕立屋
中村吉藏　郵便局長
千家元麿　神主
中村武羅夫　柔道教師
木蘇穀　坊主
さゝきふさ　デパートの賣子
谷崎潤一郎　チャブ屋の主人
川端康成　萬年大學生
深尾須磨子　笛吹き
岡本かの子　やせる藥屋
今井邦子　かつら製造業
平林たい子　田舎出の女中
白石清子　看護婦
中野正人　ネクタイ屋
佐々木俊郎　代書屋
今東光　甘納豆製造業
中里介山　古着屋

白井喬二　恩給貸買業
佐藤春夫　夜店のステッキ賣
森本巖夫　靴磨き
廣津和郎　自動車運轉手
伊福部敬子　素人下宿業
三上於菟吉　株屋
萩原恭次郎　運動選手
山田清三郎　新聞配達
黑島傳治　印版刻り
林芙美子　おでん屋
千葉龜雄　村長
飯田豐二　呉服屋の番頭
岡田八千代　ちんこ役者の座頭
長谷川時雨　踊の師匠
宮嶋資夫　魚屋
川崎長太郎　蒲鉾屋
井東憲　刑事
伊藤恣　圓本外交員
吉屋信子　電話交換手
堀江かど江　保險集金員
中條百合子　女外交官
生田春月　道化師
林房雄　結婚媒介所長
網野菊　オフィスの受付係
田村俊子　女琵琶師
藏原惟人　夜學の先生
新井紀一　自由勞働者
鷹野つぎ　家政婦
野上彌生　秘書役

城しづか　女學生家庭教師
佐々木茂索　婦人科ドクトル
杉浦みどり　女學校の舍監
安成二郎　銀行員
加藤一夫　交通巡査
加藤武雄　お百姓
里見弴　待合の帳場
宇野浩二　質屋の手代
近藤經一　カメラマン
眞杉靜枝　美爪術師
室生犀生　タイトル書き
內藤辰雄　コウモリ傘直し
吉井勇　半衿屋
志賀直哉　驛長
尾崎士郎　洗濯屋の御用聞
犬養健　園藝家
宇野千代　カフェの女主人
三宅やす子　女將
北川千代　養兎業
中河幹子　手藝品賣買
岡田三郎　フランス仕込床屋
直木三十五　お岩稲荷宮司
瀧井孝作　旅館
中河與一　藥劑師
中田信子　印刷屋の女工
澤ゆき子　酒屋
米澤順子　小兒科醫
與謝野晶子　テニスの先生
菅忠雄　俱樂部支配人

古　鏡（若杉鳥子）

長谷川春子



古鏡

若杉鳥子

暗い野路を歩いて來た者の眼に、S遊廓の灯は燦爛と二列に輝いてゐた。けれども、少し光りに馴れた者の眼には、莫迦に燈火の乏しい、喪に服してるやうな街だつた。處々に深い闇が溜つてゐた。

格子の中では赤い裾が金魚のやうに泳ぎ、ざわめき、黴と酒とアンモニアの醱酵したやうな臭ひがしみじみと浮動してゐる。そこに男の群像が、野犬のやうに喚めき、うろつき或はさゝやき、影繪のやうに交錯する。

その暗い街を、私は腦裡に呼び覺ましながら、一人の女の肉體を描いてゐた――そしてふと氣がついて見ると、お房さんはもうずつとその先へ話を進めてゐた。

「ねえ、女つてえものは、なんぼうつまらないものだか……」

お房さんは時々さういつて溜息を吐いた。お房さんは、昔ともゑやのお女郎だつた。それまでも方々の宿場を渡つて來てゐた。

だが私の知つたのは、隣村の村長の後妻になつてからである。

お房さんはいつも赤い顔をして襷がけで先妻の遺していつた大勢の子供達を對手に、まめまめしく働いてゐた。

その家は川に臨んでゐて、昔から廻船問屋と農業を兼ねてゐたが、交通機關の發達した今では、殆んど店に積荷など見る事がなくなつた。

奥深いがらんとした家の前に、いつも長閑に鶏が餌を拾つてゐた。
「小母さん、花をおくれ。」私はよくそんな事をいつて庭先きから入つて行つた。
「酸漿をとるときかんぞ。」そんな風に私は毎日遊びに行つた。從つて私の親達もお房さんと親しくなつた。しかしそれから長い年月が經つた。お房さんの事など思ひ出して見るやうな機會さへなくなつてゐた。

夏ももう、衰へて、秋らしい白い風の吹く日だつた。一人の老女が私の家の格子先きに立つて、家の中を窺いてゐた。白地の單衣に黑い帶を締めてゐる、物乞ひでもない樣子だつた。老女は眼を患つてゐると見えて、何か小さい紙片を、眼にくつつくやうに近づけて、格子の上の標札と見較べながら、
「百十四番地はこの邊でございませうか。」
獨り言のやうにいつてゐた。
「えゝ、百十四番地なら此處ですよ。」
私は赤ん坊に乳房を含ませたまゝさう答へた。
「片山さんてのは――」
「片山はうちですけれど……」
私は赤ん坊を抱いたまゝ立ち上つた。格子の鍵を外さうとして、その時私はふと、老女の顏を見たのだつた。
「まあ、小母さん――」
重苦しい記憶の塊りそのもののやうに、私はお房さんの顏を發見した。お房さんは重荷をおろしたといふ風に、私の前へぺちやんこと坐つて、疊へ默つて眼をおとしてゐた。この二三年間私の居所を探し歩いてゐたといふのだつた。
「あゝ何からお話をしたらいゝのやら……」

困憊し切つたといふ風にお房さんは頸を垂れた。それが決して誇張には見えない位、昔その人の持つてゐた色々のもの、意地とか誇りとか意氣とかいふやうなものを沮喪させてしまつてゐた。

「今となつて見ますと、立派な事だと思つて私のして來たことは、みんな餘計な骨折だつたといふ氣がします。」

お房さんの兩親は、まだ小娘のお房さんの手に、幼い妹を一人遺して死んでしまつた。お房さんが軀を賣つたのも、その妹の爲だつたし、それから借金を負つて轉々したのも、その妹の養育料の爲だつた。にも拘らず今となつては、寄邊のない自分に、妹の一家は、堪え切れない侮辱と虐待とをするのだと、お房さんは袖口を眼頭に時々あてゝ、くどくどと訴へた。

「そして今、小母さんは何處に身を置いてゐるんですの。」

「やつぱしその妹の家に……ほんとに時には死んだ方がましだと思ふんですよ。」

「ぢやあ何故、田舍の方へ小母さんは歸らないんですの、田舍では、譬へ肉身でなくても小母さんの育てた娘さんや息子さん達が、立派になつてゐるんでせう。」

「それがあなた……田舍にゐられる位なら、何で邪慳で貧乏の妹になんか手頼らうと思ひますものか。」

私は眼の前に白帆のゆるやかに流れてるT河を泛べてゐた。その河岸の堤防の際に並んでる、白壁の倉を思ひ出してゐた。それは曾てお房さんが、村長の後妻として棲んでゐた家だつた。それからまたその邊には珍らしく艶めかしい女房だつたお房さんの、女盛りの姿を描いてゐた。

「商賣の女は……と何かにつけていはれるのは辛いから、私はどんなに働きましたことか、朝は星のある中に起き、子育てから田の草取りまでしましたに、誰に一體感謝されたんでせうか、その頃はまだ末の男の子が三つ、その上が五つに七つといふ風です。長男は十四になつてゐましたが、それが今では嫁を貰つて、嫁と二人で私をまるで生みの母の讐だといふやうな仕打ちをします。それがまだ、良人（やど）のゐる中は兎に角、亡くなつてからといふもの一層露骨になつてきたのです。三つの時から育て上げた彼奴（あいつ）までがさうなんです。この眼の悪いのもみんな先妻の罰だといふんです。」

女の子も　の子も悉く反逆者だといふ事を知つた時は、軀一つの他に何もなかつた。その軀だつて、眼は惡し、脚も不自由になつてゐた

――とお房さんは話しても話しても盡きさうもない事を話しつゞけた。
その中に日が暮れた。その晩もお房さんは話しつゞけた。とうと泊つてしまつた。

ねんねんねやまの小兎は
なあぜにお耳がなあがいのう
椎の實椎の實たべたからあ
そおれでお耳がなあがいのう

お房さんは赤ん坊を抱いて家の中を搖すぶり歩いた。しかし何處か調子が異ふと見えて、赤ん坊は反り返つて泣き喚めいてお房さんを反撥した。毎日、朝の用事が片附くと、お房さんは私の前へ來て坐つて、懷舊談を始めた。娼妓時代から否その以前から、まるで他人の事のやうに雄辯に喋べる。喋べつてゐる人は樂しさうだが、雜用を控へてる私は、それを聽かされる事が、日一日と苦になつてゆく許りだつた。終ひにはお房さんの追憶の泥水が、私の新しい日々を氾濫させてしまひさうにさへ思つた。
過去に生きる人だ、せめてそれを聽いてやろう――さう思つて辛抱してゐた私は、何時の間にか彼女のエゴを惡み出してゐた。
しかしまだ私は何にも氣がつかずにゐた。
お房さんは働く時も喋つてゐる時も、白い襷をかけてゐた。夜もそれをとらずに、蚊帳も釣らず部屋の隅に、ごろりと横になつてゐた。
夜も餘り睡れなかつた。
夜半に赤ん坊が泣きでもすると、彼女はその物々しい姿で、私の蚊帳の中へ飛び込んで來た。
「何でもないんですのよ、どうか小母さんそんな風をしないで、あたりまへに床をとつて寢て下さいね。」
毎晩さういつても決して彼女は、きかなかつた。火事場のやうに慌たゞしい氣分が、晝も夜も私を驅り立てゝゐた。
彼女を見てゐると、始終自分の傍で火が燃えてるやうな氣がした。看てゐないと、飛んでもない處に燃えつきさうだ、私も全く弱り切つ

古　鏡（若杉鳥子）

てしまつた。
「小母さん、あなたはもう妹さんの處へお歸りになるつもりはないんですか。」
私は散々考へた末、とうとう切り出した。
「家でも廣ければ、小母さんに何時までもゐて戴きたいんですけど、この通りの生活でせう……」
お房さんは默つてこくりこくりと頷いた。空虚な顔つきをしてゐた。
縋つてくる者を突き放したやうに、私は寂しかつたが、どうともしやうがなかつた。
「妹の處へ歸るのは、しみじみ私は厭なんです、それよか一層、派出婦會にでも入つて働いて見ようかと思ふんです。」
新聞の廣告欄を見てゐた彼女は急にこんな事をいひ出した。
「でも、それはあなたに骨が折れ過ぎはしないでせうか。」
一人の女の生涯が、玄翁か何かで粉碎されたやうに私は感じた。しかし他によい方法があるではなし、極力それを止めさせるだけの強い事もいへなかつた。
午後、小さい風呂敷包みを持つて出てゆく、お房さんの後姿を默つて私は見送つた。

一週間ばかりするとお房さんはやつて來た。相變らず漬け梅のやうに赤い顔をしてゐた。
「會長さんといふのは、まだ若い方でしたが、なかなかよく物事の解るらしい落ちついた方でして、それに私はいつたんですよ、片山とし子樣の御紹介ですつて。」
「えッ、何故そんな事をいつたんです。」
「片山とし子樣、片山とし子樣つて……」
私は少し妙だなと思つた。片山とし子等といつたつて、こんな裏街に赤ん坊と二人で暮してゐる、下級なサラリマンの妻でしかない自分

を、有力この上もない紹介者などゝ思ひ込んでゐる彼女の常識を、疑はないわけにはゆかなかつた。勿論新聞廣告をする派出婦會だから、紹介者も何も要用なわけはないんだ。

「骨が折れませうね小母さん――」

自分にもその責任を感じながら私はいつた。

「えゝ賴む程の家でしたら、入つて行くともう、洗濯物が山のやうに出してあるんですよ。」

私は彼女の手を見てゐた。骨組みの頑丈な手をしてゐた、それによつて、幾らか氣持ちを輕くさせられた。

「かうして毎日方々歩いてゐますと、隨分妙な事にぶつかるもんですね。」

「それはさうです、いろんな家庭がありませうからね。」

「いゝえね、あなた、愕いちまうやうな恐い事に出つくわしたんです。」

「どうしたんですの恐いことつて。」

「私はもう派出婦なんて商賣は止めてしまはうかと思ふんです、どうもあんな事に出會つて見ると堪らなく心配になつて來たんです。それがねあなた、妻君に死なれて子供と二人でゐる人の處にやられたんです。どうも男といふものは、全く油斷も何も出來るものぢやありません。」

もう五十に手の屆きさうなお房さんは、何か面白くて堪らない事でも話すやうに、胸へ溜つてくる襟を、時々首を突き出して上へしごいてぬきえもんを作つた。

その動作が、商賣をした人間の一生ぬけ切れない嬌態でもあるやうに厭味だつた。

私が默つて赤ん坊を見つめてゐると、彼女はさつさと歸つて行つた。

忘れた時分にふらりとまたやつて來た。

一度など、風呂敷包みを抱へて入つて來た。中から竹の皮づつみを出した。

「あなたのお好きなものを買つて來ましたのよ。」さういつて皮を開くのを見ると、鮪のおすしが累々と四人や五人では食べ切れない程入

つてゐた。處分に困つてゐると、

　あなたは此間お好きだといつたではありませんか。」

顏中腫れぼつたくして彼女は怒つた。

その頃から私はやつと彼女に異常を認め出した。

「今日こそは永のお袂れに上りました。」

さういつて爪さぐるやうな足許をして上つて來た。眼の悪い彼女を見ると、すつかり髪を切つて坊主頭になつてゐた。

「永のお袂れなんて、まあどうしようといふんです。」

「これから私は汽車賃のある處まで行きます、多分、京都あたりまではゆけるでせう、それから先は何處といふ事もなく歩いて見たいと思ふのです。」

「だつて生活はどうするのです。」

「何か賣つても好いし……。」

「行商なんて小母さんにそんな事できるもんですか。」

「いゝえ大丈夫ですよ、乞食をしたつて構ひはしないんですから。」

「駄目、駄目。若い人ぢやあるまいし。」

「なあに、だい丈夫。」

お房さんは娘のやうな嬌態を作つて、反抗的に自信のありさうな顏をして見せた。

「ほんとにね小母さん、あんまり無謀な事は、なさらないでねえ。」

私はしみじみとしていつた。

彼女は、その新しい漂泊の旅といふ思ひ立ちによつて、何か血路を開かうと考へるらしかつた。止めても止まりさうもないやうな熱情を見せて、そゝくさと外へ出て行つた。孤立した墓標のやうに、その青い襟髮の剃り痕を、私は立つて見送つた。

外には鋭い初冬の風が吹いてゐた。

ある日、小包みが屆いた。差出人の名がなかつた。開けて見ると、それはみんな手紙の反古だつた。封筒にも何にも入れずに、一束に括つてあつた。テープを切つて中を讀んで見ると、そのどれにも一々、片山とし子様と私の名が書いてあつて、どうも差出人はお房さんに違ひないと思つた。

それは一々私宛ての手紙體に卷紙に書いた、日記のやうなものだつた。どれにも殆んど同じ事が繰り返してある。

一つ一つ開いてゐる中に、どさりと中から疊の上に落ちたものがある、長さ三寸ばかりの長方形の鏡だつた。枠がとれて水銀が處々剝げてゐる。

——私は、何故とも知れぬある衝撃をうけた。手紙の一節を私は讀んで見ると、

「この前、大雪が降りましたらう。あの日でございます覺悟をしたのは。就きましてあなたに何や彼とお世話になりましたから、何か形見をさし上げたいと存じましたが、たゞ今私の持つてゐるものとては、着換への肌着もございません始末です。あの此の鏡だけは、若い時から大切に身につけて來ました品でございますから……」

私は此處まで讀んで何故とも解らない嫌惡を感じた。自分に纏はつてくる、他人の暗影を拂ひ除けよう除けようとあせりながら、しかも自分まで引き摺りこまれてゆく、他人なのか自分なのか、その影は無數に絡みあひ縺れあつて擴大してゆく。また一方には、溺れようとする者の摑みかゝる一握の藁、丁度またそれ程のものでしかない私を、差し出した無數の手が冷笑した——僞善者ざまあ見ろ!

古着屋と米屋の路地の、左側の長屋の奧に私は一軒の家を尋ねあてた。

玄關と並んで開け放たれた臺所の上り口には、家族が多いと見えて、午飯(ひる)の食器の汚れものが、ずらりと置き並べてあつた。

二三度聲をかけると、中から四十餘りの女が出て來た。何處か面ざしがお房さんに似てゐた。女は辯解的な口調で、警戒と探索の眼を私の胸もとに閃めかせながらいつた。

「全く姉には困りはてましてねえ――姉は何處か遠方へゆくとか、二三年前から申して居りましたが、いゝえあなた、皆でとめたのでございますよ、どうしてとめた位できくやうな姉の氣象ではござんせんからね、好いやうにさせたがいゝと思つてゐますとあなた、十日許り前に出たつきり、姉からは何ともいつて參りません。多分あなたさまの處にでも御厄介になつてる事と思つてゐたんでございますの……」

それからお房さんの妹は冷然と他人の事のやうにいつた。

「それにあなた商賣をした者は、年を老つても何となしその癖が脫けませんですね、年寄りの癖にあの媚態が厭らしいつて、息子達が嫌ふんでございますよ。」

お房さんのその妹の最後の言葉が、私に始めて、全く身の置き所のない彼女であつたといふ事を、ほんとに知らしめた。

それから半年ばかり經つたある日、買物の包み紙になつてゐた、餘り有名でない日刊新聞の社會面の下の方に、街の出來事といふ欄を發見した。老女の自殺といふ四行ばかりの記事であつた。

三十日午前五時谷中天王寺町四五淨光院殿內墓標裏に、年齡五十歲位頭髮五分刈の女の屍體發見さる檢視の結果自殺と判明す身元不詳。

頭髮五分刈といふ活字が鋭く私の胸を刺した。暇ごひに來た時のお房さんの姿が眼に泛んで來て、消さうとしても消えない。一生放れないものゝやうに纏はりついてくる。

だが、日が經つにつれて、新聞の雜報欄等を煩はさない自殺者が日々に幾らあるかも知れないのに、たまたま新聞に載つたそれが、必ずしも彼女だと斷定する事はできないやうに思はれて來た。

そして今では、坊主頭のお房さんの姿も、生活に押し流されて行つた自殺者の大群と一緒にしか考へられなくなつた。

鏡は、上を向いたまゝ茶棚の隅に、白い埃りに掩はれてゐる。

水泳選手人氣番附

頁 蒙御免 平

東方

地位	氏名	所屬
橫綱	高石勝男	早大
大關	野田一雄	慶大
關脇	竹林隆三	早大
小結	馬渡勇喜	明大
前頭	水野秀藏	中泉農
同	富永一	早大
同	猿橋清	慶大
同	袴田惟比古	濱松中
同	谷口忠康	粟川農
張出大關	新井信男	早大
前頭	入谷唯一郎	同志社大
同	上田治	京大
同	奥野健三	早大
同	村上弘	京大
同	村喜男	武德會
同	藤田明	早大
同	宮下利三	北大
同	松下喜一	商大
張出小結	高階富士夫	茨城中
前頭	中山	早大
同	大木	帝大
同	伊澤	隅田クラブ
同	石河	早大
同	落合	愛知水泳
同	安田	同
同	外川	早大
同	木島	早大
同	大串	慶大
同	中村	錦城商

西方

地位	氏名	所屬
橫綱	鶴田義行	報知
大關	佐田徳平	明大
關脇	米山弘	早大
小結	木村象雷	早大
前頭	粟田良作	明大
同	兒玉弘	明大
同	片山兼吉	濱松中
同	野寄金次郎	濱松南
同	勝田忠治	早大
張出大關	入江稔夫	茨木中
前頭	石田恒信	關西學院
同	小杉忠次郎	同志社大
同	松木治一	武德會
同	森好男	早大
同	山本宜人	慶大
同	山本（弟）	同
同	伊藤房吉	慶大
同	渡邊寬一郎	立大
張出小結	水谷泰夫	立大
前頭	米谷	明大
同	磯野	明大
同	宮崎	中泉農
同	谷口	慶大
同	市橋	同
同	清水	立大
同	寺田	函館中
同	石毛	早大
同	本井	慶大
同	有吉	同

行司

立行司 飯田光太郎

田畑政治

末弘嚴太郎

野村憲夫

小林榮三

年寄

內田正練

齋藤兼吉

小野田一雄

松澤一鶴

勸進元

宮畑虎彦

杉本傳

齋藤巍洋



黄昏の花

Sancta Susanna

野溝七生

クノよ。私がお前に手紙を書かなくなつてから、何と久しいこと。私はあれからお前の忠告を容れて再び私達の家族の間には、歸つて行かうとはしなかつた代りに、しかしながらとうとう郊外の小さい家を捨てて旅に出た。

私がこの古都の一隅にある尼僧院に苟めの宿を定めてから、もう恰度、お前に手紙を書かなかつただけの月日が經つてゐる。この庵には五十あまりの主の尼僧と彼女の四五人のお弟子とが住んでゐる。なかなか厖々とした建物であるが、すでに遠くの世からの古びと、禪宗の法堂であることが爭はれず寂寞としてゐる。ここの本堂の莊嚴（さうごん）は、初めて來た日に先づ私の眼を眩した。私は朝夕にこの本堂から木魚の音と共に洩れる一つの世にも可愛らしい聲が「般若心經」を捧げるのを聞いた。この聲は別の時には、しばしば、とどく限りに張り上げて新たな經文の誦法を習ふのであつた。

それで、私の心身の健康を存分に回復し得たかと云へば、私は毎度ながらひどく疲れて晝も夜も打通しにこの庵室の離れの茶室に臥てゐるのだ。今日、私の半身は偏頭痛に類する神經的な痛みですつかり痺れてしまつてゐる。たぶん、今にひどく病ふのにちがひない。しかしながら、病氣になつたとしても、もうお母様のない家に歸つて行つて安臥するといふことは、恐らく、一旦、家を逃げ出た世の小心な子供等が皆さうであるやうに、私にもきつと不可能なことに考へられるのだ。例へば、私がお父様のところに歸つて行くとする。たぶん、その夜はお父様は私を御覧にならうとはしないであらう。そしてその二日

目の朝明けのお父様の眼眸の色を想像することだけで、私の心は萎縮してしまふのだ。今に、お父様も私達を汚穢な家畜以下には御覧にはならないとしても、それ以上にもまた決して御覧にはならないだらうからね。これは堪らないことだ。馬鹿々々しい話だが、この頃中に、私はひそかに慈善病院の施療の手續きやなんか聞き合したいと思つてゐる。それこそ背後に家の扉を閉めきられて、どのやうな種類の愛からも追放された娘には、最も正當で賢明な方法であるだらう。私は、たぶん病氣になる時の準備をして置かなければならない。

今日、眠てゐて夢を見た。

私は遠い道を歩いて、くたびれてくたびれて、へとへとになつて歸つて行つた。家へ。道の傍に、たけの高い黒い麥畑が續いてゐた。私は疲れて疲れてゐたのに、クノがそこに立つてゐて、何か怒つてでもゐるやうに、麥畑の方を向いて、一生懸命に伸び上つて彼方を眺めてゐた。麥畑がクノよりもずつと背が高い。お前は私の方には見向いても呉れなかつた。史記にこんな文句があつたつけ。

麥秀でて漸々たり、禾黍油々たり。

故郷の麥畑だ。何だか胸が一ぱいになつた。

かういふ意味もわけもない夢だつたのに、眼が覺めてから、それが何かの兇兆だつたやうな氣がして（勿論、あり得べきことではない。）急に動悸が激しく打ち出して來た。暫くは、私の頭は重苦しく枕の上をごろごろしてゐたのだ。私の眼の前を、窓障子の上を一匹の蜘蛛の姿が、絶え間なく遮つてゐた。そして蜘蛛は、今はその不氣味な影を何處にともなく潜めてゐながら、なほ私の心の上を、あの厭ふべき八本の節足で這ひまはつてゐるのだ。とうとう私は起き上つて窓障子の間から夕暮の中に首を突き出した。

クノよ。お前が知つてゐるとほり、私は今も實に、一日のうちで最も黄昏を愛する。それは次第に夜が來ようとする豫兆であるからだ。それに、ことに、逢魔が時といふ奇怪な時刻であるではないか。尼僧院の中でこの事を考へつくのは何か、ことに相應しい。私は先刻、私がお前の傍に暮してゐた時にもよく常にさうしてゐたやうに、窓枠の上に拳固を立てて、その上に頤を支へてゐた。かういふ時、多くの心はしばしば思ひ出や瞑想の中に沈滞してしまふのだ。

クノよ。今以て思ひ出は私の心を少しも優しくはしない。何故と云つて、私は、その子を養育した親が持つても好い以上の強力と偉大を以て、精神的にも肉體的にも侮辱せられた子供はその過重の恥を、運命の戒律かなぞのやうに忍容しなければならないといふ哲學を、持つ

てはゐないからだ。だから實際、私には咽喉に咽せ返るほどの苦痛の思ひ出があるばかりだ。唯、時に、例へばそれに伴つて浮ぶお前の、云ひ難く和い劳りが私の中に徐ろに移動して來ることはあるとしても。

親しいクノよ。唯、お前の存在だけがよく私のこのひん曲りの人生に、僅かに呼吸することのできる間隙の一小部分を許して與れるのだ。最上の大切なクノよ。

この夕暮はさまざまなことで、私をさらに堪え難く憂鬱にした。水蒸氣の多い濕つた大氣の底に、私がかつて故郷の泉の傍で、早い夏が來かかる頃に、佛手柑の叢生の中でしばしば嗅いだ柑橘類の花の、名狀し難い香が這ひまつはるやうに漂つて來たのであつた。

「ああ、どこかに蜜柑の花が咲いてゐる。」

すでに夏であつた。

凡ての色や物を和くする黄昏の仄かな中に髮に、衿に、袂に、甘美で芳烈な花を無數に裝つて、私は拂手柑の叢生の中に立ちつくしてゐたのだ。この夕べのやうに、その時も、水蒸氣に重い薄明の空氣の中に、花の香は皆溶けてゐた。そして、私が全身を埋めたこの花飾りを解き捨てた後も、花の香はその夜の浴場にも寢室にも、私の個體に伴つてぷんぷんと匂つて來た。私は、髮をほぐすために髮針を拔いた。すると、髮はわだかまりながら枕の上にくづれ落ちる時、夕暮の花の香氣があたりに冷く發散した。私は、寢床に横はる前に、身を折り曲げて我と自分の露はな脚の上に口をつけた。さうしてその上に印された赤い鞭の痕をいたはらうとすると、そこにも花の香は浸み透つてゐた。

鞭の痕か。クノよ、說明をするまでもありはしない。家畜を叩く鞭なのだ。お父樣には、しばしば、あの方の秘藏のアラビア馬と人間の子との見境がつかなくなつたのではなかつたのか。夕暮に、私が白い蜜柑の花の下に立つて淚を流してゐたといふのだ。これは十六の小娘の汚はしい空想であるのに相異ないといふのだ。して、その罰がこれだ。鞭と一緒に、私の上からは白い小さい花が雨のやうに降りかかつた。おお空想だつて？　私はとび上つて喚き出したくなる。『どうすればこの家を逃げ出すことができるのか。』この觀念のほかに、その頃の私の思考を、どのやうな空想が支配してゐたものであるか。幼い日の子守唄のひびきさへ、私の心には忘却の裡に封じられてゐた。

クノよ。私が何故このやうなことを書かうとしてゐるのか解るか。花の香氣さへ思ひ出の中では、私の心臟に鋭い刺を植ゑるのだ。さら

に私はこの夕暮、私の心を貫きとほした一つの泣聲をきいて、傷み惱んだ。かういふ斷續する泣聲を私はかつて知つてゐる。それは生命の痛苦を訴へる肉體の叫喚だ。さうして、この泣聲は私をとうとうその聲の主の傍にまで、驅り立てなければやまなかつた。何故と云つて、私は一瞬間も速かに、私の思ひ出を刺激して私を傷けるかういふ泣聲を、止めて欲しかつたからなのに相異ない。私は長い廊下について、もう暗くなつてゐる本堂の須彌壇の後を、壁に片手を支へながらめぐつた。その冷やかな手觸りは、今もなほ指頭の感覺を重くするばかりに忘れ難い。

クノよ。繰り返して云ふのは、私が今宵、燈火の仄暗い納所の内に見た光景といふものは、あのことが、尼寺といふものの中にもあつたといふことだ。

庫裡の板敷の、二枚の上げ板を跳ね返して、そこには洞穴のやうに見える床下が黑く口を開いてゐた。その中にぽつくりと浮んだ可憐な小さい顏が、水から引き上げられたやうに濡れ濡れになつて、恐怖のあまりに口をわあんと開いて、もう見境もなく喚いてゐた。私は、その周圍に、皆、蒼白く興奮して、口々に恐しい言葉をこの小さい子供に浴びせかけてゐる四つも五つも並んだ尼僧達の顏を見た。

クノよ。少しの抒情もなしにこれを云へば、この子供は私がこの僧庵に足を止めた日から朝夕に、須彌壇の前に精一ぱいの金切聲で心經を捧げる、云はば私の唯一人の話手になつて吳れた得度してあまり間もない、まだ法名さへ名のつてはゐなかつた九つかやうやく十の小さい女の子なのである。頭髮をくりくりに剃り圓めて、その癖、色ある美しい着物を着てゐるのが、不思議になまめかしく感じられる錯覺を、しばしば私に與へたことだ。

私は今——原因を知ることなしに——この子供が、普通の在家のよりも更に深い寺院の床下に、多くのより強い手を以て追ひ落されてゐたといふことをお前に語つた。その時どんなに甘美極る蜜柑の花の香が、この庫裡の中にまで、恰も、人間を驅つて或種の狂氣にまで導く有毒瓦斯かのやうに、重苦しく瀰漫してゐたかといふことを、云ひ忘れることはできない。この力限りに泣き喚く小さい沙彌尼の細い弱々しい腕が、漸く僅かな手懸りを探り得て、辿々しくのび上つたかと思ふと、いきなり、淺葱染の納所着の袖から、恥づべき一本の手が動いて、この可憐な二つの腕を床板の上から捥ぎ放したのを私は見た。これは氣狂ひの所業だ。その時に、不思議に空疎な高笑ひが尼僧達の唇に痙攣したことも。その笑ひはやがて、彼女達の頰を歪めた妖しい微笑にいつまでも凝りついたことも。そこには凡ての人間が Organis

（激情的）に在る時の或一瞬間を語る、恐しい蒼白の激烈な色が湛へられてゐた。

クノよ。私は、私が見出した時からでさへこのお沙彌さんが尼僧達の眞中で、どのやうな狀態にあつたかといふことを巨細に書きつけて行く勇氣は、とうてい筆の先には現れては來ない。（私の憤りは、なほ醒めてはゐないからだ。）お前は、昔、十か十一の女の子が私達のお父樣の氣まぐれの鞭の下に、とつつかまつた時のことを思ひ出すことができるであらう。（え、躾だつて？ 私は今でも、お父樣がお使ひになつたこの不思議な言葉を、冷笑を以て信じない。）

とかくの後に、私にはあの小さい沙彌尼の哀れな姿が、まるつきり、蹴られても蹴られても、なほその脚下に這ひ寄つて、彼女の主人の宥恕を乞ふ、柔軟極る優しい小動物かのやうに見えたのである。

私は、恥と憤りに燃えながら、のろのろとその場を立ち去つた。私に、何か一言をその時に云ふことができたのであらうか。あれは皆、殘らず氣狂ひなのだ。恐るべき病人達なのだ。皆は理智をも昏す癌のやうな惡熱を、その瞬間に病つてゐるのだ。私は自分の眼を信ずる。あの中には、いつぞや私に向つて、アメリカと米國との相異を訊した一人の愛すべき年若い尼僧さへ混つてゐたではないか。しかしながら、彼女達が宗教團體に屬すると否とによらず、このことが一人の子供にとつては、許さるべきことであるのだらうか。子供の傷き痛む心は、彼女達の、どのやうな狂氣の故を以てしても、償ひ得べきものではない。永久に、不當の恥辱を背負つたのだ。おお、子供は眞直ぐに立ち上つて、彼女達の顏を打ち返すことができる。何故と云つて、尼僧達のどの一人だつて、小さいお沙彌さんの親ではないのだ。その上、あの慘辱に蒼ざめた瞬刻の狂暴に醉つた彼女達の心の片隅にさへ、可憐な法妹に對する躾、或はそれに近い心遣ひの意味の片鱗さへ、そこには宿つてはゐなかつたといふことを、私によつて見拔かれてしまつてゐるのではないか。

今、宵の勤行の鐘の音が何事もなかつたかのやうに鳴り響いて來た。これで見ると一日中、不在だつた庵の主は、今、歸つて來たのらしい。

クノよ。この手紙はもうこの邊で書き終らなければならない。私が誓つていふのは、「凡てが、正當であるだけ」を好む私の憤りは、唯實に無辜のお沙彌さんのためにだけ、あの尼僧に向つて腹を立てることができるのだといふことを知つてゐる。その他は、私にもよくは解らないことがある。おお、今も堪へ難く匂ふ蜜柑の花の香氣が、何か知つてゐるのかも知れないのだ。それだからと云つて彼女達の誰一人が

行つて、あの花を悉く引き拗つてしまはうどする者もありはしないであらう。まして、叢林に行つて染汚の衣を裂き捨て、我とわが裸の肉身に千百の鞭打を加へようとする者なんぞ。だが、さうするが好いのだ。可哀さうな人達。せめて（お沙彌さんのためにでも）さうするが好いのだ。

佛陀憐み給へ、彼女達は自分で何をしたのかを、少しも知つてはゐない。

クノよ、さよなら。最後になほ二三行、添へても好いだらうか。

……………

クレメンチイア。……あなたあの花が匂ひますか……此處まで薫りますね……ああ……あの花……私あの木を引きもぎつてしまはせませう……明日ね……あれがあなたのお邪魔になるやうでしたら。


大辰アヤ子



長谷川春子

お兼

三宅やす子

一

どうかすると三十位に見える事があるし、時によつて、五十以上、もつと六十位の婆さんのやうな顔になる。が、實際のところ、お兼の齡は四十を幾つか出た位のものらしい。力自慢で、ほかに何の取柄もないが、只力のある事だけで、今日まで不思議に生活を續けて來た。不思議に——全くそれはなみの人なら何の怪しむ事もないけれど、まるで低能みたいに、腦の故障の起るお兼のやうな女が、獨りで暮して來られたのは、彼女の腕の力のおかげだつた。

水汲のお兼、とも呼ばれた。彼女は、水の質のよくない避暑地の河岸で、一夏そこに暮す人達のために、質のいゝ水を汲んで來たり、それがきつかけになつて、貸別莊に居る人の用達を頼まれたりして、夏の間は何の不自由もなく暮した。

秋から冬、それから夏になるまでは——秋には夏のうちの貰ひためを、丹念に整理して、どうやら口が糊せた。そして冬にはまた、誰かしら都の人の用を足して、春をくすぶつて居ると、すぐ夏になつた。勿論、彼女の生活は、みじめなものだつた。よく〳〵の事でなければ財布を開けるやうな事もなく、物をつかはずに奇蹟的な生活をして居た。

お兼のくせは、何でも物をほしがる事だつた。そして、生れて此かた、人に物をわけてやつた事のないのが、まださう窮乏して居ない時分からの、彼女の性格でもあつた。今では――勿論前からもさうだけれど――町の人が誰も相手にしない位、彼女の吝嗇はひどくなつた。

「あたまが足りなくても、慾の皮許りは人並以上に、つつぱつて居るんだものな」

さう云つて後指をさゝれても、お兼は一向平氣だつた。

親もなし、良人もなし、だからかはいがる筈の子供も持たない、たつた一人ぽつちのお兼には、紙屑一つでも彼女を保護する何かのやうに思はれたのかもしれない。

「可哀さうにな――あれでも十七八の時には、それほどみつともない女でもなかつたにな」

お兼より年上の男達は、さうも話し合つた。

きれうはどうあらうとも、知慧さへなみに働いたらお兼も今頃は、小さくても一軒の臺所におさまつて居たのだらうが――お兼が急に一時氣が變になつてからといふもの、誰にも相手にされないで、若い盛りを過してしまつた。

其氣が變になつた譯を、土地の人は、時々面白さうに茶話にする。

「まだ此土地も、其時分は、ほんの開けねえ前だつたよ――何でも此處の景色が、えらく氣に入つて、山の中途に家を建つて住つてた獨身者の異人さんがあつてな――脊のスラツとした、毛唐らしく恐かなくねえ、さうよ、まだ若い異人さんだつたつけ。それがまあ、何の譯だか、大方今考へれや、胸の病でもあつたこつたらうが、こんな邊鄙な――其頃ぢや全く邊鄙だつたからな――田舍に來て、住ひを初めたんだもの、女中がなけりや居られつこはねえ――土地で女中に雇はれて行くものも、異人さんの獨り暮しぢや、誰も、おつかながつて寄りつかなかつたんだが、あのお兼の奴、さうさまだ廿歳だつたが、あいつは恐ろしいつて事を知らねえ女だ。其上慾が張つてるから、給金のうんと高いのに惚れ込んで、住み込みで働いたものよ」

そこまで話すと、話し手はニヤリと笑つて煙管に煙草をつめ込む。

毛唐は勘定高い上に口やかましいと來てら。そして仕事はうんとさせるんだから、お兼だつて決して樂ぢやあなかつたんだらうが、あの女ならこそ勤め通して――それで金でもためて嫁入すれやあ、何の事はなかつたのよ。そこが、それ、世の中の事つてものは、さううまく注

文通りにや話が運ばねえや。ハッハッハ。氣難しさうな異人だつたが、妙なもんで、物ずきだか何だか、お兼の奴を――まあさ、そんな噂が、狹い土地だもの忽ちひろがつてしまつて、しまひにやお兼はお腹を持てあましてるなんて評判だつたのさ」

「すると、あいの子を生んだんだね。あの面で……」

「まあ、さう先まはりして聞きたがるもんぢやねえ――そんなこんなの噂が、異人の耳にはいつたんだか、何だか、それとも自分の身の上の都合だか、そのうちに、異人はこゝを引上げる事になつてね、東京に行つたやうな話もあつたし、アメリカだかどこだか、本國に歸つたつて噂もあるよ。兎も角山の上の家は人に讓つて暫く明家になつたものよ」

「可哀相に、お兼も明家になつたんか」

「ところがよ。山の家の戸が閉まつたと一所にお兼は行衞知れずよ。親にきいても行方が解らねえと許り、世間の噂ぢやあ異人について本國に行つたらうつてものもあるし、まさか、あんな女を連れてくものはないつて、まあ、誰でも、その方を信用するがね――事によると、身二つになるまでどつかに隱されてるだらうつて、推量をするものもあつて、一時は皆其話しで持ち切りだつたよ――ところがそれから半年も經つと、ヒョックリ、蒼い顏をして、あの女、また獨りで、其時分は丈夫で百姓をして居たあいつの親のところに歸つて來たよ」

「捨てられたつてところだね」

「それがね、どうも樣子がをかしいのさ。それつてが、少しキ印になりかゝつてるんだ。誰が何を訊いたつて、何も話さねえ。親にも隱してるんだつて話だつたが、ほんとに子供が出來て、どこかで生んで來たものやら、其子をどこへくれてやつたものやら、それとも日の目を見るまでに子が育たなかつたものやら、一寸もわからねえ――異人ともどんないきさつで手を切らされたか、一向誰もほんとの事を知つてるものはないが、あの女はその時から氣が變になつて誰とも口を利かねえ女になつて了つた」

「可哀相なもんだね――それでも今はあゝして話もするぢやねえか」

「半年許り、キ印みたいになつてるうちに、だん／＼病氣もなほつたと見えて、少しづゝ口を利くやうになつたよ。でもあの通り、どつか足りねえやな――あれで、そんな事がある迄は、別に人と變つた樣子も見えなかつたんだが、まあ、其異人に可愛がられたせいか、それとも虐待されたせいか、そこんところはわからねえが、とう／＼變た女になつてしまつて、それからつてもの、誰もそんな女を相手にもしねえ

から、あいつの持つて生れた慾の皮許りが、ます〳〵つゝばつて、只もう、何でも、ほしい〳〵で年を食つてしまつたんだね」

お兼の過去には、たつた一つ、そんな事件があつただけで、毎日何の變化もなしに、三十を過ぎ、三十を越して間もなく、父にも母にも別れてから、自分の食べる野菜を作る位の畠だけ殘して、土地は少しの金に代へ、「水汲のお兼」になつてしまつたのだつた。

二

其「水汲のお兼」に此頃は「猫イラズ」と云ふあだ名がついて了つた。お兼さんといふ代りに、あの猫イラズがね、で通るようになつた。といふのは、そろ〳〵お兼の體力も衰へはじめて、彼女のがせいな働きが、彼女の身にこたへて來るやうになつて來たのか、此頃口ぐせのやうに、

「あの世に行つてしまふ」

と逢ふ人毎に話すのだつた。

「私もいよ〳〵親のそばに行かうと思ひますから、あとは何分よろくしお願ひします」

親のそばに行くといふのは、勿論自殺をするといふ謎でしかなかつた。

彼女はいつでも、多量の猫イラズを所持して居た。そして、少し何か氣に入らない事があると、すぐに

「今夜、私はかねて用意してある猫イラズをのむつもりですから、あとのところはよろしく」

と近所にふれまはつたりした。

平素はかげ口をきいたり、當人に向つて惡口をついたりする近所の人も、死ぬといはれると、まさか、止めない譯にはいかなかつた。

「お兼さん。何が心配事があるのか知らないが、二度と生れる此世ぢやなし、壽命のあるたけ生きるのが本當ぢやないかね——必ず短氣な事はしなさんなよ。人に話して相談の出來るやうな事なら、何でも打明けて云つて見なさい——膝とも談合だ。惡いやうにはしないからな」

斯様近所の者から慰められると、お兼は會心の笑をニッと洩して、其くせ口ではさほど有り難いといふやうな言葉も出さないで、
「私のやうなものは、生きて居ても何もなりませんから、それよりいつそ兩親のそばに參ります。お寺にもよくたのんでおきました」
彼女は眞顏になつて、さう云つて居る。
それで其晩藥をのんだとかのまないとか、近所の者がかけつけて、あわてゝとめだてすると、やつと思ひとまつたやうに、猫イラズは佛壇の抽出に片づけてしまつて、あくる朝はまた、ケロリとした顏をして、鼻唄まぢりに、臯をうろ〳〵、芋のつる返しをしたり何かして居るのであつた。
そんな事が、あまり度々なので、もう誰も本氣にするものはなく、
「お兼さん。猫イラズはまだ腐らねえかね。もうそろ〳〵入用な時分ぢやないかね」
とからかつたりされるほどになつても、當人一向平氣で
「今年の秋までは、どうせ生きて居るつもりはありませんから、たべおさめに祭の甘酒は、うんと御馳走して下さいよ」しやあ〳〵としたものだつた。

三

お兼が猫イラズを持ち出して近隣をさはがせるやうになつてから、早くもまた一年あまり月日がたつた。
そして、お兼はもうあまり猫イラズで騷がなくなつた。
馬鹿でもチヤンと承知してら。おどかしが利かねえと見たら、チヤンと其手は使はねえやうになるものな」
可笑しがつて一人が云ふと、
「さうぢやねえつて事よ。あいつが此頃死ぬ、死ぬつておどかさねえのは、チヤアンと其理由（そのわけ）があらあね、」一人は譯知り顏に云つた。
「こいつは聽きものだ――どんな理由だい」

「どんなにも、こんなにも、頗る非常に面白い理由なのさ」
「念が入つてるね。一體どうしたのさ」
「鐵よ、鐵の野郎よー
「何、鐵？、あの薄野呂の鐵かい？」
「さうよ。」
「ウフ、あいつは變り者だね。角屋の親方が身柄を拾ひあげて、世話してやつてるつてが、ひどいぼろをさげて、働いてるぢやないか。着せて、食はせる條件つきだとよ。着せて食はせてか――ハツハツハ。なるほど食べて、着てるにや違ひないな。そいでたゞ働きで一生飼殺しよ。角屋の親方もとんだお慈悲めかして、なか〱あれで考へてら。損のいかねえようにする男だからな」
「薄野呂でも、使ひ走りや風呂番位はまめに働いてるものな」
「さうよ――そいで、あの鐵の野郎がどうしたんだい」
「それがよ――牛は牛連れ」
「ハツハツハ。お兼さん、巽人さんから薄野呂の鐵に下落したかい」
「巽人さんはキ印にならねえ前のこつたあな――今のお兼に誰が、つばも引かけるもんか」
「だから時々猫イラズをのんで、男に介抱されたがりやがるー
「もう猫イラズも要らねえとよ――鐵さんなか〱あれで實があるからな」
「ほんとかいー　ほんとにお兼と仲が善いのかい」
「そんな事がわかるもんか。どうせ足りない同志だもの――色戀の話よりや銅貨の勘定でもしてる方が性に合つてるかもしれねえ」
「全くだ――それにお兼はあいでなか〱鼻つ張が強いから鐵の野郎なんぞに優しい言葉はかけねえと思ふがな」
「色けぬきのおつきあひか――變り者同志で、いやに振つてら」
　噂されて居る鐵といふのは、近在の生れで、四十過ぎるまで女房を持つた事のない。土地の人に云はせると、つまり「足りない」男だつた。

働いて食べる田地はないし、雇つて働かせる人もなく、せつぱつまつて、鐵道の線路のそばにうろ〳〵して居るのを、通りかゝつた質屋の主人が助けてそれからづつと質屋に働いて居るお人よしで、お兼が質を入れに行つたとき、知合になつたらしかつた。

たまに使のゆき返りに、鐵さんが足休めに寄ると、お兼は茶を淹れたり何かして、とつておきの鐵砲玉で、暫く話し合ふのだつたが、皆に莫迦にされてばかり居る鐵さんには、お兼の家が、何となく居心地のいゝ休息所だつた。

だから鐵さんは、少し間のびのした顔に柔和な笑を浮べて

「お兼さん、とんだお馳走になつたね。又來るよ」と名殘惜しさうに腰をのばす。するとお兼は、

「鐵さん、もう歸るのかい――まだいゝぢやないかね。御覧な。お太陽様（てんと）は、あんなに高いとこにいらつしやるよ」

歸らせ度くないやうな口吻が、鐵さんには又、無上に嬉しい。

「あゝそいでも。親方がまたやかましいからね。納屋にまだ割らねえ薪（まき）が、山のやうに積んであつて、そいつを、これからちつと許り片を附けなけやならねえ」

「大變だね。これからかい」

「夕方は子供の守もしなけやならねえし、忙しくてはあ、目がまはるやうだよ」

「鐵さんはほんとによく働くつて評判者だよ――子守つて云（い）や、今日はおせいちやんを連れて來なかつたね」

「晝寢してたよ――だから珍らしく空身（からみ）だ」

「隨分重いだらう?」

「いつまでも負（ぶ）さつて許り居たがつて、始末においねえ。いくらも歩けるのに、すぐ脊中にとつつきやがるんだから」

「いくつになるの?」

「明けて六つよ」

「よくお前さんになじんでるね」

「あゝすつかりなついてるよ」

「………」

こんなたわいもない話をしては、茶をのんで歸る鐵が、お兼のところの唯一の客だつた。今まで訪ふ人もなかつたお兼の六疊の土間は、かうしていくらか明るくされて行つた。

四

近所のものが誰もそんな事を云ふやうになつたのは、お兼のところに鐵が話しに來るやうになつてから、半年とは經たない後だつた。

「どうも様子がをかしいぜ」

「をかしいよ急に妙な事許り云ひ出すよ」

「お兼が、いよ〳〵ほんもののヽキ印になつたよ」

「とりとめもない事許り云つて人の顔さへ見れば手を合せて拝んだり、夜中に急に大きな隣近所にも聞えるやうな唄をうたひ出したり、全くあれや正氣の沙汰ぢやねえ」

「鐵が見舞に行つてやつたらよかんべ」

「それがをかしな話よ――鐵が行くとプッと顔をそつぽに向けて、口を利かねえとよ」

「何か腹あ立つてるんか」

「まさか…ウフヽ、角屋ぢやあ世間體をこはがつて絶對秘密にして居るんだから、お兼なんぞの耳にはいりつこはねえよ」

「だが鐵の事だから、何かのはづみに、あいつの自分の口から話さねえとも限らねえぞ」

「アッハ――呆れて物がいへねえ。一體全體、眞に受けられねえ話なんだがな」

「それが、當人の口から、チヤント、態の野郎に話したんだから、まちがひねえや、大方お兼にもしやべつたんだろ」

「そいでお兼がやきもち燒いたんだろうか」

「まあ、そこんとこらだね――お兼と鐵とは色戀の中ぢやねえつてけど、何せ足りない同志よ。やきもちだつて變つてら」

此噂は、お兼にとつて沒交渉のものではなかつた。實際、お兼が斯な事を口走るやうになつたのは、鐵が守をして居たおせんちやんに惡ふざけをしたといふ事實が、いつとなしに洩れた時分からだつた。お兼はそれつきり鐵と話をしなくなつた。

そして、氣味の惡い笑ひ方をして、近所を訪問して歩いて、

「東京へ行つて參ります」と暇乞にまはるので評判になつた。

「お兼さん、急に東京に行くなんて云ひ出して、東京には親戚でもあるんかね」

近所の者がかう訊ねてやつた。するとお兼はにべもなく云ひ切つた。

「親類なんぞござんせん」

「そいぢや、どうして東京なんか行きなさる」

「親類ぢやあないけど――親類のやうに懇意な家がありますから」

「フム、こいつは初めて聞いた。そんな話は今迄ついぞ聞かなかつたが――お前さん何か夢でも見た事を本氣にしてるんぢやないか」

「夢ぢやござんせん」

お兼は眞面目になつて、

「八年許り前に、夏こゝに來ておいでた人で、新島さんていふ方が、東京の麻布に居らつしやるから、そこを訪ねて行くのです」

「新島？、さう〳〵そんな名は聞いてる。大學に通つてなさる脊の高い息子さんのあつた家だらう」

「さうです。さうです」

お兼は勢づいて、

「今で、お母さんが亡りなすつて、あの息子さんの代になつてます」

「お兼さんはいやに悉しいんだね」

「毎年手紙を下さいます」

「…それで何かい、新島さんをたよつてゆくのかい」
「エヽ、昨日手紙を出しておきました、二三日中におたづねするからつて」
「二三日中に？、お兼さん、ほんとに東京に行くのかい」
ニコリともしないで眞面目になつて話すお兼の顔を、近所の者は、判斷に迷ふやうに、ヂロヂロ眺めるよりほかは無かつた。
だが、お兼の云つたのは眞實だつた。ある朝、彼女は着替をそつくり行李にまとめて、留守を隣りの人にたのんで、ガッチリ錠をかけて停車場に急いだ。誰も見送つてやる者はなかつた。
「莫迦な女だな。鐵と仲たがひをしてなけれや、あの行李位しよつてくれるだらうにな」
近所の者は、妙に厄介拂ひをしたやうな氣持で、
「一寸でも長く東京に行つて居てくれた方が、うるさくなくて可いや」とお兼の住居のまはりに鹽をまいた。

五

それまでは故鄕の土をはなれようともしなかつたお兼が、何を思ひ立つたか、東京に出掛けて、記憶をたどつた番地を目あてに新島の家を訪ねて行つたとき、何より驚いたのは新島の細君だつた。
「あなた」細君の花子は良人の居間にかけ込んで、
「變な人が來ましたよ。何でもうちの知合だからつて、玄關から離れませんのよ。いくら斷つてもだめなの。私氣味が惡いから返さうと思つたんだけど」花子は良人の應援をたのんだ。
新島が仕方がなしに玄關に出て見ると、今までばあやと何か押問答をして、少し殺氣立つた物言ひをして居たお兼の顏が一時にとけるやうな和らぎを見せて、
「お久し振りで」と新島に向つて、叮嚀に頭を下げた。

「お兼さんか――どうしたんだ」

花子は呆氣にとられて、良人とお兼を等分に見くらべた。

「どうぞ、暫くお宅において下さい」

何でも新島の家に置いてほしいと大きな聲でさわぐので、新島は近所の手前がはづかしいと、家の中に上げて、八年前に一寸働かせたといふ縁故だけの、お兼の其後の身の上を訊ねた。

が、云ふ事に符節の合はないところがあり、どうやら精神に異常を來して居るやうに思はれるので、明日まで泊めて、翌朝田舍に照會して誰か引取りに來させようといふことになつた。

「ね、無理に追ひ返して御覽。うろ〳〵して警察の厄介にでもなれや、又僕の名なんぞ覺えて申立てる位なものさ――そしてつまらない時間潰しと恥かきをするより、ゆつくり氣を落つかせて田舍に返すのが得策だよ」

細君も事情をきいて見ると、それに不同意も出來なかつた。

翌朝早く、田舍に電報が打たれた。新島夫妻はそこから誰か迎へに來るものと思つて居た。宛名はお兼から聞いた從兄にあたる男の名だつた。

お兼は女中部屋の火鉢の前に、チョコンと座つて、獨言を何かしら云ひつゞけた。それをばあやは氣味惡がつた。自分の部屋に侵入された此變な客が早く居なくなつてくれればいゝと思つた。が、主人の命令で食事の面倒は形式だけに見てやつた。

「奧樣、あの人はよつぽど變つてみえますよ」

間に細君にそつと報告に來た。

「新島樣、新島樣、獨り者の私をどうぞお助け下さい。どこもゆく處がありません。死ぬまで置いて下さい。御恩に着ます。なんてひとりで口の中で言つて居りますよ」

「まあ」と細君は氣味惡さうに、

「厭ね。早く迎が來るといゝのにね」と眉をひそめた。

「そして奥様」
ばあやはさも憎らしさうに
「あれで牛乳がほしいなんて云ふんでございますよ。お勝手に牛乳の瓶があつたらそれをめつけてほしがりますから、昨日殘つたのを少し許り、うすめてお砂糖を入れてやつたら、大喜びなんでございますよ——田舍の人には珍らしうございますね」
其時女中部屋では又、くど〳〵獨言を云ふ聲がきこえた。
「アラ、お聞き遊ばせ、奥樣。あれなんでございます」
聲はとぎれ〳〵でよくはきこえなかつたが。時々、
「私のいのちが、いつまでも續くやうに——助けたまへ。父上。母上。新島樣のおなさけで救はれますやうに——身體が丈夫になるやうに」
そんな言葉がくり返されて居た。
恐らく、お兼の持つて來た小さな行李の中には、猫イラズはいつて居なかつたに相違ない。
そして。
お兼の頭にはあのアメリカ人が脊がスラリと高くて、それから鐵さんが、薄野呂だけど、日本人には珍らしいほど脊が高くて、それから此家の主人の新島が、脊の美しいので評判の男だといふやうな事は、結びつけて考へる力は尖つて居たのだが、彼女は、昔アメリカ人の家に居た時食べたやうなものは——たとへば殘りものゝコロッケや、ビフテキの肉のあまりのやうなものは、ボロ〳〵涙をこぼして押し頂いて食べるのだつた。
田舍からは何のたよりもなかつた。
お兼は相變らず、「身體がよくなりますやうに」と云ひ續けた。
主人は焦れ出した。
明日誰も迎に來なかつたら、警察の方に交涉して、國家で始末をつけさせる」
彼は晩酌のビールをやけに二本重ねた。
（一九二八、七）



深澤紅子

街の底を踊る人形

高橋鈴子

そこには死の息吹きと强烈な煙草の香が漲つてゐるだけだつた。

が轉落してゆく彼女等の呼吸を幾何か安息させた。

外は夜の塵埃を蹴飛ばして血の匂を嗅ぎたがつてゐる、　いや骨までもしやぶりたがつてゐる狼を載せた自動車が夜の沙漠の中に消えて行つた。

死骸の上を飛ぶ蠅の音が聞えた。息を殺して額へ戰く彼女等には死骸自身の相手を考へてゐた。

三人の女が一齊に立上つた。　安價な香水を撒き散して一匹の狼にくつゝいて階段を昇つて行つた。

不安定な目付が三人の女を見送つてゐた。　殘骸は自暴自棄に濛々と部屋を煙らせた。　が彼女等は反り返つて次の自動車の音を待つた。　チャルメラの妙に人間を憂欝にひきずり込む響が支那街に消え去ると腐亂した部屋の中を倉庫の靜けさにした。

交番の巡査の眼がピストルの樣に光つてゐた。　忠實な番犬は兇猛な叫びをF子に投げ付けた。

シングルカットの衿足から脊へなまぬるい夜氣が無造作に浸入した。　A、K、T、三人の男の印象

がF子の裏口の中に潛んでゐた。が旱天の土を濕す一滴の効果をも見出せ得ない、なぜなら彼女の夫は極度のブルジョア病魔にとり憑かれてゐたから――

切りさいなまれた肉の破片の醱酵の香は三人の男の撒き散した異臭だつた。終電車は奇怪な叫びを彼女に吐きつけて疾走した。

男は空咳の後で女にかう言つた。

「いつまでも浮游してゐるな」

男の聲は力なく弱々しい生と死の境を辿る響だつた。

F子はこの瀕死の病人を慰撫する眞情を吐露する術はたゞ二人の餓死だけを知つてゐた。邪惡な思想の最尖端、一人の男、一人の女が生存の一日の欲求がかう男に嫉妬を持たせる原因だつた。忌はしい悔恨と苦痛にF子は男の瞳を逃避したかつた。

男はそれでも骨だけで女を強く抱き締めてゐた。枯れた熱を含んだ男の唇に懺悔の情熱を女は壓しつけた。男は力なく眼を閉ぢてゐた。

「赦して異れるわね、何もかにもを」

男は女に言葉を返さうと思つた。

空氣を微細に波動させる程度の空咳が間斷なく男女の私語を妨害した。男にはかなりの苦痛が顔面を匐つてゐた。女は疲勞の息の底に男を介抱した。男は淋しく、暗欝に吐きすてた。

「金のありあまつてゐる人間に媒介をしてやるがいゝ、俺の口からお前の唇へ、あらゆる男はお前を抱いて人生の快樂を味ひつゝ、傳播する肺菌を貰つてゆくのだ、お前の全身の吸血魔がついでに俺の全身の細菌も頂戴するのだ。」

F子の憂欝は生活の不安定だけからではなかつた。欝陶しい梅雨の雨垂れと月經の腰痛が氣を腐らせた。F子の憂欝は二人の憂欝だつた。F子の血液の太い線は穢れ爛れた泥濘の様に微動してゐる。彈力の衰へた肉體は蒼白の皮膚から冷却を始めてゐた。額を脂汗が底氣味惡く滲ませた。

苦しい吐息と濛々と煙る煙草の煙の底に男の苦痛を訴へる空虚な響が鋭くF子を脅迫した。狭い一つのベットの上に瀕死の肺病患者と他の腐れかゝつた人間が空氣を嚙ぢぎつてゐた。咳は續いてゐた。

F子は激しい頭痛と腹痛と腰痛にのたうち廻つて怒鳴つて見た。

「殺せ、殺して、生活力を失つた一對の男と女を殺すがいゝ」

「馬鹿ッ、俺は死なないぞ、のめつたらお終ひだ、骨壺を呪へ」

病勢の惡化は人生への執着と、彼女の行爲にインデイフアレントだつた男に激しい嫉妬を浴せかけた。

「俺は死ぬのは厭だ、俺の生命はお前だ、お前の空氣を呼吸する間

は俺も死なない」男の昂奮は多量の鮮血を生産した。

男の呼吸は目まぐるしく度を高めた。

「えゝ、人形は飛切上等、お値段の所も今夜は捨値に致して置きます。魂を持つた人形、えゝ今晩はこの三箇を一箇の卅錢に致して置きます。」

男は脊から喚き續けた。三箇の博多人形は蜜柑箱の上で盛に亂舞した。

一日の疲勞を欠伸に嚙み殺した警官の眼は鋭く路傍商人に復讐される！　素早く箱の下に人形をかくすと男は强い惡感に咳き始めた。男は無鑑札だ。

「えゝ、品は飛切上等、魂を持つた人形、三箇の卅錢」

街の放蕩蟲からジャズの喧噪は男の聲を弱らせた。男は必死に戰つた。男は女の愛藏品を十錢玉三つに交換するに斯く迄苦痛と努力が必要だつた。

「えゝ、人形は九州博多の本場品、卅錢、卅錢」男の腹の底から搖り上げた最後の喚聲は半ば涙に包まれた悲愴味を帶びてゐた。

聲が杜切れた。男の胸の中はむかむかと躍り狂つた。空咳が搖り上げた。指と掌はベットリと、どす黑い血啖に絡みつかれた。

男の體を支へ得る爲には ビルデングの懸崖は あまりに冷淡だつた。男の額は火の樣に熱かつた。夜氣を吸收した神經の漆喰に男は頭をすりつけて微かな息を二つ三つ續けて目を閉ぢた――血啖がドロドロと顎を傳はつた。營養不良の兩肢は一個の輕い病軀をも支へ得ないで蜜柑箱を刎ね返した。

ガソリン燈の火はユラユラと痙攣し蜜柑箱から轉落した。

「人形は賣れなかつた。お前の魂は俺の傍で俺の瞳を見つめてゐる」

胡散臭い視線の街の人々は男の言葉を無造作に聞き流した。

ジャズの哄笑は斷末魔の一人の男の上に降り注いだ。

三個の人形を抱いた男がさうかうと人混みを搾り分けて街の中を走りつゞけた。女が男を追ひ狂つた。その光景は次第に速力が早まつて、目まぐるしく廻轉した。男は高熱にうなされてゐる樣に大きな呼吸を一つつくと、あらゆる人生の無の境界に立つてゐた。

ぐいぐい曳きずられる警官についてゆくより仕方がなかつた。留置所の窓は赤褐色に光つてゐた。

「何處だつて同じ事だ」

門を潜る迄のＦ子の決心は宿直の多くの警部の前でグラグラと破壞された。羞恥を通過した口惜しさが一時にこみ上げてバラバラと涙が轉げ落ちた。

警官の夜を泳ぐ女に對する侮蔑と興味の瞳は彼女の哀傷のポーズに同情に轉換されるこつを已にF子は知つてゐた。

たゞ日限の減少を——放免を——病軀の夫を一人置けない心配がF子の全身に漲り溢れてゐたから。留置所の夜は、靜寂そのものだつた。が靜寂の天地に高い鼾をたてた女土方の頭が轉つてゐた。

赤黒く染つた亂杭齒が地震の燒跡の建物の樣に鬼氣を帶びた——

—それを天井に向けた口の廻りに青蠅が飛び廻つてゐた。

女土方の安眠の姿は幼兒の崇高さを持つてゐた。薄暗い電燈の影に默念と坐してゐる土色の女は哀愁に泣き爛れた瞳を彼女に射た。

彼女は人生の幸福といふものに一指も觸れた事のない程窶れて、枯れてゐた。たゞ饒舌家の特有な無智な唇が彼女を派手に見せた。

「波止場のワイヤーロップに死兒を繰りつけた」

曳かれて來たのが奇蹟位に警官の殘酷を呪ふ口吻を含んでゐた。

「骨を見るにしのびない、出帆の船が永遠に死兒を水葬にしてくれる」——だらうといふ風に物語つた。

F子は無智な女の饒舌を笑ふ勇氣を持たなかつた。いつかは嬰ふ骨壺の夫を見るに忍びなかつたから——

雜多な犯罪を包藏するペンキ塗の豚箱の中にも、かうまで悲慘な眞劍な、死兒に對する愛情が釀されてある。

「赤ん坊は最後にわたいの顔を見てえらうなきました。死んで行くんで聲を聞かしたんやらうと思ひまんね、今でも耳の底から離れまへんのや」

女はさめぐ\と泣いた。女の愛兒への心理はF子の死生を彷徨する夫への愛情心理と何の懸隔があるだらう？

F子は未知の女の吐き捨てた悲哀をその儘に拾ふ自身の影を見た。

「俺は死なないぞ、お前の空氣を呼吸する間は……」夫の一言一句が彼女の身邊にさうかうと彷徨つた。

女は何かまだ饒舌つてゐた。

「俺の肺菌を撒布するのだ」

「血だ、血だ、迸り出る鮮血!!」

F子は無意識の中に大聲にかう叫んだ。奇怪な豫感が脊を匐つた。

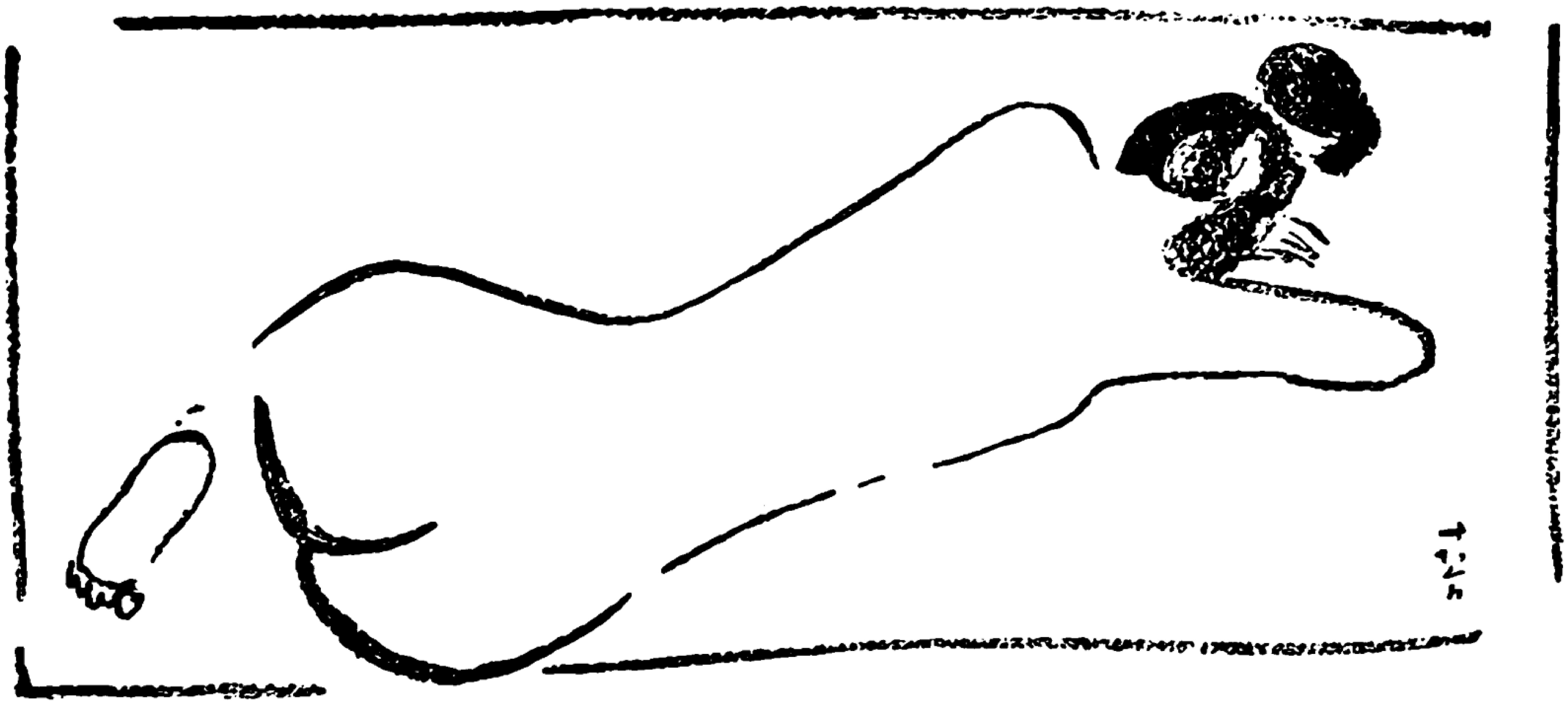
「もう歸つて來まへん、赤ん坊は死んでしまつたのやさかいなあ」

女ははつきりかう言つた。

「死んでしまつた、さうだ、もう夫は歸つて來ない、私の魂を追ひかけながら」

F子は女の次に吐き出される言葉を自分の不幸を的中する豫言者の樣に恐れた。

「碎けろ」F子は心に呟くと壁板に頭をぶつゝけた。



前號略筋

第一場　歸化人登弭、密使の途中妻の許に立より密書を失ふ。
第二場
第三場　登弭の隣人久禮の密告により、新羅軍日本軍を夜襲する。
第四場　捕虜となりて甘美媛、大葉子、登弭の家の前を過る。登弭、久禮を殺す。

甘美媛（五幕九場）

——又は業火の洗禮——

時雨

第五場

新羅軍の砦の一部。

敵將の前に、捕虜となつた瓊竹、士官等と引摺られてゐる。一人伊企儺は傲然と突立つてゐる。（時刻は前場とおなじころ）

新羅將軍　（伊企儺に）黙れ、どうあつても降伏せぬならせぬでよい。雜言はやめにせい。

伊企儺　では言ふまい。捕はれた上は、潔よき死を待つのが日本人の願ひだ。

新羅將軍　廣言を吐くな。晝の合戰に、降伏の合圖をしたものがあるではないか。

伊企儺　尻の穴のせまい奴どもだ。（笑ふ。そして肅然と）日の本では白旗は淸淨なものとする。神の齋に用ゆるのが白い旗だ。卑屈をきらふ神國の民は、降伏の旗などの用意はせぬ。汝らの眼に見えたのが白旗ならば、勝軍の軍神をまつるために、不淨を拂つた白旗なのだ。

伊企儺ふすぼつた憤りに瓊缶を睨む。

瓊缶靑ざめた面を伏せる。

新羅の士　（瓊缶を指さす）その若き將軍に聞け。たしかに降伏したのだ。汝のいふことは詭辯だ。

伊企儺　（叱るやうに）だまれ！　さうでなくば、兵卒の干した褌だとでも言へといふのか。

新羅の士　（激して）閣下、此奴を斬れと御命令下さい。

新羅の卒たち傘を開げたやうに、伊企儺を取卷く。
日本軍の士官たちも（瓊缶一人を殘して）繩しめられたまま氣色ばんで立上る。
險惡なる爭氣のただなかへ到着した大葉子は、甘美媛をかばふやうにして立ち、その光景を讀んで、一足進み出て伊企儺に微笑をおくる。

甘美媛は俛首れてゐる瓊缶を見出して、釘をうたれたやうに立すくみ、戰慄をかくす。

新羅將軍　（二人の女に凝と眼をとめ、優しく）その方は誰だ。

大葉子　（甘美媛を圍ひながら）調の吉士、伊企儺の妻大葉子。

新羅將軍　（覗くやうにして）その後にゐる女は？

甘美媛　――――

新羅將軍　顫へてゐるな、恐怖なくてもよい。もつと前へ――顔を見せてくれ。

伊企儺を取卷いてゐた新羅の士官の一人が、甘美媛に近寄つてくると、甘美媛は毅然として面をあげ前に進み出る。

新羅將軍　お前は――誰の娘だ！

新羅の士　その女は、敵軍の副將河邊の瓊缶の妻、甘美媛だと申します。

新羅將軍　――――

命令を待つ士卒等　伊企儺の所分はいかがいたします。

新羅將軍　――――

他の將　命令を待つてゐます。伊企儺を――

新羅將軍　（それを壓して）伊企儺の妻、お前は夫を助けやうとは試みないだらうか？

大葉子　天祐によつて、全部のものが揃つて救はれるならば知らず、この中で、夫だけ一人を助けやうとは思ひませぬ。

新羅將軍　伊企儺の考へはどうだ。その方の命も生かし、妻も助ける工夫はないか。

伊企儺　（嘯く）

新羅將軍　（手をもつて士卒たちを退しりぞけて）お前の妻に、汝の命乞をさせてはどうだらう。女に手柄をさせてやる氣はないか？

伊企儺　（諧謔に）狼が狐に化りおつたの。（冷笑する）何を巧らんだか知らぬが、目的通りにはゆくまい。

新羅將軍　（瓊缶に）副將はどう思はれるな。

瓊缶　（胸にのたうつ複雜な苦悶に眼を閉ぢてゐる）

甘美媛　（焔を吐く眼で、喰ひつくやうに敵將を見詰める）

新羅將軍　（投げた針の綱を繰るやうに狹く）若き勇者よ。と言つても貴下は、余が貴下を侮蔑して言ふのだとは聞かれはせまい。又そんな風に余の言葉が、すこしでも響いたら許していただきたい。余はいま、他意なく貴下に語らうとしてゐるのだ。およそ戰に勝つ負けるといふ事は、その指揮者の善惡を定めさせるものではない。寧ろその部下や、或はまた別の事で、仕よい戰と仕にくい戰ひがあるものだ。それはそれとして、余は年少の畏友として貴下に敬意を示してゐる。最前からその意志を發表したかつたの

だが、機會がなかつたから遲れながら今言はせてもらう。余は身に思ひくらべて、力極まつて捕はれた若き將軍をお慰めする。それは何故なら、將たるものでなければ知ることの出來ない苦勞を知るからだ。軍を指揮し總るものの苦心は、軍を指揮し、全てを總るものでなくては、量り知らない共通の胸を持つからだ。調の吉士の勇などは、畢竟餓虎の勇ともいふべきで、副將としては、ああした無謀な考へは捨てなければならない。捨ててよい命と、さう無雜作に捨ててはならない命とがある。——そこで、まさかに重い責任のある副將が、女一人のために生命を輕く投出されもしまいと考へるが——女を賣られてはどうぢやな。といふより、女に手柄をさせてやられたらどうぢや。余は矛を手にとらぬ者を打つ氣はない。互に都合のよい交換條件で、女共も無事に生かしておいてやりたいが——余は平和ずきだから、なるべく穩便に結局をつけたいが——(露骨に)女を賣れば、貴下は助かるのだ。

伊企儺　聞くも汚れだ。副將は左樣な答へはせぬぞ。

新羅將軍　(動搖を隱しかねてゐる瓊缶に)　女か！　副將の任務か！　貴下の命だ。

瓊　缶　(激しく戰慄する)

甘美媛　(魂をこめ、瞳のハヂケ出るほど瓊缶の答へに注視する)

新羅將軍　賣るか？

伊企儺　(叫ぶ)　無益だ。はやく斬れ！

新羅將軍　喧しい、彼を斬れ！

伊企儺　(憤怒に睨返して)　寄ると蹴殺すぞ。我等は殿りだ。女共を引け。

他の將　喚かせるな。引いてゆけ。

伊企儺　うぬ、金輪際此處は動かぬ、石と化つてもゆるがぬぞ。

鬪爭、怒號、蟻がものを引き運ぶように、多數の士卒寄固まつて伊企儺を引いてゆく。

大葉子は夫の方にも心を引かれながらも、甘美媛を守るを身の勤めとし、瓊缶の答へを監視する。

瓊　缶（何か言はうとして、敵將と凝と見合つた眼を力なく伏せ、俛首れる）

新羅將軍（欣々と）賣るか！

甘美媛（魂が拔けたやうに大葉子に倒れかかる）

新羅將軍　話はそれで濟んだ。――この男の縄を解いて送り出してやれ。

他の將　いや、まだ女は完全に閣下のものではありません。縄を解いたら、何をするか油斷は出來ません。

新羅將軍（態度を變へて）尻尾を垂れた犬だ。吼ついたとて怖れるに當らぬ。放還してやれ。

瓊　缶（甘美媛を見ないやうにして立上る）

大葉子（立閉がつて）この奴どもに、貴下は愛妻をお賣りなさるのですか。鬼畜でも出來ぬ業です。お！閣下のお手は自由がきく、何事でも出來ます。さ、あたくしの縄を斷つてください。（甘美媛を引寄せた敵將を目で指さして）あれを見ても閣下は魂をきざまれませぬか。媛は死ぬより愁い苛責にあふのです。閣下はそれでも生伸ようとなさるのですか。

瓊　缶（石のごとく默す）

甘美媛（死面のごとき顔をあげて、瓊缶の答へをきかふとする）

瓊　缶　おゝ、甘美媛！（うめいて兩手に面をおほひうづくまつてしまう）

甘美媛（連行かれる一足づゝにも振かへつて、猶瓊缶の答へを聞かうとする）

大葉子（甘美媛の後を追ひかけ引倒されながら）外道め！人畜め！その哀れな姿を喰ふのか！（起上り、反對の方に行きかける瓊缶の背に罵りかける）天魔に魅られた哀れな奴。日本男子の名にも恥ぬか。（引もどされて足摺りする）

他の將（甚く大葉子を突き倒す）軍人が命を惜むのも不見識だが、女子が強いのも困つたものだ。結局あの女子が一當利口かもしれない。（卒に）この女は此處へつないでおけ、その捕虜は城の外へ出してやれ。（去る）

瓊　缶（蒼踉とよろめき歩みだす。憂欝狂のやうに呟く）余はかうするほかはないのだ。余も生ることが出來るし、媛の命もたすかるのだ。新羅の男とて鬼ではない、人間だ。美しいものは大事にする――彼等の手にあづけておいて、二人の命が救へればよいではな

いか──余は生伸るだけ生伸たい。（大葉子にいふやうに）──貞操がなんだ。心を汚さなければ生命を破さない方がいいにきまつてゐる。良人の生命に代へられゝば、そんな高價い、立派な、見上げた貞操はありはしない。（さめ〴〵と泣く）

大葉子　（憤りに語つまつて、瓊缶の肩に嚙みつく）

瓊缶　（痛みに心附いて　呆やりと顏を見る）伊企儺の激しい氣魄をよろこぶなら──伊企儺の仕方を壯なりとして一緒に死ぬがよい。誰もが愛してゐる者の心通りしたらよいのだ。──行かせてくれ大葉子、お前は幸福だ。大葉子にはそれが幸福なのだ。──だが、甘美媛は、甘美媛は　　惱ましげに頭を抱へる）

大葉子　閣下は、傷みにお心を食はれませぬか？

瓊缶　蝎が食つてゐる。魂にギッシリと嚙みついてゐる。──大葉子、お前は幸福だ。だが余は死ねない。生られる方法があれば生てゐたい。

陰で淫な笑聲や樂の音が亂がはしくきこえる。

瓊缶耳をおさへ激流に押流される者のやうにのめりながら去る。

大葉子　（極度に昂奮して）神々！──ああ、あれを聞いても見捨てゆくのか──おゝ神々！　かよわきものの上に應護垂れ、救はせたまへ。あれほどまでに夫に盡す、貞節な女人を、清淨無垢に守らせたまへ。人食鬼の餌食とならぬうちに、奇瑞を示し、冥加をおあたへ下さい。──ああ、まだ奇瑞は現はれないか──奇蹟はないのか！　なんといふ悪い星の下に媛は生れたのだ。あの業火にも燒けもせず、滅びもしないでこの悲しみを見るとは──ああ、ああ！　何故あの折に殺してやらなかつたのだ。なぜあたしは氣が弱かつたのだ。あの折に刺殺してやつたら──善根だつたのに、慈悲だつたのに──（悶絶する）

第六場

岩の中のある一部。

荏に露茂く、蟲の音降るごとし。くまなき月に照らされて、男子一人大石に腰をかけ、空を見上げてゐる。

新羅軍の若き卒忍び出て來る。

卒　わしにはあんな酒はどうしても飲まれはしない。可哀さうに、あの女はどうしたらう。戰はまだしもだが、あんな厭な眞似は見たくもない。――ああ厭だ、いやだ。今夜ほど厭だと思つたことはないな、逃出してしまいたくなつた。（男子を見て近寄つてくる）此處に居たね、お前を逃してあげやうと思つて探してゐたのだ。――あの月のある方へと、眞つすぐに行けば、お前の方の軍隊がゐるだらうよ。此岩さへ脫出してしまへばなんでもない。お前はまだ幼少いから、這つてさへゆけば人間だとは思はないから、誰も咎めはしないだらう――なせ首を振るのだ。

男子　獸の眞似をして逃げだすのはいやだよ。

卒　さうかなあ。（考へる）お前の親たちも强いねえ。どうしても降參しないのだよ。いよ〱殺されるらしい。

男子　頼むから其處へ連れてつておくれ。

卒　（吃驚して）殺されるところへか？

男子　（頷く

卒　では、どうしても逃げないといふのだね？　俺はお前を助けたいのだよ。どうしても助けたいのだ。頼むから逃げておくれね。（男子の肩や頭を撫でる）こんな晩には思出してしようがないのだ。あたしの鄕里はずつと遠くなのだが――あゝ雁が鳴いてゆくよ。こんな晩には俺の方ぢや、みんなして河つばたで砧を打つのだ。トン、トン、トンて――弟の奴、丁度お前ぐらゐなのだ。俺たちは親がないから――だから、お前は殺させたくないや。

舅子　零れてくる涙をかくしながら）でも、僕だつて、獨りぼつちになつてしまふもの、僕だけ生きてたつてしようがないや。太陽の出る時に殺されると都合がいいんだけれどな。（希望をもつて）ねえ君、日輪にむかつて死ぬと、生れた國へ還られるのだよ。

卒　そんな分らないこと言ふな。一度死んでしまへば、生てなんぞ還られるものか。

舅子　だつて、這つて逃出しては恥辱だよ。日本の男子の子がみんな笑はれるから、だから斷はる。

卒　（解し得ない怒りに）强情つぱりめ。そんな分らない事をいふのなら、死んぢまうがいい。

舅子　――――

卒　お前が斬られるのを見るのは嫌だ。――俺は逃出してしまはう。だがなあ、さうすれば、俺はまた今夜のことが忘れられないで、お前のことばかり思ひ出すのだ――俺つて奴は、みじめなほど苦勞性なのだからなあ。

舅子　思出してくれたつて、生てやしないよ。――もう行くの？

卒　そりやあ、何時までも居てやりたいけれど、目附けられたら、俺の方が殺されてしまうからな。

舅子　では左樣なら、親切にしてくれて有難う。

卒、草原に這ひかくれながら、諦めかねて凝と舅子を見詰る。舅子も凝と見る。

舅子　去つておくれ、お前が來てくれてからかへつてさびしくなつてしまつた。

卒の影芒に沒し去り、草の戰ぎもしづまると、舅子石の上に伸上つて見送る。

殘忍通り魔のように、陰慘たる影を落してよぎり行く。

卒三人、炬火をかざして舅子を探してくる。

卒　居た、居た。よく逃げださなかつたな。

卒二　さあ來るのだ。俺たちと一緒においで。痛かつたらう、今のうちだけでも繩を解いといてやらう。

卒三　おとなしい子だ。――なあ、みんなさうは思はないか？　もしかして、この子が言つてきかせたら、あの頑固な親父も降參するかも知れない。な、いいか、お前親父に賴んで見ろな、親父が降參すればお前も助かるのだからな。

卒二　こんな幼少(ちひさ)いもん、なんの咎もないんだからな。

卒一　さうだとも、此奴がうまくやれば、屹度助けてくれらあ。

卒三　な、さう言へよ、いゝか、うまく頼むんだぞ。

（舁子を連れて卒たち去る。月傾きそめ、大葉子、甘美媛を救ひ出し肩にかけてくる。）

大葉子　（死體のやうに土に横たはる媛を凝と見て呟く）業の深いあたしはまたこんな悲しい目を見てしまつた。……あたしも甦へつて怨めしいが、あなたもなぜ生てゐて下さつた。舌を嚙んでも死ねるものを！　死んで生るといふ事が、たつた一つの取る道ではなかつたでせうか。あなたはあなたの最後に、たつた一つ殘された、大切の救ひを忘れておしまひなさつた。

甘美媛　（うめく）瓊缶は歸れたでせうか、無事に行かれたでせうか。

大葉子　何故あなたは刺殺さなかつたのです、なぜ殺さうとなさらなかつた。

甘美媛　振りしぼる蟲の音に、呼ばれたやうに立ちかかつて昏倒する）

大葉子　――あ、あたしはなんといふ邪見なことを言つたのだらう。惡かつた、わるかつた。――こんな悲しい女(ひと)を責めるなんて、たつた二人の女同士ではないか――でも、でも、どうぞこのままで、このままであつてくれ。あ！（絶望して）また息をしてゐる。こときれた顔は、汚れをしらない少女のやうに美くしいに――生返つたらどうなる。刑罪の場(には)で、恥知らずの男共の賤しい眼で眺めさせたり、はづかしめさせたくはない――お！　邪見の慈悲で……（舁子の縛を解き捨た繩を拾ひあげる）

甘美媛　（這つて逃げながら）あたしは生きて耐(こら)へるのだ――死にたくはない、死にたくはない。（弱々と大葉子の腕に縋りつく。しかし氣は鋭く）あたしは生てゐたい。あたしの苦しさより瓊缶の苦しみが、どんなに切ないかあたしは知つてゐる。どんな業苦も瓊缶に逢ふまではしのがなければならない。魂だけでも生ながらへて、瓊缶の傍へ歸らなければならない。

大葉子　その――その、そんなになつた身で、古鄕へ歸られるとお思ひですか。

甘美媛　いいえ、業火(ごふ)に燒け爛(ただ)れるは表皮(うはべ)ばかりです。どんな火に卷かれても、眞心(まごころ)の泉は涸れはしない。切ない、堪へきれない苦惱(くるしみ)を

うければうけるほど、心の眞淸水(ましみづ)は、澄みにすんで迸しります。あなたは知らないのだ、あなたは知らないのだ。それが生る力ではありませんか！　あなたには分らない、あなたは人を戀したことがないからだ。この苦しみの中にあたしの貞操(みさを)は輝いてゐる。あたしの生命は光つてゐる。

大葉子　――

甘美媛　（這ひながら草の露をむさぼり吸ふ）

大葉子　ああ！　蛇だ――（眼を被ふ）淺間しい甘美媛、それでも生てゐたいのか！　妻を賣る男がなんで苦しんでゐよう、あなたは犬のやうに生てゐたいのか。

甘美媛　（凄く笑ふ）幸福(しあはせ)な女(ひと)、幸福な大葉子！　犬のやうなあたしを――蛇のやうなあたしを澤山罵しるがよい。あたしがもしお前だつたら、あたしだとて笑つて死ぬ。死ぬのが怖しいのではない、死ねないのだ、死ねないのだ。（激しく〳〵泣く）

第七場

砦の他の一部。
外塀の外側は塹濠になつてゐる。
東雲の色漂ひ流れ、朝暾空にたなびき動く。
鷄の聲。
靜けさを破つて號炮の合圖。伊企儺をさきに大葉子、男子、刑場に導かれてくる。新羅の將軍は甘美媛を抱いて着床する。

新羅將軍　他の者はもうかたづいたさうだ。お前方の刑に立會つてくれと部下がいふが——調の吉士、すべてを拒絶した貴下をも、我軍は心寛く、勇者としての最期を遂げさせる事にした。

伊企儺　（從容と）丁重な用意と見受けます。

新羅將軍　感謝されるのは當然なことだらう。そこで申渡すことがあるが、聞入れるか？

伊企儺　——

新羅將軍　（傲然と）東方に尻を向け、「倭の王わが尻を啗め」と言へ。

伊企儺　（莞爾として、濶達に）承知した。——舅子よ、空明らむ方が東方だぞ。日東、即ち日出づる國、日の御子のおはします方角だ。いまこそ太陽に還れる時と思へよ。父の仕方をよく見習つて、決して惡びれるな。

舅　子　（力強く頷き、恍惚と父親を仰ぐ）

伊企儺　（壘の上に立ち、東にむかつてうやうやしく頭をさげる。背を敵將にむけたまま尻を突出して叫ぶ）新羅の王、わが尻の肉を食へ！

（言終つて空に口をあけ哄笑する）

將卒等壘に躍りあがつて、争つて伊企儺を刺す。伊企儺、劍槍を東に掴んで塹壕に躍り込む。

騒然たる隙を狙ひ、舅子も壘に駈上り父の如くする、

舅　子　新羅の王わが尻の肉を食へ！

將、塹壕へ一刀に斬り落す。

大葉子靜かに歩みながら、甘美媛に最後の凝視を與へる。

旭日昇る。

大葉子外壁に立つて、東にむかひ振巾をふる。

卒たち、刀を振りあげ、槍をかまへて息をのむ。

甘美媛　（激しく戰慄きながら反抗して呟く）生きるのは——生きるのはもつと愁い。（目の前の暗くなるのを耐へやうと努力する）

第八場

陽春。

若草山の麓、八重櫻一本たわわに咲いてゐる。

空に百鳥の聲。

被りものに面をかくした女を取りかこんで、童たち。（翁媼も立交つて）空を見上げてゐる。

男童　あれあれ、あんなに悦んで飛んでゐる。

童二　あつちの方へいつて、木の枝にとまつた。や、草の中にもをりた。

童三　嬉しさうだなあ。

女童　ごらん、ごらん、みんな見てごらん、あの櫻にも止まつてるよ。

女童二　いい聲で囀つてゐるね。

翁　ほんとに嬉しさうだ。鳥もよろこんでゐるに違ひないが、このまあ子供たちの樂しさうなこと！　なんの心願か知らないが、毎日毎日かうして小鳥を放さつしやる。

男　あの女子さんなら毎日見かけますわ。今日この邊でやれば、明日は向原の寺の邊でといふふうに、こんな事ばかりしてますわ。氣狂ひぢやないかといふてる人もありますわ。

女　生魚を放してやるのも好きで、あの女の姿を見かけると、生魚を賣りに出るものもあるのです。

媼　寺院（てら）の佛もおがまつしやるだろか。

男　それがさ、ついぞそんな事は見ませんな。

若い男　それは不思議なことだ。佛に歸依しないで、ただ、生ものを自由にしてやつたからとて、それではただの樂しみだけで、あの女が毎日〳〵一心になつてやるだけの理由がないではないか。

媼　それはさうとも、こなたの言はしやる通りぢや。あのお方はなんで佛さまをおがましやらぬのかの。佛の供養をしないで放生さつしやつて、何を頼まれる心願ぢやらう。

翁　氣狂ひかな？

男　氣狂ひなら、おとなしくていい氣狂だ。

翁　ほう！　あちらから來るのは手彦さまだな。

媼　ほんまに、國造りの手彦さまぢや。あの人はよい衆にお出入りして、とんと出世をなされたな。

翁　仲人役に立つては德をおとりなさるお人ださうだ。今日もよい輿に引き添ふてござる。大臣がたの姫君であらう。

若い男　あいつは虫がすかない、見るのも厭だ。（去る）

　手彦、女輿の中に話しかけてくる。

手彦　なるほど、此邊へくるとおびただしく小鳥がをります。——これは勿體ない。どうかしたら捕れさうなものだが——

男童　あんな事をいつてらあ。折角逃がしたものをとらうとする、狡い奴だ。

童二　ばかな人だね、小鳥は翼があるものね。これだけみんな捕れるものか。

女童　こわいよ、そんな事いつて、あの人官人だよ。

童三　（被衣の女に）行きませうよ、池の方へ行きませうよ。

童一　これを放してやりませう。（腰にさげた龜の子を見せる）

女童　あたしも持つた來たのよ。（懐から包んだ小龜を出す）

童四　おれは鮒をもつてる。（小さい魚籠を見せる）

女童　さあ、行きましよ、行きましよ。

童たち（被衣の女を押したり手を引つぱつたりして）さあ、行きましよ、さあ行きましよ。（唄ふ）

猿澤の
お池の鮒が
さくらがちると
餌かとおもつて、
あつぷ、あつぷ、あつぷ。

猿澤の
お池のなまづ
みんながゆくと
あわてて逃げて、
あつぷ、あつぷ、あつぷ、あつぷ。

童たち被衣の女を押して唄ひながら去る。

嫗　行つて見ませう、お出なさらぬか？（連立つて去る）

手彦（女の後影を懷かしさうに見送つて）不思議なことだ。そんな筈はないが——（氣が付いて輿の者へ）ちよつと余はお供にはづれる。一足さきにお連れもふしてくれ。——どうも不思議だ、もの腰はさうに違ひないが、もし生て歸つて來たとしたら面倒だぞ。

瓊缶（美々しく粧ひ、手彦を呼止める）手彦、手彦。

手彦　おう——これは恰度よかつた。其處で、大臣家の姫君にお逢ひなさいませんでしたか？

瓊缶　逢つた。

手彦　それなら、その方が大切でしたのに——貴下まで此方へ來ておしまひになつては、あの方の御機嫌がわるいでせう。

瓊　缶　なあに、何時まででも持つてるといつたよ、あんまり大事にすると癖になるからな。だがお前、なにか見かけたんださうだな。

手　彥　それです、ちつと心にかかる代物です。

瓊　缶　何をまた、そんな失策をやつたのだ。

手　彥　それどころではありません。實は、たつた今、甘美媛の姿を見かけましたからです。

瓊　缶　甘美媛？　ば、ばかた事をいふな。あれが、なんで今ごろこんな場處をうろついてゐるものか。

手　彥　いえ、閣下は御覽にならなかつたからです。あの眼が――被衣の下から、凝と見てゐたあの眼！　あれは慥に媛です。他の者がなんであんな痛い眼で見るものですか。あたくしは、チクリと胸を刺されたようでした。

瓊　缶　（稍不安に）慥にさうだといふのか？　だが、どうしてまた歸つて來たのだらう。あんなに氣位の高い女が、あんな風なことで腐つた體で！

手　彥　ですからあたくしは、もう一度、確かりとよく見定めて來たいと思ひますのです。

瓊　缶　そんなにいふのなら、見て來てもらはうかな。さういふ事にかけて、人を見違へるような汝ではないから。

手　彥　だから嫌なのです。自信があるだけに不安心なのです。なんとも言へない激しい眼つきだつたのが、腹の底からブルブルとしたのですから――他にどうも、あんな眼附きで見られる覺えがありません。

瓊　缶　だが、一體どんなふうだつた、淺間しく零落てゐたか？

手　彥　そこです。昨日あの女の實家の、坂上の者たちに逢ひましたが、ちつともあの女のことなど言つてゐませんでしたし（首をひねる）決して昔のままだとはいへますまい。

瓊　缶　（氣まづく）それはさうにきまつてゐる。だが、いま現はれて來ては困るな。

手　彥　正夫人の候補者は二三人もおありだし、宮女の中にも情婦は澤山あるし　その他通つてお出のところは數知れずなのだから大變だ

瓊　缶　そんなばかを今言つてるところではない。そんな女たちはどうともなるとして、彼女が困るよ。（奥の行つた方へ指さす）面倒だからな。彼女をうまくしないと、大臣の方が睨むからな。余の失策もやつと帳消になつたばかりで、これから新らしい芽を吹

くやさきだからな。

手彦　ですが、あの女が歸つて來たとなると中々手强いでせうよ。や、こんな話をしてはゐられません、片つぽの手强いのが、待兼て覗察かたがたやつて來ました。――これはく、御用談が長引きまして……

蘇我の女　(遠くから)御用はまだ濟みませんの?

瓊缶　あとで邪魔をされまいと思ふので、一纏めに用を言ひつけてゐます。

手彦　もう少々で濟みます。あちらでお待ちくださいまし。

蘇我の女　お前には用はない、汝なんぞ待つてやしない。

手彦　只今からさう手嚴しく仰しやるのでは、このさきが思ひやられます。いや、こちらの事で――では、兎に角あたくしは用事をすませて參りませう。その上でお邪魔をいたします。

蘇我の女　邪魔になど來てほしくはない。

手彦　御意の通りお邪魔でございませう。もう貴女樣には、御不用になつた奴でございます。

瓊缶　これ、何を言つてゐるのだ。余に用事があるとしても、今日は逢ひたくないな、明日にしてくれ。なにもこんな、長閑な良日をむやくしい用事なんぞで邪魔をされたくはない。余は今日を姫と暮す。

手彦　御勝手にお暮しなさいまし。では邪魔者は夜分にでもお伺ひいたしませう。

蘇我の女　夜も汝へ貸す暇はない。

手彦　はいはい、ではどうとも御自由に――

瓊缶　では別れよう。だが、あの事はぬかりなくな。

手彦　さあ! そのつもりではゐますが――

瓊缶　またはじめたな、怒るな。

蘇我の女　(瓊缶の手をとつて)まあ、眉をよせて――なんでそんなお顏をなさるのです。こんなよい春の日に、あたくしとお步きなさるの

が、そんなに御迷惑なのですか？

瓊缶　そんな事はない、あなたの思ひ違ひです。

蘇我の女　いゝえ、お顔の色が冴えません。お煩さいかしれないが、そんなに悩ましげになさらなくつたつて——

瓊缶　あなたは思ひ違ひをして、勝手に腹をたてゝいらつしやるのです。好事魔多しといふ響に煩らはされてゐるのです。

（二人語らひながら去る。）

手彦　（クスリとして）その通り、世事萬端、とかく好事魔多しさ。（去る）

第九場

黄昏の鉸の小路。

被衣の女　（とんでくる飛礫に肩を打たれて立すくむ）

見えない聲　あすこへ行く、あすこへ行く。——やあ、石が當つたと見えておさへてゐらあ。

他の聲　やい、痛いか！　恥知らずめ。

おなじく　もつとぶつつけてやれ。あんな奴は土地に居られないやうにしろ。

同　泥もぶちかけてやれ。

被衣の女に激しく小石が飛んでくる。

見えない聲　わーい、わーい。なんだあの女。子供たちを瞞くらかしやがつて、——異國から疫病をもつて來た、恐しい女なんだ。あんな者を土地へおくと、土地に生ものが根だやしになつてしまうといふことだ。

他の聲　やつてしまへ、やつつけてしまへ、彼女は犬と交りをしてたんださうだ。

同　人間交りの出來ない女なのだ、獸の媾で疫病つかひだ。

盛に石が飛んでくる。籔の中から二三人の男が棒や竹ぎれをもつて出て來て、籔の道を女を追かける。

籔にかこまれた廢屋の前へくる。

破れた垣根から國造りの手彦がぬつと首を出す。

手彦　（大聲で）こら！　何をする？

男ども逃去る。被衣の女靜かに門内に入る。

手彦　亂暴なことをする奴等だ。お怪我はありませんでしたか。――ほう！　矢つぱり私の眼は違はなかつた。しかし、あんまり思ひがけなかつたので、昨日はこの眼の玉を疑がつてゐました。でも、どうも氣懸りでならないので、や、も、探したの探さぬのと、お後をしたつて一日中驅廻りました。そしてまあ、やつとの事で、猿澤の池のふちで、遊んでゐた子供たちから聞出して、どうにかかうにかまあ見當をつけたものの、こんな邊鄙なところに忍んでお出なさらうとは、ちつとも氣がつきませんでした。――だがまあ、あんなにお親しくした中なのに、なんとも仰しやつてくださらないなんて‥‥

甘美媛　それは、御挨拶をまだ申上げないといふ事なのですか、それとも、歸つて來たとお屆けしないといふお咎めなのでせうか。

手彦　まあさう仰しやるな、咎めるなんて、何事です。こんなに手前がしやべつてゐるのに、おゝ手彦かと、お聲もかけてくださらないお怨みなのです。

甘美媛　ああそれならば許してください。石が當つて身體が痛んでたものですから――以前のことならあんまり心が痛んで言ひたくないのです。以前の知己には逢ひたくも見たくもない。

手彦　ですが、それはあんまり、潔癖が強すぎます。私でさへ、もしやと思へばこんなにもお探しもふすではありませんか。まして――

甘美媛　（にこやかに微笑み、手彦の語るを待つてゐる）

手彦　――實はその、實は、その、なんなんで――手前が今日此處をお訪ねして、よくたしかめて見るといふことだけは申上げてはお

きましたが。

甘美媛　仰しやらなくても、あなたのお顏を見ると、瓊缶からの廻し者だと思ひました。

手　彦　それはひどい、廻し者とは、あんまりな仰しやり方です。

甘美媛　あたくしは昨日や今日歸つて來たのではありません。突然にあなた方の目の前へ現はれたのでもありません。もうやがて一月にもなります。毎日〳〵ああして、子供たちと遊んでゐますので、いろ〳〵と世の取沙汰もぞんじてをります。

手　彦　と、仰しやると？

甘美媛　なにもかも、よく承知してゐるのでございます。

手　彦　――――

甘美媛　昨日あなたがお供なされた女輿は、蘇我の大臣の姫君で、瓊缶の夫人になる方でござりませう。

手　彦　（逃出さうとして）違う、違う、ちがひます。

甘美媛　あたくしは、あの女の婚禮の日に、館へかへつて見やうかと思つてをりますのです。

手　彦　え？　それは本當なのですか。

甘美媛　僞造りの手彦。

手　彦　は、はい。

甘美媛　昨日あなたがあたしを見てから、あたしの躰へ石が降つてくるやうになりました。

手　彦　そ、そんなことは――

甘美媛　ないと仰しやるのですか。石は自然と投げられるとしても、あたしを甘美媛と知らぬものが、なんで人間まじりの出來ない、犬だと賤しめるのでせう。

手　彦　（持前の圖々しさと賤しさをさらけ出して）新羅の奴等は、親切にいたしましたか？

甘美媛　（憤りを押へて）あの人達は、かへつて人間です。

手彦　それはようございましたなあ。その事ばかりお案じしてゐたのですが——幸福なことでした。私どもはまた、彼奴ら食べつけない結構な代物をいただいたので、お體まで食つてしまやしないかとお案じしたものでした。う、へ、へ、から申してはなんですがよく手離しましたなあ。此方ではね、もう決してお歸りはあるまいと思つてゐましたが——

甘美媛　(ある意味をもつて)人を思つて此方の胸が一ぱいになると、先方の胸は空つぼになるものと見えます。

手彦　左様、そんな事もありませうな。

甘美媛　日本の土を蹈むまでは——この土地へつくまでは希望に生てゐたのですが……

手彦　(愚弄とも慰ともつかず)でも、親御様がお待かねでせう。

甘美媛　(風にはこばれて白い花片の舞ふ空を凝と見上げる)——枝を離れれば樹の飾りとはならない。まして汚れた花片をなんで求めませう。

手彦　(うつかりと)それはさうです。おなじことです。さうですとも！　いや、これはお心持ちをわるくしたかも知れません、いづれ、いづれまたお伺ひいたします。(若皇と去る)

門外の道で、早足に來る瓊缶と行逢ふ。

手彦　おゝ、よいところでお目にかかつた。どうも、我ながら拙いことを言つてしまつて——

瓊缶　で、どんな具合だ、余を怨んでゐるか？

手彦　とても上手です。御用心なさらないといけません。すつかり知つてゐます。あれは却て、なまなか隱すと事件が面倒になります。泣いて見せるに限ります。とても歸つて來ないものと思つたとかなんとか言はなければいけません。

瓊缶　甚くなつてゐるか？

手彦　顏ですか？　ところが、どうして奇麗です、昔よりさびしくはなつたが。

瓊缶　見苦しい様子か？

手彦　さあ、豐ではありますまいが——なんだか未練がありさうですね。

瓊缶　手彥、笑つてくれるな、余は逢つて見たい。あんなに愛した女だ。
手彥　で、どうなさらうといふのです。
瓊缶　話の具合で、内密でかくまつておく。
手彥　とてもいけません。どつちもこつちも、中々手強い代ものです。
瓊缶　いゝえ、彼女は屹度忍んでくれるよ、あんなにも余を愛してたのだから。それに、恩人だと敬へば、彼女は却つてへりくだるに相違ない。自分の身が、人仲へは出られない事を知つてゐやうし、今になつても變らない余の眞心を感謝するだらうから。
手彥　さう都合よくはゆきますまい。
瓊缶　何をブツブツ言つてゐるのだ。余は昨夜中そのことばかり考へてゐたのだ。今朝も朝廷に出ても、其事で頭が一ぱいだつた。どう考へてみても、あの女が余の爲に惡いことはしないだらう。
手彥　さうお思ひなら、行つていらつしやい。
瓊缶　お前は歸つておくれ。却てよけいな他人が居ない方がいい。
手彥　結構なお言葉です、有難くその如くに仕ります。
瓊缶　そんな癡娘のわるい顏をするな。骨折はあげるよ。お前のほしがつてゐた太刀と、寢間の世話をやいてゐるあの女もやる。たしかお前、彼女に氣があつたやうだ。
手彥　仰せの通りです。本當にあの女を下さいますか！
瓊缶　あげるとも！　甘美媛が歸ればあんな女はいらない。では行つてくるか、彼家か？
手彥　しかし、充分にお氣をおつけなさいまし。――そちらの方はどうゆくか知れませんが、一たん頂いたものはおかへしはいたしませんが宜しう御座いますか？　――さあまた忙しくなつてきたぞ、急いで運んでしまはないことには、閣下の方がうまく運ばないと、私まで失敗はいやですからな。（そゝくさと去る）
瓊缶　（遠のいてゐた從者を呼んで）その品をあの僧房へさしおいて、半町あまりあとに辻があつたが、あの邊に控へてをれ。

従者その如くして立去る。

瓊缶　（近づくほど歩み重く）　遅櫻ももう散るな。落花枝にかへらずといふが、悪い箴をたさなければいゝが――余の悪いせいばかりではない、この世にはあんまり女が多すぎるのだ。一人の男をとらうと種々な嬌態をして見せるから、目の前の強い刺撃には、つい良心も痲痺してしまつて、可哀さうな嫒のことを思ひながら、眞赤な舌で、蛭のように吸ひついてくるものを抱締めて、忘却した日を過してしまつたのだ。嫒の生死も、いつの間にか氣にかけないやうになつてしまつたのだ。

夕暮の鯨鐘遠く響きを傳へてくる。

瓊缶　――もう暮れるか？　それにしても、嫒はなぜ余の姿を見ても出て來てくれないのだらう。隠れてでもしまつたのではなからうか？（稍聲高に）わが本尊佛、慈顔の相を現はして、絶て久しき光明をわれに與へたまはぬか。

暫く待てど答へのないに、瓊缶縁に上つて手荒く破簾に手をかける。

瓊缶　甘美嫒、甘美嫒。なぜ隠れたりするのです。あたしがこんなに逢ひたがつてゐるのを嬲るのか？　さあ出ておいで、さあ！　余はもう堪へてゐられない、なぜ、なぜ、なぜ、そんなにじらすのだ。

昂奮して手あたりまかせに破簾をはづす。

甘美嫒は奥の屏帳の前に（舶載の貴重なる織物、沙羅双樹の下の佛陀伽耶降誕、又は地獄變相の圖など）朱の髹床にかゝり、清楚にて高貴なる粧装にて端然とゐる。

瓊缶　（瞳を輝かし）お！　人か、佛か――いえ、あたしの甘美嫒だ。懐しい燻香にも覺えがある。その薫りは甘美嫒のだ。いとしい女！　なぜ寄つてはいけないのです、どうして飛附いてきてはくれないのです。え？　怒つてゐるの？　便りをしなかつたのを怨んでゐる？　あの時のことを言ふのは嫌だから言はないのだが、余がどんなに恩としてゐるか、これ此通りだ。（跪づいて合掌する）妻にむかつて、こんなにまでする夫が迎ひに來たのではないか。これ、どうしたのだ、懐かしいといつてくれ、聲だけでも聞かせておくれ、え？　逢ひたくはなかつたの？　チエッ、氣の強い奴め、こんなにいふのにまだ憤つてゐるのか、余が忘れてでもゐたと思つてゐるのか。――それともお前は、面目ないとでも考へてはしないか、よし！　余はなんとも思つてゐないといふ

證據に、お前の足へ接吻してやる。（甘美媛の足をとる）なつかしいねえ媛！　お前はなんでそんな冷たい顔をしてゐるのだ。余でさへ嬉しくつて涙がこぼれてくるのに、お前の眼は乾ききつてゐるではないか。そして何一言いつてくれもしない。可愛いとも逢ひたかつたとも！

甘美媛　あたくしの眼が乾いてゐると仰しやいますか——懐かしがらないとおつしやいますか——お目にかかりたければこそ歸つて來たのでございます。

瓊缶　おゝ、可愛い女！

甘美媛　まあお手をゆるめて下さいまし。あたくしは、あなたも待つてゐてくださること〻思つて……

瓊缶　あたりまへです、分りきつたことだ。もうそんな分りきつた事は言はないで、めでたいこの再會の欣びに、二人だけで祝はうと思つて、酒をもつてきた。さ、も一度妹背のかためをするつもりで、生返つたよろこびの盃をあはせようではないか。（酒器をもつてくる）さあ、余が酌をとらう、お前から口をおつけ。——なんで盃の中へ涙をこぼすのだ。涙を飲みあふのはいやだ。新らしくつがう。（盃をあけて新しくつぐ）また泣くのか！　も一度新らしくして余から飲まう。——以前（もと）の甘美媛に、男にかうして手酌などは、忘れてもさせなかつた優しい女だが——まあ好い、自分で酌いで、も一つ重ねて祝ふとしよう。余は醉うよ、なぜといつて、一度失つた珠玉がまた手に還つたのだもの。ねえ甘美媛、こんなことは互ひに口にしたくないことだが、氣にもなるから聞くが、あの新羅の奴はお前を歡んだか？　優しくしてくれたかといふのだ。これからは余もまけずに優しくするよ。お前には以前から目のない男だからなあ。現に今だつてさうだ、他の奴の手に渡つて來たからといつて、ちつとも心持ちは變やしない。これからの一生は、不自由なく、豐に、安樂に過させるよ。ね、よいか、此處が大切なところだ。お前の一生は屹度保證するから、安心して余に寄りかかつてゐておくれ、だが、たゞ、ちつとばかり譲歩してもらはなければならないこともあるが！——そんな事はあとでいい。こんな嬉しい時に言はずもだ。

甘美媛　——————

瓊缶　ねえ、甘美媛、余は今夜此處へ宿るがいいかい？　ははは、何を言つてるのだ、余も隨分遠慮深くなつたものだ。自分の妻にこと

はることもないに、は、は、は。――此處はどうも非常に閑寂で、人目がなくつて、別莊にはもつて來いのところだ。當分お前の館として此處を修繕させよう、見違へるやうに綺麗にしなければならない。ねえ、媛、讓歩といふのはこのことさ。――これ何故そんな冷たい顏をしてゐるのだ。だが、お前は矢つ張り綺麗だねえ。余が――余が、心殘りしないと思つてゐるのか！（媛の膝を噛む）

甘美瓊　媛缶。

瓊　缶　おゝ　やつと呼んでくれた。懷かしい聲だ。ねえ媛、余はどうしてあの時お前を手離せたか、いま思ふと不思議でならない。

甘美媛　あたくしは大變思ひ違ひをしてをりました。

瓊　缶　何を言出すの。もつと戀しかつたとか、懷しかつたとか正直に言つておくれ。

甘美媛　鬼畜だと思つたものに却て人間を見たり、人だと思つたものに禽獸より劣るものを見ました。

瓊　缶　（顏を顰め）まあ好い、そんな苦い追憶なんぞは後にしよう。さ、おあがり。

甘美媛　（口に寄せられた盃を拂ふ）

瓊　缶　まだ怒つてるのか？　始來のわるい女だ。また泣いてるね。

甘美媛　自分の心の善良さに泣いてゐます。

瓊　缶　一々そんなむづかしい事をいはないで、さあ機嫌よくおし。口惜しがつたつて悲しんだつて、どつちの道もう過ぎてしまつたことだ、嫌な思ひは口にしない事と約束をしやう。それでも肝癪が癒らないなら余の頭を踏んでもいゝ。余はお前が人間への鬱憤に余の頭を蹴るのだと思へば猶可愛いい。ね、余はこんなにお前を思つてゐるのだ。案じることはない、余は盗まれた女だと思ふと一培お前が愛しい。もう決して離しはしないから安心しておいで。

甘美媛　あなたは容易く、さうお思ひになることが出來ますか。

瓊　缶　その他になにがある？　それともお前は、余の命をつないでくれた恩人だといふので、余の頭をおさへてゐやうといふのか。

苦い沈默。

瓊　缶　ついでだから言つておくが、お前がそれを武器にすると、それは却てお前のために良くないよ。女は心優しく夫に從ふものだ。さうさへすれば男には憫れみがある。決して見捨はしないから、自分の心から鬼を出してはいけない。御覽、お前のために髮の飾りや着るものを持つて來てあげた。

甘美媛　（眼しむ氣持をおさへかねて）夷から追放された女は、獸の皮か、木の葉でも着てゐるとお思ひになつたのですか？　それとも夜のお伽の色彩を添へさせようといふのなら、若い血と肉を盛つた、皮袋だけでよろしさうなものですのに。

瓊　缶　（呆れたやうに）なんといふ女だ。どれほどの女だと思つてゐるのだ。思ひ上つてはいけないよ甘美媛、それがお前の惡い癖なのだ。いつまでも女は若くはない。さういふ心懸けだと路途に迷ふよ。

甘美媛　（突然黃金を土のやうに撒く）

瓊　缶　（意地惡く）フン、それは新羅の情人の贈物かね。

甘美媛　（瓊缶に指さして）瓊缶、あたしが生命にかへた代物は、そんな安價なものでした。

瓊　缶　（憎々しく）なんとでも言へ、動機はなんでも、その黃金は貞操を賣つて集めたものだ。

甘美媛　黃金と名譽を愛としむ男を――そのまた黃金と名譽で女を蹈みにじる男を買はうと、その爲にわざ〳〵持つて歸つた黃金です。

瓊　缶　言ひ曲ればどうにでも言へるが、どう言つたところで、お前のやうな高慢女も、男に賣つた金でなくつて、ほかにありやうはない。

甘美媛　（ヒステリカルに）この腕を他人の枕にしたといふのか、さう思はれてもあたしは恥ない。この體を男の肉にしたといふのか、さう罵られてもいい。七面鳥の顏の色が七色に變るとて、鳥の魂も變色すると誰か言へよう。淚で白粉を解いたからとて、女の心までが彩られるものではない。黃金の兜と、鐵の鎧でかためたやうな男子の心が、七色にも八色にも變るのをあたしは見た。さうした淺間しい世の中で、此身を賣つて黃金を集めたとしてもあたしは恥ない。

瓊　缶　恥知らずめ、それが一度でも、河邊の瓊缶の正妻と呼ばれた女か。

甘美媛　――一度でも？　瓊缶どの、ではその黃金の出所を言ひませうか？

瓊　缶　分つてゐる。

甘美媛　お分りにはなりますまい。あの折、倭軍の副將が、見苦しくも置忘れたまま逃げた、軍用の黄金でございます。
瓊缶　あ！（急に拾ひあつめ、甘美媛の背に手を廻す）
甘美媛（瓊缶の手を拂つて悲しく）烙印は二人とも捺されました。あたしは心に、あなたは額に！　――ああ、幾冬、幾夏、かうまで荒れすさんだ心への肥料に、あたしの貴い血潮はしぼりつくされた事か――可哀さうなあたし！　こんな心の故郷とは知らないで、幾夜焦がれて泣いたか知れぬ。（激しく泣く）
瓊缶　甘美媛、もう一度どうぞ考へておくれ。
甘美媛　あたしの心は盲目でした。貞操とは自分の心に齋く神なのに、他人のために守るものと思ひちがへてゐました。いま漸く明らかに心の目が開きました。――あゝ月が昇つた。思へば三年、歸つてからでも一月ぶり、いまはじめてこんな美しい月を見た。
瓊缶　媛――
甘美媛　左樣なら瓊缶さま。
瓊缶　どうしても怨んでゐるのか？
甘美媛　いゝえ、それどころではございません、あなたがあつたからこそ、美しい夢を見てあの愁さがしのげたのです。
瓊缶　ではお前、どうするのだ。
甘美媛　夢がさめれば、消た生命を盛つた體は腐肉です。腐肉は飢た犬でもよろこびますまいが、腐りつくしたら眞砂の芽はふくかもしれません。（被衣をとつて外に出てゆく。）

――終りの幕下る――

婦人彙報

▼市街自動車の女車掌の演說

市電自治會自動車部の運轉手と女車掌五百人は、七月二日待偶改善に關する歎願書を提出したところ、市電側の回答に甚だしく誠意の缺くところがあつたために、大いに憤激して提出委員の報告演說の後につゞいて、自動車や机の上に上つて交々戰鬪的な熱辯をふるつて「總罷業を行へ」と叫んだけれども、幹部の說得に從つて一時おさまつた。口繪の寫眞はその折の女車掌の一人が演說をしてゐるところであるが、彼の女達の熱烈な眞劍な態度がうかゞはれる。

▼婦人俸給者組合の組織

社會民衆黨に屬する社會婦人同盟では、婦人事務員、タイピスト等などを主にして、婦人俸給者の組合を組織する計畫を立てゝ、直ちに委員を上げ運動に着手した。その主要目的としては、知識階級婦人を目指して、婦人サラリーマンの社會的地位の向上と、待偶改善に盡すと云ふ。

▼「結婚の自由」爭議

東京モスリン會社金町工場の女工さん達は結婚の自由、其他について會社側と種々折衝を重ねた末に、結婚の自由を認め、食事は漸次改善といふことになつて、女工側の勝利に解決した。現代に於いて對社會的問題として、結婚の自由云々は一般人には奇怪な話に逆ひないが、女工を主とする會社では女工が結婚すると自然寄宿舍を出て通勤となることを嫁ふ傾向があるために今度の問題が起されたもので、その事實は東京モス會社のみに限らないのである。

▼農民婦人組合運動

農民自治會婦人部では、高群逸枝、竹内政代、中野妙子、桑島藤枝、鐘田貞子、松本正枝女史などが委員になつて、「米を作る者に米を食べさせよ」と云つて、一つの運動を起すことになつた。現代の農民の生活が如何に悲慘であるかは、おそらく想像以上である。自分達が汗水流して耕作した米すら腹一杯食べることをゆるされない有樣である。そこで先づ衣食住の改善を行ひ、服裝は上品でさつぱりしたものに、食物は自分達の手になつた材料を工夫して簡單で榮養ある美食をとるやうに、また娛樂所の設計やら、村の因襲的な交際を充實した會や、組合にすることなど、まだ自治會の組織されてゐない村には、女だけで話し合つて團結しようといふのである。

▼アナ系婦人の思想團體

故大杉榮氏の令妹大杉あやめ女史、中村しづ子、川口春江、望月百合子、高群逸枝、秋月靜子女史などが集まつて、アナキスト婦人の思想團體をこしらへる準備にかゝつてゐる。本郷の勞働運動社を本據にして活動する筈であるが、同團體は會員個人の絶對自由を尊重し、個人の自由な聯合團體にするといふ。

▼左團次の案内役

左團次渡露について、彼地に於ける一行の案内役は、大使館書記官スパルウヰン博士の愛弟子、テルノフスカヤ孃ときまつた。孃は大の日本新興文學通で、江口渙氏の「戀と牢獄」を露都で飜譯出版し名聲を拍した事は人の知るところである。左團次の演ずる歌舞伎の筋書を、國民性の異るロシヤ人にわかるやうた飜譯するのだからなか〳〵骨が折れるが、見事にやりおほせて五萬部の印刷に付しこれを携へて歸國する事になつた。

▼產兒制限研究委員會

人口食糧問題委員會では、藤村委員長以下各委員が集つて、七月十三日特別委員會を開き、產兒制限と優生學について研究した。その項目左の如し。

一、產兒制限の是非に關する世論の傾向
二、產兒制限國際協議會に就て
三、各國に於る產兒制限の趨勢
四、我國に於ける產兒制限運動現況
五、產兒制限と優生運動
六、優生學上ある種の法律的宣傳に依る制限をなすの是非
七、產兒制限を人口問題の解決として提唱すべきや否や
八、產兒制限を根本的問題としての是非は別として現在の相談所、產兒制限の方法、販賣の器具藥品等につき或種の取締りを必要とするや否や

▼再婚婦人の結婚心理

青山の社團法人壽慶會へこの一年間に申込んだ再婚婦人は六十七名。中、夫に死別したもの十九名他は離緣した人々で、何れも子をつれたものなし。年齡は二十六歲から三十歲であるが、その再婚に對する希望條件が面白い。

先づ夫に死別した婦人が、第一に健康な相手を求めるのは當然の現象であるが、生別した婦人は、生活安定の人、家庭關係の煩はしくない人を第一條件にする人が多い。社會上の地位とか、學歷とか資產などを主として希望する初婚者に比して、それだけ結婚生活の現實相を見てゐる事がうなづかれる。更に面白いのは、生別した男女の相手に對する氣持である。男は、夫に生別した女を全然忌み、後家さんを歡迎する。が、女の方では妻に死別した男を望むのと、事情で生別した男を望む　と同數位である。これは女らしい優しい心理が「別れた先妻の後をうけて、自分は立派によき家庭をつくつてみよう」と考へるのであるが、男の方では、「夫に生別して再婚するやうな女ならどうせ我儘ものだらう」といふ一種專制慾を滿たされない事に對する不安からの、拒否であるらしい。いつの時代にも男とは御し難いものである。

▼人見絹枝孃の活躍

英國の女子陸上競技大會に於いて、日本の女子オリンピック選手人見絹枝孃は槍投げに新記錄を作つたといふ報導があつた。
槍投げ　百十八フイート。

▼長谷川春子氏の個展

本誌今月號の表紙畫を描いた長谷川春子氏は、七月十七日より廿一日迄五日間、東京朝日新聞社畫廊にて最近の作品を選み、個人展覽會を開催した。

▼花柳病豫防法案

花柳病豫防法案が九月一日から實施されるについて、全國藝妓屋同盟本部の同盟新聞は社說で猛烈に反對してゐる。この法律を實施されると、若い婦女子が過つて前科者となり、藝妓女中等の檢査は眞面目な者に廢業をさせ、或者には借金踏倒しに利用されると貸座敷業者は密娼の保護法だと叫んでゐる。此法案は大正五年大隈內閣以來十餘年間にわたり漸く昨年四月公布され、施行期日は勅令に讓つたもので、その第五條が眼目とされてゐる。花柳病に罹つてゐる事を承知しながら賣淫した者は三ケ月以下の懲役。知りながら中間にたつた者場所を貸た者は六ケ月以下の懲役、五百圓以下の罰金である。

▼大塚　兒所開始

東京市の大塚託兒所は廿一日から開始される。收容定員は幼兒七十人乳兒二十人　託兒料は幼兒部一日四錢、乳兒部二錢。同時に兒童健康相談所も開始するといふ。

▼拒　婚　同　盟

酒を飲む男と結婚しない拒婚同盟組織を、群馬縣北廿樂郡高瀨村の處女會員が結んだ。神奈川縣高座郡相原村と、岩手縣西磐井郡嚴美村でも同じく固い申合せが出來た。

▼嫌はれた女市長

國民新聞の傳へるところによると、北米シャトルの女市長ランデス夫人は市の廓清を圖つて非常な人氣で、再選までされてゐたが、フエミニストの仲間を集めてダンスホールを閉鎖し、疑はしいカフエーは禁止し、靴下を穿かない怪げな女は監獄にぶち込み、支那人の洗濯屋は阿片吸飲の疑で家宅捜査をやるといふハッキリした施政振りに、シャトルの人口二十萬を減じたので、今年六月の改選には男市民からついに落選をよぎなくされたといふことである。

「勞農」婦人版八月號內容

△反動的婦選
△死ぬか殺すか
△紡績女工の勝利
△勞働婦人の勝利
△勞働婦人と家庭

葛西善藏氏逝く

寡作は佳作であると叫ばしめた葛西善藏氏の病ひ篤しとの電報を受けたのは梅雨の如き陰雨にこもる十七日のことであつたが、廿三日夜十一時遂に逝かれた。病中も猶酒をたたなかつた氏、盃を口にはこびながら病床で言つた言葉が耳に殘つてゐる。「もうちつと生きて、チヤンとしたものが書きたい」と。そして枕許の机に花をおき、白い原稿紙が重ねられ、今にも墨をふくませられるやうにペンが待つてゐた。

編輯後記

『女人藝術』によつて引き出された私の戸外生活はだん〳〵愉快なものになつてくる。人をたづねて話す機會も多くなつて來て人の世のニュースを聞くことも多い。今日の日までかうした生活をあこがれてゐた自分だつにとおもふとおのづからほゝゑまれる。昨日もたえて久しい方を訪問してのかへるさに町の方へさし出た櫻の幹でないてゐる蟬の聲をきいてふとたゝずんだ。蟬について何か書いて見たいと蟬についてのいろ〳〵の詩歌文章をあつめて、每日のやうにそのまとまりをまつてゐるのだがいまだにまとまらないうちに、蟬はその生き生々した聲を夏の日におくる。あゝ一ぴきの蟬、一人の女、生の燃燒はこの一瞬に寂しくもあり又快しくもあ。(花世)

創刊號は期待通 いへん賣行がよかつた。ジャー リズムが地位や文名を尙ぶのに して、女性作家のみの作品本位の編輯をもつて立とうとする『女人藝術』がかくも衆目を惹いたことは、卽ち、いかに讀者がいゝ作品を要求してゐかるの例證ともなるでせう。

ジャーナリズムに媚びない『女人藝術』は現在の文藝界に、異彩を放つて進んでゆくでせう。

編輯同人は極めて多忙であつた。忙しいといふことは人を緊張狀態に置くものである。私達は絶えず緊張してともかくも第二號を出すことが出來た。私はその中にあつて、別に私の關係してゐる『勞働藝術家』の仕事の手傳やらで、ことに忙しかつた。その中で、私は『女人藝術』の本號に載せる論文を書き上げてすでに印刷に廻したところ頁の都合上次號に廻すことにした。(かど江)

先づ感謝しなければならないのは、創刊號の本誌が非常な歡迎を以て、忽ち世の中へ飛び散つてしまつた事である。發行後數日にしても早本社には一部もないといふ盛況は何をものたるか、我等が打つた鐘は、かくも高らかにかくもはるかまで響き渡つたのだ。そしてその歡聲の中に、第二號は生れた。今度は可成り各種の記事を集めたつもりであるが、まだ〳〵不足である。本號附錄「水泳選手番附」は如何。机上に涼風をもたらすであらう。(しづか)

創刊號が豫想以上の素晴らしい成績で人々に讀まれたことを考へると、電車の中で隣同志に乘り合はしても、道ですれちがつても、遂に知ることのない未知の親しい友達をそこら中に空想して、鉄と糊と活字の行數ばかり數へてゐる人間の心も時にうつぼつとすることがある。(素子)

創刊號の批評はすべてが嬉しい。詩人福士幸次郎氏が、美しい上品な本だと撫ながら「女子ばかりだから赤い帶をしめてゐる」と警句を吐かれた。初號が生れる、すぐにレインボーの茶話會、つゞいて音樂、舞踊、映畫の會、そのまた宣傳に總出でビラ撒きを二日間やつた。その中で二號の編輯と、七月の暑さものかはの意氣であるが、それは座つてゐる私だけで、日盛りを通つてくださる諸女史の勞苦は御禮の言葉もない。

だが、烈日の下に營々と生る力を思ふと、まだ〳〵奮鬪しなければならないと思ふ。諸方面の甚大な同情と期待にそむかない成[illegible]を、一日は一日とつゞけ、初號はほんとに赤ン坊だつたといふように進んでゆきたいと祈る。(時雨)

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	四錢
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用は一割增の事。

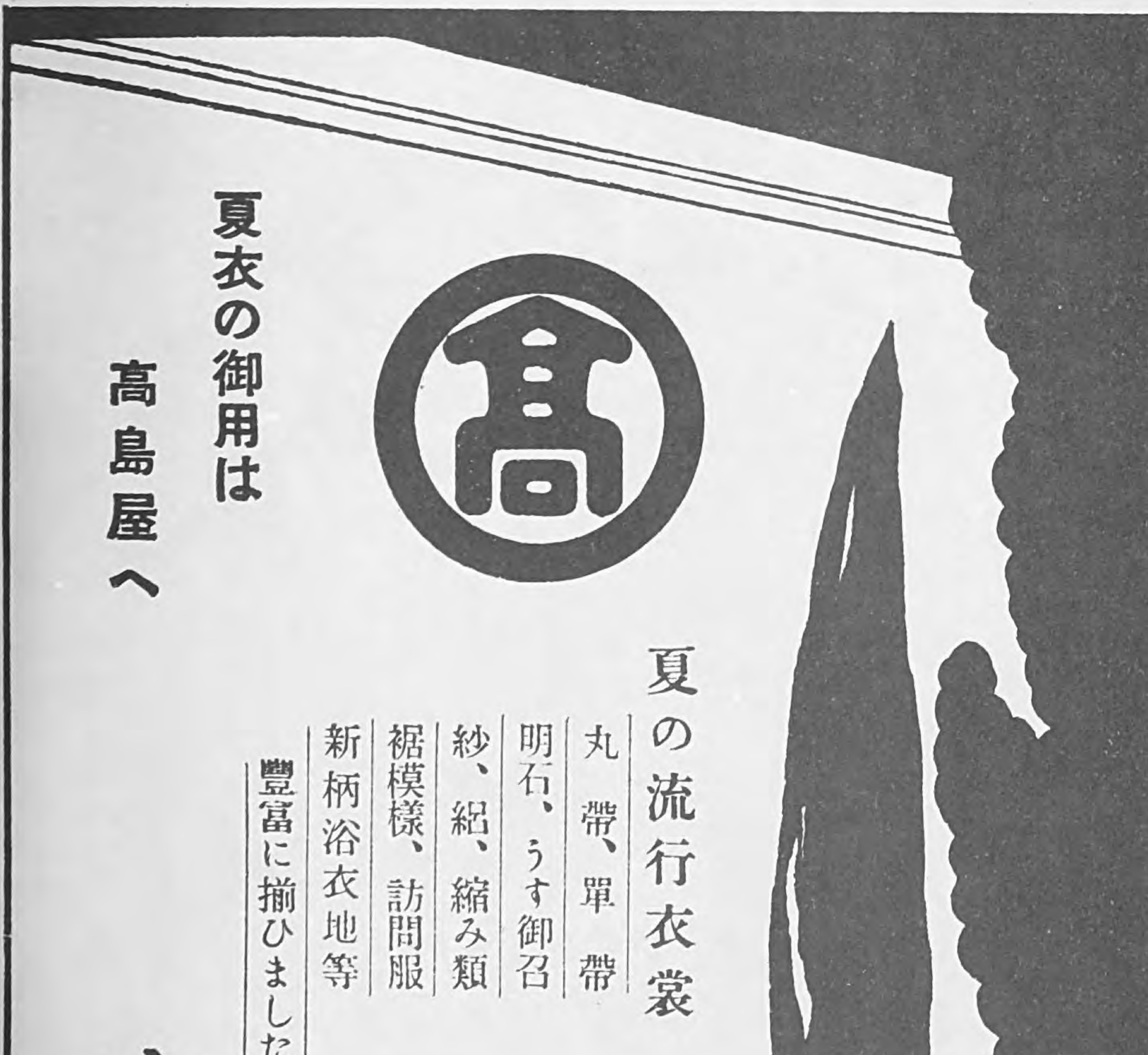
昭和三年七月廿五日印刷
昭和三年八月一日發行
(每月一回一日發行)

發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　株式會社秀英舍

東京市牛込區左内町三十一番地
發行所　女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七一五八二五


店ハ三軒集マツテオリマス ドノ店ニオ出
下サツテモ、夏ノ御洋装一式直チ
ニ揃ヒマス。
オリエンタル帽子店
オーキ絹店
電話京橋
三七四六
セキドの靴
銀座尾張町
交叉点際

昭和三年七月廿八日印刷納本



株式會社秀英舍印刷